

—北方からの歴史考—

アムール下流域^{ヌルガンとし}奴児干都司と永寧寺碑と先住民族たち



アムール下流域のティル村遠望・黄色矢印が永寧寺碑跡



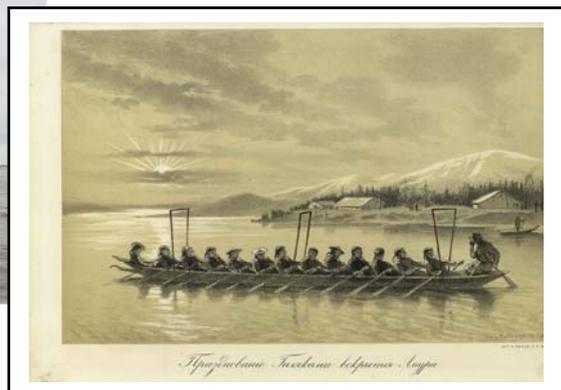
永寧寺碑記(ウラジオストク博物館)



重建永寧寺碑記 (同)



ティル丘陵寺院跡を西側から見る



アムール川解氷祭り・ニヴフ族(シュレンク)

2017年6月入梅

池田 勝宣

はじめに

日本の歴史書は一般に中国や朝鮮半島からの方面から歴史文化が伝播している考察した著書が多い。しかし近年は「日本人は何処からやって来たのだろうか」という問いに、日本人のDNAを精査すれば、どうやらモンゴロイド人種のバイカル湖周辺のブリヤード人が、我々日本人の血液型が一番多くあてはまる結論がでてくる。

筆者は前々から「北からの古代史」考察したいと考えを持っていた。北らの文化や歴史の著書を探してみると、「北からの古代史文化」を研究している方々が多くおられることが分った。それは歴史学より、民族学と歴史学を合わせた研究が多く見られ、いろいろと興味深い事が解ってきた。

そこで、論文論考の中だけでなく、自ら足でサハリンや沿海州を歩いて先住民族を踏査してみると、なんと日本人の顔に似たモンゴロイド人種が多いことに気がつく。サハリン中部・北部やアムール川下流域の先住民族地域を歩くと、正にこの地域の人々は、モンゴロイド人種の大通りであることに気がつく。あらためて対面すれば、日本の近所のおじさん、おばさんにそっくりな顔であり、唯々驚ろくばかりである。

世界の文明の発展の歴史は、農業による経済活動の発展が進み、それが人口を爆発的に増えた歴史を辿っているのである。その先祖を辿ればアムール下流域・サハリン・カムチャッカ・千島列島に居たモンゴロイドたちは、およそ4万余年前から居住し、最近の17世紀頃まで、農業生産圏でなく漁業か遊牧での種族単位による住み分け、漁食圏と肉食圏に別れて生活の歴史を刻んできた。トナカイによる遊牧民生活と、アムール下流域の漁業生活とに別れ、今日まで生活様式を変えず今日に至っている。困って、財力の経済発展は見られず、民族単位の強国の成立もなく、極東アジア地方は人口も増えず、独自の強勢国家の形成はみられなかった。ごく最近の17～19世紀に至り、農業を基盤にして経済力を持った元朝・明朝・帝政ロシア・清朝がこの地方に出進し、彼らの居住区から獲れる獣皮を求めて入り込む近代史となっている。元明の王朝時代を境に、世界先進国が「帝国主義国家」を目指す時代が到来し、先住民の居住地は、帝国主義国家の人々の入植地となり、諸民族たちは搾取される時代の歴史を刻んでいる。その列強国がアムール川下流域・サハリン島・千島列島の侵攻した時代の歴史文化を考察してみたい。その歴史文化を尋ねる物語として、図絵や写真を多くして楽しめるようにした。

アムール下流域奴児干都司と永寧寺碑と先住民族たち

はじめに	1
目次	2
1章 <small>ヌルガンとし</small> 奴児干都司と永寧寺碑記の成立	3～11
2章 <small>ヌルガン</small> 永寧寺址の発見と研究史の流れ	12～18
3章 永寧寺址から発掘遺物が出土した煉瓦類	19～28
4章 <small>ヌルガン</small> の地理	29～36
5章 奴児干周辺の先住民族たち	37～54
6章 山丹交易	55～68
7章 間宮林蔵の『東韃地方紀行』概観	69～82
8章 サハリン島占領問題考	83～94
9章 アムール川下流紀行・ハバロフスクーティル	95～109
結びにかえて	110～115

— A4横40字×行30=115枚 —

第1章 奴児干都司と永寧寺碑記の成立

ロシア連邦ハバロフスク地方ウリチ地区ティル村は15世紀前半、明帝国の東北地方を支配する軍事行政機関「^{ヌルガンとし}奴児干都司」(正式名は「^{としましし}奴児干都指揮使司」と)と付属の寺院「^{えいねいじ}永寧寺」(^{かんぜおんぼさつ}観世音菩薩を^{まつ}祀る)の遺跡が残る。ハバロフスクから河口まで1057 km、河口より約60 km^{そこう}遡航すればニコラエフスク・ナ・アムールレの町となり、さらに約60 km遡航した所がティル村となる。ティル村は中国名「^{テリン}特林」、満州語で「ヌルカン」は「絵のような」意となる。ニヴフ語では「ティル」=「崖」の意となる。

★ 歴史地図よっては「ティル」は、「特林」、「チル」の地名となっている。

★ 奴児干の呼称はヌルガン、ヌルカン、ヌルハンと著書により異なる。



ティル村高台から永寧寺記遺跡を遠望、黄色の矢印が永寧寺跡、正面の奥がアムグン川上流となる。黄矢印の左奥がアムール川上流となる。右手前へと流れが下流、この合流点がティル村となる。写真撮影は2015年8月末夕方の時間帯となる。



① 永寧寺遺跡に大砲と手前に礎石有、奥はアムグン川 ② の写真は『**БУДДИЙСКИЕ ХРАМЫ XV в. В НИЗОВЬЯХ АМУРА**』А・R・アルテミエフ著・(アムール下流域でのXVの仏教寺院跡)より

ヌルガンとし 奴兒干都司の設置

明代(1368-1644)に奴兒干都司が設置されたティル村の地は、^{りょう}遼・金時代から「奴兒干城」が置かれた所であり、元代には^{とうせいげんすいふ}東征元帥府が置かれていた要地でもある。明代に入り3代皇帝、永楽帝の永楽7年(1409)、東北地方を支配する機関として「^{ヌルガンとし}奴兒干都司」が設置された重要な要衝地となっている。明朝は15世紀前半、アムール川下流域を統治するために、奴兒干都司を拠点として、さらに明朝の支配力はサハリン島(庫頁島)までに及び、サハリンアイヌを「苦夷」「骨嵬」(元代クギ、クィェ、漢字で庫野・庫葉・庫頁)と呼ばれた。サハリン島の苦夷(アイヌ)たちはアムール河口を^{さかのぼ}遡り、明朝のヌルガン仮府の地まで朝貢と交易に赴いていたのである。

明朝の奴兒干都司の設置の経緯は、永楽2年(1404)、^{えいらく}忽刺温(ハルビン付近)の女真首長把刺答哈らが来朝(南京)し、奴兒干(ティル)の地に「明」の交易場の拠点を設ける事を要請した。これを受けて、明朝は「^{ヌルガンえい}奴兒干衛」(辺境地軍駐留)を設置し、把刺答哈ら4人を「指揮同知」(衛の官職)に任命した。永楽7年(1409)に奴兒干のモンゴル人首長、^{フラドンヌ}忽刺冬奴ら65人が大挙して来朝し、奴兒干に「明の仮府」を設ける事を要請した。この申し出に永楽帝は、奴兒干衛を都指揮使司(官職)に昇格させ、東北地方全体を管理支配することに至る。^{りょうとう}遼東都司から兵2百を付けて奴兒干に派遣し、以後、2百~5百の兵が交替で常駐軍として東北地方への交通の起点、海西衛(吉林省扶余県)から奴兒干に至る「^{いぬえき}狗站」(犬橿の駅)も整備した。



『^{だいみんじつろく}大明実録』(全3058巻・明朝の13代の実録)よれば、遼東都司や諸衛の官員の地位のままで奴兒干都司の職務を兼任していた。奴兒干都司は、アムール中・下流域及び

遼東都司支配地域はモンゴル人や女真人の明朝への協力によって維持されていた。このように都司の運営経過後、奴兒干都司の実質的な設立を成し遂げたが、永楽9年(1411)、内官(宦官の中央諸官庁所属官人)の亦失哈(海西女真部族長一族出身)の遠征であった。『勅修奴兒干永寧寺碑記』によれば、亦失哈は「官軍千余人・巨船25艘」を率いて奴兒干に至り、都司の開設と各地に「衛」(砦)を立てたとある。この時には北サハリンから南サハリンに衛所を設置してサハリン島(唐太島)全体を統治していたようである。★()内の説明は筆者による。

かくして永楽11年(1413)秋、亦失哈は自らの事業の総仕上げとして、奴兒干の地に永寧寺(観音菩薩祀る)を建立し、その完成記念として「永寧寺碑記」を建て、由緒を刻んだのが『勅修奴兒干永寧寺碑記』である。

後、5代皇帝宣徳帝の宣徳7年(1432)、再び亦失哈は「官軍2千、巨船50艘を率いて、奴兒干の地に赴き、奴兒干都司を復興させた」と「永寧寺記」にはある。その経緯は、ヌルガン周辺にいた吉列迷(ニヴフ人)らによって永寧寺は破壊されてしまった。その永寧寺を再建したのが「重建永寧寺」で、翌年(1433)に新たな記念碑を建てたのが、『重建永寧寺記碑』となるのである。

(参考・『青森県史研究』第5号・平成11年8月末調査に入る「ロシア連邦内での奴兒干都司・永寧寺跡および永寧寺碑・重建永寧寺碑」調査報告より)

奴兒干都司の設置の経緯を探る 『奴兒干都司考』鳥居龍蔵著を参考にして経緯

を見て行く。鳥居は「奴兒干」とする。★「兒」「兒」は同じ。★文は読み易くした。

明代の初期に、黒竜江(アムール川)の特林(ティル)に奴兒干都司を設置し、付近一帯を管轄するばかりでなく、遠く庫頁島(クイェダオ=唐太島)にまで及んでいたことは明白である。『奴兒干都司考』に関しては、『大明實録』『明氏史』『遼東志』『大明一統志』等に記載があり、『柳邊紀略』の中でその概略を記述している。その文を引用すると、

《明代のとき、遼鎮辺外(吉林省中北部から長春市・ウリヤンハイ三衛)の部落は分かれて二種類あった。西北にあるものは三衛(衛=国境駐留軍)と言う。三衛とは、泰寧(オンリウト・黒竜江省)・福餘(オェード・最東)・朱顔(ウリヤンハイ・朶顔衛)となり、東北の種族は女直といい、種族は三つに分かれる。海西のものは海西女直(吉林)といい、建州毛憐のものは建州女直(満州南部)といい、極東(アムール川下流域)の最遠のものは野人女直という。都司一を置き(設置)、奴兒干都司と言う。衛三百八十一を置き、三

衛を合わせれば三百八十四なる。》

《付記として、^{あん}按ずるに、『明実録』の永樂二年二月、^{フラウエン}忽刺温等の處の女直野人の頭目、^{バラタハ}把刺答塔が来朝して、奴兒干衛を設置することになった。^{バラタハ}把刺答塔、阿刺孫ら四人が、指揮同知(従三品)となって、古驢らを千戸所^{ちんぶ}鎮撫(軍官職)となる。^{こういん}誥印冠帶^{おそき}襲衣(みことのりの印と名誉の冠表着)及び鈔幣(紙幣)を賜うことに差額があった。》とある。

更に、《永樂七年^{うるう}閏四月、奴兒干都司を設け、東寧衛(瀋陽市)の指揮^{こうおう}康旺を指揮同知として、兵二百を^{あたえ}興へ、護る事を調印する。千戸(千戸制・チンギス・ハンの軍事組織、下に百戸、十戸の区分長下の軍集団)王^{おうちようしゅう}肇^{とし}舟^{せんじ}ら都司指揮僉事(まとめ役)となり、その地方衆を統一した。歳ごとに^注海青(かいせい・タカ)、^{てん}貂(イタチ科テン属)皮等の物を朝貢した。なお^{いぬえき}狗站(犬橿)を^{ていそう}設けて^{ていそう}遞送(駅から駅へ)した。六月、經歷司、經歷一員を置く。十二年閏九月、遼東都司に命じて兵三百に増員し、往来してその^{いん}印(印鑑と衛)を護もらせた。二年を^こ躰えて(毎に)帰還させた。》と、更に、

《^{せんとく}宣徳三年(1428)正月、都指揮の^{こうおう}康旺、^{おうちようしゅうとうダルガン}王肇舟^{ひとつ}佟答刺哈に命じて奴兒干の地に往き、奴兒干都指揮使司を設置して、並びに都司銀印一、^{いん}經歷司銅印一を賜う。六年五月、指揮同知の^{とうダルガン}佟答刺哈^{てつ}の^{とし}侄(身内)の^{とし}勝に命じて都指揮僉事(官職名)を襲名した。八年七月、^{とし}佟答刺哈の妻王氏来朝し、馬及び方物(当地特産)を朝貢した。八月、都指揮使(一省軍政の司)の^{こうおう}康旺の子の^{こうおう}康福が指揮同知を襲位した。閏八月、都指揮同知の王肇舟^{ろうしつ}が老疾(老人)になったので、その子の貴に命じて襲名して都指揮^{せんじ}僉事(衛官)となり、副千戸の^{ふち}祿を与えた。》とある。

注・^{かいせい}海青(鷹)は^{かいとうせい}海東青と称す鳥名。黒竜江の下流域河口の大海辺縁に生息する。クマタカ(白ハヤブツとも)の中の最優秀鷹の海青である。その色は青くして海東より飛来し、海東青又は海東と名づける。『元史』巻 59、合蘭府水達達等路の条に《^{しゅんきん}俊禽の海東青という鳥あり。海外より飛来して奴兒干に至る。土人はこれを^ら羅して(捕獲)以って土貢とする》とある。女真に鷹狩(捕獲)を背負わせ、海東青の羽(武器矢羽)で作った^{きゆう}裘(衣)甚だ珍貴であったという。

『明一統志』巻 89 には《海青は、五国城の東に出だす。小にして健なり。能く天鵝(白鳥)を^と擒える(鷹^{たかじょう}匠師狩)。爪白なるものは尤も異なり》という。遼東の初めに、これを用いて諸鳥を^と擒えることが、最も盛行した。当時の黒竜江畔の女直人に命じて、この鳥を捕え、これを受け取るために衛所へ官吏らを派遣した。遼代、黒竜江方面に

於ける進展は、この鳥によって興り、その滅亡もまたこの鳥によって決まった。

『明一統志』等の記載によれば、当時の物産は、海青・大鷹・黒狐・貂鼠・海豹・海獺の皮・海螺の皮・笏角(セイウチの牙)・好刺(各種の鹿角)・鯨須(鯨ヒゲ)となり、本国では大変珍しく貴重なものとなる。明朝のアムール川下流・カラフト島への軍事東征は、海青の羽根とクロテンの毛皮の獲得が東征軍最大の目的となっていた。



『De arte venandi cum avibus』（『鳥類を利用した狩猟技術』）に描かれた2人の鷹匠。鷹匠の鷹狩は紀元3千年前から、中央アジア・モンゴル高原が起源とされる。ローマ帝国のフリードリヒ2世は上記の鷹狩りの研究書を書いている。（ウィキペディアより）

衛所・明朝の十進法に基づく軍事組織制度、十戸・百戸・千戸所となる。

『明実録』に見えるアムール川下流域に設置された10所の「衛」と唐太島に設置された3カ所の「衛」があった。奴兒干都司配下の「衛」の役人は、当該地域の民族の首長層が特産物を持参して明朝に朝貢した際、彼らを「衛」の役人として任命した。これは、現地の各部族の族長に自治区に行政を任せていることになる。

「衛」の役人は、一般に「指揮使」1名、「指揮同知」2名、「指揮僉事」4名、「衛鎮撫」2名を常とし、これらの役職を明朝の官制に従えば、「指揮使」は明朝の正三品官(歳級禄・米600石と俸鈔300貫)、^{ふちがね}「指揮同知」は(歳級禄・米500石と俸鈔300貫)、「指揮僉事」は(歳級禄・米400石と俸鈔300貫)、「衛鎮撫」は(歳級禄・米170石と俸鈔90貫)に相当するものとされる。

族長は明朝の官職とは別で、人事異動ない世襲制となっており、当該地域の首長層を「衛」の各級役人に任命する際、彼らに「誥印・冠帯(礼装)・襲衣(上着)」等を与えた。「誥印」とは「勅書」と「官印」のことで、「勅書」には官職名が記されている。彼らが明朝に朝貢する場合、明朝の役人が遼東地域の各関門でこの「勅書」を審査して入京を許可する重要な「誥印」となっていた。また、彼らが明朝への朝貢の際、地域の特産物を持参する義務があり、『大明會典』「海西女直」の貢物に、「馬・貂鼠皮(クロテン)・舍列孫皮(オオヤマネコ)・海青(鷹)・兔鶻(ハヤブサ)・^{きだか}黃鷹・殊角(アザラシ牙)

と記されている。『遼東志』「乞列迷(ニヴフ)貢ぎ物」には、「海青・大鷹・皂鷗(クマタカ)・白兔・黒狐・貂鼠・呵膠・黒兔」と記されている。

明朝はこれらの貢物者の衛所役人(地域の族長)に対し手厚い賞賜品を与え、綵緞(絹織物)・絹・紵絲(糸)・衣服・靴などであった。明朝は永楽・宣徳年間の交易活動は、国内での韃靼部族紛争が続いたため、満州の馬をはじめ、各種獣類の毛皮、海青、薬品(チョウセンニンジン等)等々が、防寒用、軍事用、装飾用、賞賜用などに使う頻度が高まり、明朝は行政上、毛皮を必要欠くべからず物となっていた。(『中世の北東アジアとアイヌ』「明朝のアムール政策とアイヌ民族」榎森 進著参考)

元代の東征元帥府とカラフト島への蒙古襲来を考える 北からの蒙古襲来について、『奴児干都司考』鳥居龍蔵著より参考に考察してみたい。★()内は筆者による。

鳥居龍蔵は北からの蒙古襲來說に、《奴児干の地名は女直語ではなく、蒙古語に属するもの。元の世祖(モンゴル帝国大ハーン・クビライ)の時、ここ奴児干の地に東征元帥府(軍政府)を設置し、蒙古軍は奴児干を中心にして黒竜江河口から庫頁島(唐太島)に至る極東地域を統治した。奴児干という地名はこの時に起源とする。元の世祖時代に蒙古軍は日本を征討したが果たせず、軍船を造り、再び日本を征討が考えられ、この地は造船所になっていた。》とあり、鳥居龍蔵は北からの蒙古襲來說を考察している。

そして、《蒙古人たちは、松花江方面から黒竜江(アムール)畔に至る「站」(駅・兵站)設け、夏は船で航行し、冬の結氷に犬(狗站)に橇を曳かせた。当時、奴児干の地には元の役人・軍人が居住し、元の勢力を誇示する「東征元帥府」設置されていた。しかし、この地はギリヤーク(ニヴフ)が多く居住する地域となり、歴代王朝に反抗する輩の配流(流刑囚)地ともなっていた。》

鳥居は明朝がやって来る前は永寧寺や観音寺は無く、ラマ廟の仏塔のみが立っていて、ラマ寺院を形成し、この仏塔から誦教礼拝させ、いたわり諭していたと言っている。しかもその仏塔は現在失われペルミーキンの描いた絵画で想像するのみであると。

《元朝は黒竜江地域の諸民族支配を目的とし、ラマ教を布教し、ティルに東征元帥府(駐留軍2百から2千人位)置いていた。アムール川下流域から唐太(庫頁島)北部の地域に居住していた「吉里迷」(吉烈滅)は元朝に服従していた。1264年(至元元年)、吉里迷は「骨嵬」(元代のアイヌ族)が毎年のように侵入(鷹羽や貂皮の捕獲)してくると、元の世祖クビライに訴えた。骨嵬と元軍(千人位か)は20年にわたり小競り合いが続いた。

1284年からの3年連続の元軍の攻撃によって、唐太アイヌ勢力は黒竜江流域や唐太中部に追いやられた。鳥居はこれが蒙古軍の唐太島への侵攻の粗筋の論となっているわけで、この「モンゴルの唐太侵攻」が13世紀半ばから14世紀に断続的に行われた記録に、元寇(げんこう)(文永・弘安の役)と比較され、「北からの蒙古襲来」と呼ばれている説なる。鳥居龍蔵の「北からの蒙古襲来」説に疑問を投げかけているのが、中村和之著の「北からの蒙古襲来」である。次に中村氏の「北からの蒙古襲来」説を見て行く。

北からの蒙古襲来考 「北からの蒙古襲来」の鳥居説を引く榎森進著『アイヌ民族の歴史』の論文に、「13～16世紀の東北アジアとアイヌ民族」から、元帝国が唐太(サハリン)島へ侵攻してアイヌ攻撃をした考察がある。その反論として中村和之が「北からの蒙古襲来」は、唐太への本格的な侵攻ではなく、規模が数千人の元軍の行動であったと考察している。この中村氏の説は、元朝はティル村に東征元帥府を設置し、その設置の年代は明らかではないが、この地はヌルガンと呼ばれ、金代に奴児干城があった所である。史料で残されている部分には、『元史』巻119、「木華黎伝」(チンギス・カンの左翼諸軍24の諸千戸隊・万戸長)の中に立てられた「碩徳の伝」を、中村和之訳『東北アジアの歴史と文化』「北からの蒙古襲来・をめぐる諸問題」中村和之著(北海道大学出版会)より、この説を読んで行くことにする。

《碩徳は、通敏(めいびん)で幹才(さいのう)が有り、世祖(クビライ)が即位すると、宿衛(しゅくゑい)に入って朝(朝廷)の儀(ぎ)を典(つかさど)った。後に同知通政院事(官職)となった。嘗(す)でに、遼東の斡拙(ウデヘ)・吉烈滅(ニヴフ)の二種の民が、数(たびた)び寇(こう)(外から侵入して害を加える)を為(な)しているので、宜(きん)親臣(しんしん)を遣(つかわ)し、之(かれら)を論(ろん)そうという言(い)見(み)があった。上(おかみ)は其(その)人(人選)に難(なや)んだが、僉(みな)は「惟(おも)うに碩徳は元勳(しん)の世胄(しそん)であり、識慮(しりよ)は深長(ふか)く、使(べ)き可(い)である」と曰(い)った。

帝は深く之に然(同意)した。以(これ)で碩徳に問(しつもん)したところ、対(こた)えて曰(い)うには、「先臣(せんしん)は太祖皇帝(たそ)に従(したが)って天下(てんか)を定(さだ)め(へ)いて(い)しました。險艱(けんなん)を辞(じ)さず、以(も)って勲業(いさお)を立てました。陛下(へい)は臣(しん)が年少(ねんしょう)で、愚戇(おろか)であるのを以(き)にする(つ)っておられません。願(ねが)はくば行くことを請(こいねが)います」と。帝は大いに喜び、御衣(ごい)を賜(たま)い、燕(えん)かいを錫(たま)わ(も)って以(も)って行(い)かせた。

碩徳は至ると、諸(もろもろ)の万戸(ばんこ)を集めて兵(つら)を陳(ちん)ねて要(ようしよう)を衝(つ)いた。其(その)渠魁(きょかい)(アイヌの

頭目^{とうもく}を詰^ち(といただ)して之^{ちゆう}を誅^{おど}した。脅^{おど}されて従^{ちゆう}っていた者は皆^{こうさん}降^{みかど}した。帝^{みかど}は大いに悦^{えつ}び、賞賚^{しょうざい}(ほうび)には差^さ(ちがい)が有^あった。・・・》とある。

ここに見える碩^シ徳^デは、チンギス・カンに仕えた功臣^{しんげん}の木^ム華^カ黎^リの子孫^{しよん}で、碩^シ徳^デに率^{りつ}いられた元^{げん}軍^{ぐん}は、斡^ウ拙^{ジエ}・吉^キ烈^レ滅^ミ(唐^{たう}太^{たい}アイヌ)を服^{ふく}属^{じゆく}させた。斡^ウ拙^{ジエ}とはツングース系の集^{しゆ}団^{たん}で、アムール川^{あむるがわ}下^げ流^{りゆう}域^{いき}に居^い住^{じゆう}する先^{せん}住^{じゆう}民^{みん}族^{しゆく}の「ウ^ウデ^デへ^へ族^{しゆく}」につな^つがる。また吉^キ烈^レ滅^ミは吉^キ列^レ迷^ミや吉^キ里^リ迷^ミとも書^かき、アムール川^{あむるがわ}下^げ流^{りゆう}域^{いき}からサ^さハ^ハリ^リン^ン島^{とう}に住^{すま}む漁^{りしよ}撈^{らう}民^{みん}の「ニ^ニヴ^ヴフ^フ族^{しゆく}」とは、アイヌ族^{いぬしゆく}を指^さしている。

碩^シ徳^デの活^{かつ}動^{どう}は 1264 年^{ねん}に元^{げん}軍^{ぐん}は初^{はつ}め^めで骨^ク嵬^イを攻^{こう}撃^{げき}した。『元^{げん}史^し』卷^{くわん} 5、世^せ祖^そ本^{ほん}紀^き 2、至^し元^{げん}元^{げん}年^{ねん} 1 1 月^{げつ}辛^{しん}巳^み(干^{かん}支^し組^{ぐみ} 18 番^{ばん}・西^{せい}曆^{りつ}では 1264 年^{ねん} 1 1 月^{げつ} 3 0 日^{にち})を見^みる。

《骨^ク嵬^イ(唐^{たう}太^{たい}アイヌ)を^{せい}征^{ぼつ}した。是^ぜより先^{せん}、吉^キ列^レ迷^ミが内^{ない}附^ふ(ふくぞく)し、其^{その}の国^{くに}の東^{とう}に骨^ク嵬^イ・亦^い里^り于^う(アイヌを指^さしていると思^{おも}われる)の^{ふた}両^{りやう}の部^ぶ(部^ぶ族^{しゆく})が有^あって、歳^{さい}(毎年^{まいねん})来^き(や^やつてき)て疆^{きやう}(境^{きやう}界^{がい})を侵^{おか}すと言^{こと}った。故^{そこ}で住^す(進^{しん}撃^{げき})して之^{これ}を^{せい}征^{ぼつ}した。》とあり、元^{げん}朝^{てう}は骨^ク嵬^イと亦^い里^り于^うとが吉^キ里^リ迷^ミ(ニ^ニヴ^ヴフ)の領^{りやう}域^{いき}に侵^{おか}入^にするこ^{こと}を^さ防^{ぼう}ぐた^{ため}に、骨^ク嵬^イを攻^{こう}撃^{げき}した^{ので}ある。骨^ク嵬^イとはアイヌのこ^{こと}であるが、亦^い里^り于^うが骨^ク嵬^イと^{おな}じ方^{ほう}向^{きやう}から吉^キ里^リ迷^ミの領^{りやう}域^{いき}に侵^{おか}入^にしているこ^{こと}から、亦^い里^り于^うも骨^ク嵬^イと^{おな}じアイ^いヌ^に系^{けい}譜^ぷに属^{ぞく}すると思^{おも}われる。

元^{げん}朝^{てう}が骨^ク嵬^イを攻^{こう}撃^{げき}したのは、1284 年^{ねん}こ^{こと}である。『元^{げん}史^し』卷^{くわん} 13、世^せ祖^そ本^{ほん}紀^き 10、至^し元^{げん}21 年^{ねん} 10 月^{げつ}辛^{しん}西^{せい}(1284 年^{ねん} 11 月^{げつ} 25 日^{にち})、《・・征^{せい}東^{とう}招^{しやう}討^{たう}司^しが兵^{へい}を^も以^もて骨^ク嵬^イを^{せい}征^{ぼつ}した・・》とあり、更^{さら}に至^し元^{げん}22 年^{ねん} 10 月^{げつ}乙^い巳^み(1285 年^{ねん} 11 月^{げつ} 4 日^{にち})となる。

《征^{せい}討^{たう}招^{しやう}討^{たう}司^しの塔^た塔^た児^に帯^{たい}と楊^{よう}兀^{わく}魯^ろ帯^{たい}に詔^{しよ}(みこ^{こと}の^りを^くだ)し、万^ま人^{にん}(兵^{へい} 1 万^ま人^{にん}・数^{すう}千^{せん}人^{にん}と推^{おし}測^{そく}する)を^も以^もて骨^ク嵬^イを^{せい}征^{ぼつ}させる。因^よ(そこ)で楊^{よう}兀^{わく}魯^ろ帯^{たい}に三^{さん}珠^{しゆ}の虎^こ符^ふ(銅^{どう}虎^こ符^ふ・将^{しやう}軍^{ぐん}が兵^{へい}を^さ徴^{てい}発^{はつ}時^じの証^{しやう}明^{めい})を^さ授^さけ、征^{せい}東^{とう}宣^{せん}慰^ゐ使^し都^と元^{げん}帥^{すい}と^な為^なす。》と。

更^{さら}に翌^{よく}年^{ねん} 1286 年^{ねん}、『元^{げん}史^し』卷^{くわん} 14、世^せ祖^そ本^{ほん}紀^き 11、至^し元^{げん}23 年^{ねん} 10 月^{げつ}己^き酉^う(11 月^{げつ} 3 日^{にち})に、《塔^た塔^た児^に帯^{たい}・楊^{よう}兀^{わく}魯^ろ帯^{たい}を^つ遣^{せん}し兵^{へい}万^ま人^{にん}・船^{せん}千^{せん}艘^{さう}を^も以^もて骨^ク嵬^イを^{せい}征^{ぼつ}した。》この記^き述^{じゆつ}によ^よれば、1 艘^{さう}に 10 人^{にん}乗^{のり}り込^こみ唐^{たう}太^{たい}島^{とう}を攻^{こう}撃^{げき}したこ^{こと}になる。

元^{げん}朝^{てう}の^あム^むール^る川^{がわ}下^げ流^{りゆう}域^{いき}や唐^{たう}太^{たい}島^{とう}を^めぐ^{ぐる}る支^し配^{はい}は、あ^あく^くま^{まで}骨^ク嵬^イや亦^い里^り于^うを吉^キ里^リ迷^ミ(ニ^ニヴ^ヴフ)の領^{りやう}域^{いき}から追^おい^い出^だす軍^{ぐん}事^じ行^{ぎやう}動^{どう}であ^あったと思^{おも}われる。海^{かい}青^{せい}の羽^う根^{こん}、鷹^{てん}羽^う、貂^{しよ}類^{るい}の

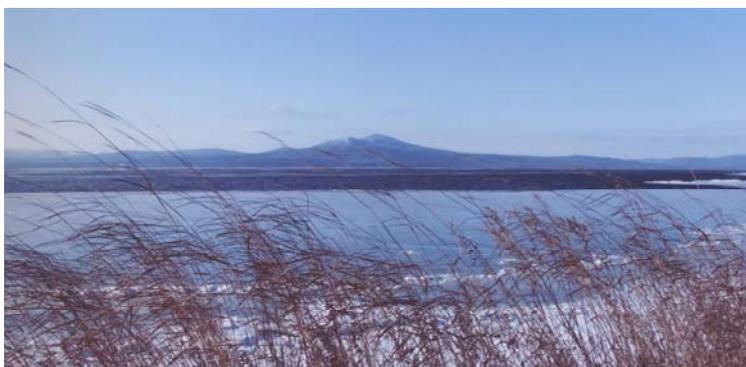
獣皮の確保ための侵攻であり、日本征服の意図を持った軍事行動ではなく、アムール川下流域・唐太島より元朝政府への貢品と交易品の確保にあったと思われる。

分かりやすく言えば、吉里迷の民が、骨嵬と亦里于が毎年のように侵入して来ると、世祖クビライに 1263 年訴えた。そして、唐太島中部辺に居住していた骨嵬が、モンゴル建国の功臣、木華黎の子孫である碩徳の 1264 年遠征により、モンゴル軍に骨嵬は服従した。ここに登場する吉里迷はギリヤーク(ニヴフ)、骨嵬(アイヌ)・亦里于はアイヌ系の夷を指している。この訴えを受けて元朝は骨嵬を攻撃した。これが所謂、「北からの蒙古襲来」なのである。

苦兀・骨嵬・クイエについて 元代の中国東北地方の地誌『開原新志』や 16 世紀前半頃に編纂された『遼東志』に、アイヌの祖先といわれる苦兀・骨嵬・クイエについて次のように記している。

《苦兀は奴児干の東の海にいる。身体に毛が多い。頭に熊皮を帯び、身には花布注を着る。木の弓を持ち、矢の長さは一尺あまり、鏃注に毒を塗っていて、あたれば必ず死ぬ。ナイフ、刃物は堅く、鋭い。父母が死ぬとその内臓を取り去り、その遺体を日にさらして乾燥させる。家に入出入りする時それを背にし、食事の時には必ず祭るので、家の中では死者に向かい合うことはない。三年たつとそれを埋葬する》とある。

★注「花布」は布ではなく、アットゥシ(シナノキなどの内皮の繊維で織った織物)のような樹皮の繊維の織りものに紋様を施したもの。★「矢」の鏃注に毒を塗り狩猟していた。死者の埋葬は、後のサハリンアイヌ習俗、ミイラもみられる。★クイエがサハリンアイヌの祖先となり、漢字で庫貢クイェ・庫葉クイェと呼ばれ、元代にはクイ=骨嵬と呼ばれ、明代にはクイ=苦兀クイと呼ばれた。



左写真・蒙古軍はこのアムール川河口(左へ)下航してサハリン島へ向かったのであろうか

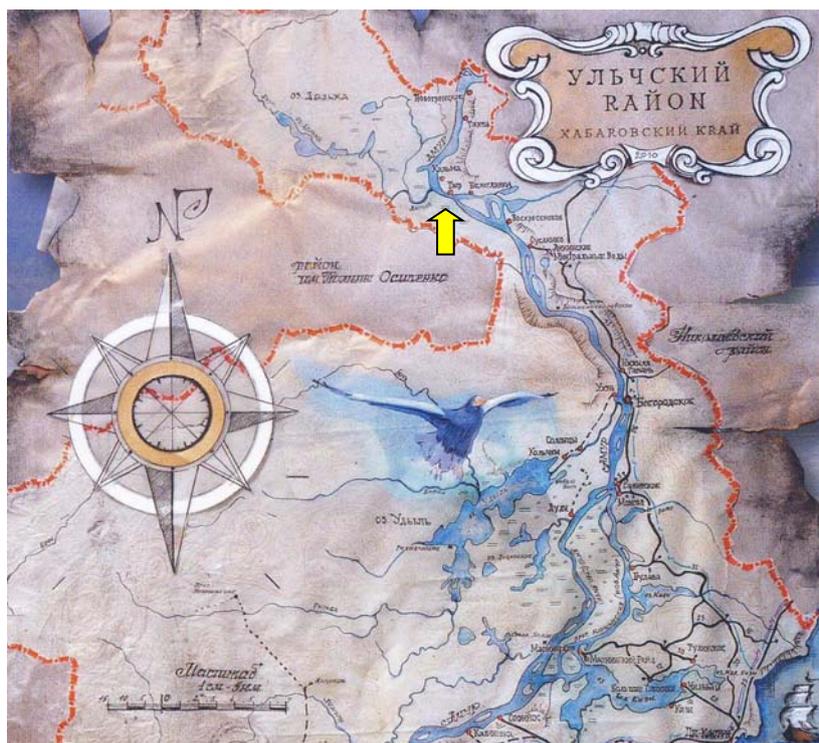
ニコラエフスク街から河口方面へ

15 km 下った所、この写真はニコラエフスク市職員の案内者よりプレゼントされたもの。

第2章 ヌルガン永寧寺跡の発見と研究史の流れ

アムール川の河口から 153 km 遡った右岸、アムグニ川との合流点にティル村の断崖の上に、1650 年ロシア人探検家によって初めて仏教寺院跡を発見された。

1675～1678 年、ロシア外交使節として中国に赴任した N・G・スパーファリーは次のように記している。「我々がコサック兵は、私が赴任するまでの 20 年間、アムール川流域と、河口で中国人と戦ったが、彼らが言う事には、アムール川の河口から 2 日船で遡ったところに、まるで人の手によって削られたかと思まがう険しい断崖があり、そこで 21 プード(1 プードは 16,38 kg × 21 = 343,98 kg) はあろうかという中国製の鐘^{かね}が一つと、中国文字が刻まれた 3 つの石碑を発見した、との事であった。現地の人々がコサック兵に語った話によれば、その昔、海からアムール川を遡って当地を巡幸した中国の皇帝が、記念に石碑と鐘を建てたという。」と聞いていると語っている。(『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』A・R・アルテミーエフ著より)



黄色矢印がティル村
「Тыр」とある



ティル村地域の地図(『ЗЕМЛЯ,ГДЕСЧАСТЛИВ ЧЕЛОВЕК』ウリチ市区 80 周年記念誌・「ここで幸せな人々の大地」筆者の訳)・左図はウリチ地区ティル村とニコラエフスク・ナ・アレームの位置図

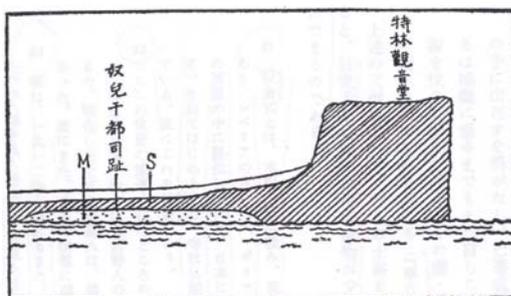
永寧寺遺跡について アムール川の河口から約 120km 遡った右岸に、ティル村の断崖(川面より約高さ 35m)に永寧寺跡がある。ロシア人ガイドによれば、ティルの「テ」は、英語の T 発音に近く「Tィル」の発音となるという。西からアムグニ川とアムー

ル川に合流する地点の対岸に、15世紀初頭に建てられた仏教寺院遺跡がある。このティル村の位置は、ロシア極東部のアムール川河口の街、ニコラエフスク・ナ・アムール港湾都市（人口約3万）から約60km遡った所となる。ニコラエフスクは1920年に^{にこう}尼港事件が起きた街でもある。ロシア革命の内戦時に（大正9年）尼港事件が起き、日本人731人の犠牲者を出した。この事件後、日本政府の態度はその日本人犠牲者の多さに国民感情の反発を招き、日本軍のシベリア出兵駐留を長引かせた経緯ともなっている。この時の革命軍の大砲が現在ティル丘陵の上に据えられている。

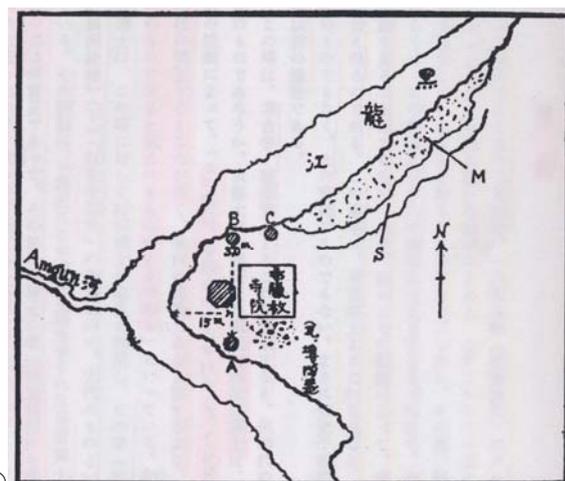


ティル村を眺望、黄色矢印が永寧寺石碑跡、緑色矢印が奴児干都司設置跡と推定。左側(上流)から右側へ流れるアムール川、正面奥がアムグニ川、合流点がティル村となる・『ウリチ地区80周年誌』より

鳥居龍蔵の絵図・奴児干都司と永寧寺及び観音堂の遺址SはMよりやや高い段丘となる



図①



図②

①『奴児干都司考』鳥居龍蔵著 1947年 ②永寧寺遺跡平面図・A永寧碑・B八角陀羅尼鐘・C宣徳碑

図①解説・『奴児干都司考』鳥居龍蔵全集6巻「奴児干都司の遺址」の解説に、

《^{テリン}特林(ティル)の丘陵より約50mばかり低い所に低地がある。この低地は、SとM

との二層より構成され、SはMよりやや高い。地理学上より考察すると、江水(黒竜江)の作用によって形成された段丘となる。私がここを奴児干都司であるとした理由は四つある。一つは、この地が奴児干都司と関係がある永寧寺観音堂に接近している。二つは、ハバロフスクからアムール上流にかけて、このような風景の絶景の場所がない。三つは、黒竜江に臨み、森林に囲まれ、一小河流があり、船の出入りに便利であり、交通や彼らの生活において最も便利な地形であること。四つは、ここS・Mの平地が黒竜江中において実に文化生活の集落であることである。ここを選定して奴児干都司を設置したことは、当然の事実で、M地において採集を行ったが、ごくわずかの青磁、白磁の破片と、少しばかりの^{せんかわら}磚瓦(粘土で焼いた瓦)の破片を得た。磁器の破片は細かな破片であったが、明代あるいはそれ以前の中国の磁器がすでに輸入され、使用されていたことが分る。さらに、M地ではなお一つの残存する^{いしうす}石臼を発見し、臼の深さは27cm強であり、直径は30cm強であり、それはギリヤーク人(ニヴフ)あるいは女直人が^{きね}杵を以って穀物を砕くのに用いたものと見ることができる。・・・》とある。

図②・《私が、1919年10月9日に特林丘陵上に上って調査したことと、ペルミーキン(ロシア人・ティル丘陵で1855年に石碑・磚塔の絵図を描く)の当時の調査とは既に地形は大いに異なっている。背後の森林は伐採され、露出する岩石を除くと何等の痕跡もなかった。ロシア人の話によると、今を去る15年以前に、二座の石碑をウラジオストク博物館に運ぶ作業時において、絵図に残されている^{せんとう}磚塔(レンガ建築)は、ロシア人によって完全に破壊されてしまった。今は永樂・宣徳の二碑もなく、今日、ここには何ら歴史考古学上の遺物も存在していない。私は、特林に居住するロシア人の古老に当時の存在状態を聞いた。その言によると、絵図の^{せんとう}図③(下記)が^{せんとう}磚塔となる。上記の永寧寺跡の平面^{せんとう}図②のA、B、Cは石碑となる。A、Bの距離は約30m離れており、Bは断崖のきわめて危険な所に^{せんとう}磚塔は建てられている位置となっていた。磚塔は断崖の辺縁を隔てること約15mの所にあり、東方の中央に位置している。・・・》とある。

^{せんとう}磚塔のどこへ消えたか 筆者の推測は、断崖の直ぐ近くに^{せんとう}磚塔は建てられていたとペルミーキンも記述している。ロシア探検隊は2座の石碑はウラジオストクへ輸送されている。しかし、謎は^{せんとう}磚塔である。図③から想定すれば、現代の建築科学工学を以ってすれば可能であろうが、当時の建築の技術水準では^{せんとう}磚塔を解体し、輸送できる

建材ブロック状に切断し、建物より取り外しできる形状を作ることができたであろうか。又、化粧レンガを剥がしたらしたら、塔そのものが、バラバラになり輸送できる状態ではなかったであろう。輸送できるブロック状の建材加工ができないので、やむを得ずアムール川に投げてしまったのが真相と考える。

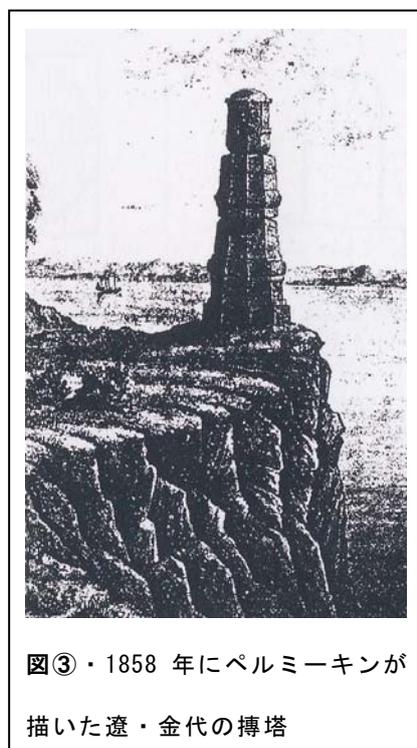
憶測すれば、輸送することが困難な事情から、ロシア政府は塔をそのままティル丘陵に残しておけば、このアムール下流地域が、中国の領土として認めることになる。後々のことを考えれば、跡形もなく、塔の痕跡を無くすように、政府の厳命があったのではないかと思えてならない。因って鳥居龍蔵がティル丘陵の遺物を探してみたが、遺物数の少ないと言っている。これが筆者の謎の塔の推測である。(筆者の現役時の生業は建築・造園の石材に携わっていたので、このような発想を抱いて居る。)

図③ 《今を距たること92年以前(大正8年(1919)10月3日に鳥居はこの地到着)、1855年(咸豊5年)のペルミーキンが描いた絵画によれば、ここにはかつて、一座の塔を建立していたことを知る。しかしその後惜しむことに、この塔はロシア人の破壊するところとなり、全く痕跡を見つけることはできない。

この塔は考古学上からこれを見ると、永楽・宣徳のものではない。まさに奴兒干都司設置以前の遺物である。この塔は、考古学・建築史学より観察すれば、この塔は、私が東北・蒙古及びその他の研究・調査したところの遼・金の塔に最も類似しているのである。

絵画から見ると八角形の塔に似ており、第五層及び

頂上の法輪(古代インドの戦車のような武器・輪)は缺失(抜け落ちる)している。その全形よりこれを推測すると、八角形五層の塔であることは疑いない。第一層の下部は須弥壇の基座であり、第一層右側二角の面は、格狭間式(すきま)の窓があることが見える。その左側の二面は、陰影(陰影)が蔽(おお)っていて、見えるところがない。且つ、第二層は、第一、第三、第四層よりやや高く、これもまた、一般の塔が多く見えているところの形式である。その各層の面ごとに、仏・菩薩等の像が彫刻してある。且つその下部には、必ず蓮座(はすざ)が彫刻してあり、各層ごとにみな檐(たるき)を設けている。これはすでに



図③・1858年にペルミーキンが描いた遼・金代の塔

磨滅・^{まめつ ざんけつ}残缺(そろっていない)して見ることはできないけれど、十分にその原形を想像できる。これらを推考し、確かに遼・^{せんとう}金時代の^{せんとう}塔形式であるとみる。この塔を発掘した遺跡では、多数の塔の破片が出土し、塔基を装飾めぐらした花紋塔(第3章19・20頁)の破片を採集した。この丘上の塔はラマ塔よりやや古いものと確定できる。遼・^{せんとう}金式の塔に属し、金代以後の遺物では断じてない。》と鳥居龍蔵は述べている。

補足・八角十三層の塔 上記の鳥居の説明する塔を理解するために、『中国・遼寧省に於けるいわゆる遼塔の第1層塔身浮彫尊像に関する調査報告』水野さや著より概要をみる。

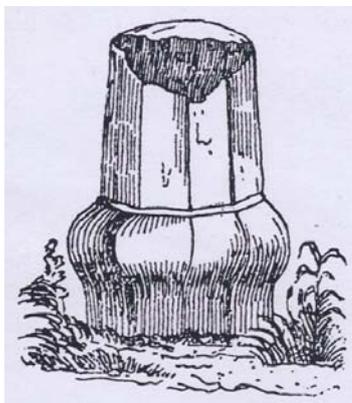
《^{きつたん}契丹(後に^{りょう}遼)は現在の中国吉林省、遼寧省、北京市、河北省北部、山西省北部、内蒙古自治区にまたがる領土を支配した契丹族の王朝時代があった。1125年に金に滅ぼされるまで仏教が盛んに信仰され、多くの寺院が建設された。いわゆる遼塔と称されるこの仏塔の主な特徴は、八角十三層の^{せんとう}塔が多く、塔身の二層目以上に内部空間はなく、二層目以上の屋根の軒の間隔が^{みつえんしき}つまった密檐式(各層の軒を近接して重ねる構造)であることが挙げられる。第一層塔身部が多数の浮彫尊像により荘厳されていることが特徴である。》と述べられている。



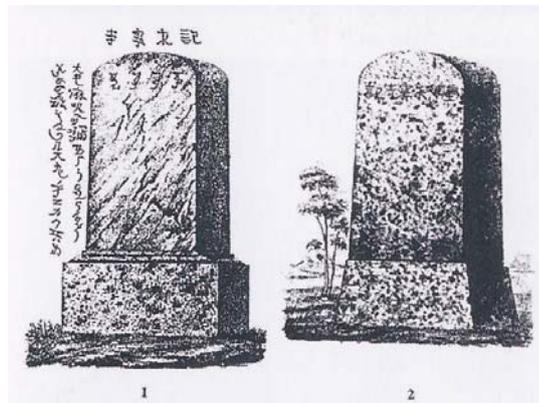
I・II『鳥居全集第6巻』「金剛界大日如来の石像」より。 III・IV『中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第1層塔身浮彫尊像に関する調査報告』水野さや著より。塔の参考として記載する。

下記図④・《ペルミーキンの記載によると、石碑は第一・第二・第三のあわせて三座残存していた。今、ウラジオストク博物館が所蔵するものは永楽・宣徳の二碑となる。この疑問について、^{テリン}特林に居住するロシア人古老の話では、この丘上にはA・B・Cの三座があった(図②参照)。博物館へ輸送時、Bの石碑は丘陵の絶壁の先端にあったの

で、江中(川の中)へ墜落し、努力むなしく学者たちは水中から引き上げることができなかった。ペルミーキンは、B碑面の刻文に対して全く記述していない。恐らくその時すでに碑文は摩耗脱落して刻文が見えなかったのであろう。このことは、A碑・C碑より古い時代の寺院が存在していたことを推測できる。B碑は、私が見るところでは、^{だらにどう}陀羅尼幢(仏堂の飾り築物・はたほこ)であろう。^{どう}幢身には一種の陀羅尼の呪語を彫刻してあり、塔塔と同時代の遺物と考える。遼・金・元まで蒙古人がこの聖地を支配し、明代に至まで支配下にしていた。A・Bの両碑の刻む、om-mani-padme・オムマニバドメクムのラマ教呪語によって、これを推測できる。》と鳥居は述べている。



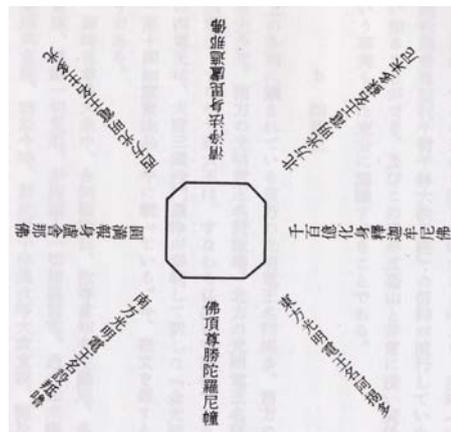
図④



図⑤

④石柱の一部(失われている) 『奴児干都司考』鳥居全集6巻より ⑤の1・永楽年代碑永寧寺記・⑤の2・宣徳年代碑重建永寧寺記(ペルミーキン絵図による) 『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』より

補足・^{だらにどう}陀羅尼幢(幢=菩薩のしるし) 「遼上京城の南・伊克山上の遼代仏刹」2「岩上高所の陀羅尼」(遼上京城以南伊克山上之遼代仏刹・昭和26年・燕京大学・燕京学報より)



ウブルグイブルジョウに残存する『^{ぶつちようせんしょうだらにどう}佛頂尊勝陀羅尼幢』八面に彫られている(『鳥居龍蔵全集6』より) 《今日、^{ウブール古イブール交}烏布爾古伊布爾交のラマ廟(遼寧省北京遼の首都)の背後の岩上に一基の陀羅尼幢が立っている。台座は四角形であり、その上部には円形の蓮台がある。蓮台の上には

は八角形の陀羅尼幢^{だらにどう}がのっており、中間の蓮台と陀羅尼との関係の有無については、なお疑問が残る。幢と蓮台とは並びに不均整であり、蓮台の彫刻は非常によく、後日、他所から運んで来て配合したものと考えられる。下部の四角形の台座は78cm×厚13、3cm、上部の陀羅尼幢は高さ86cmの八角形、上部がやや狭くなっている。八面の各面に文字が刻んである。》とある。(拙書電子書籍『仏教伝来の道物語』P134より掲載)

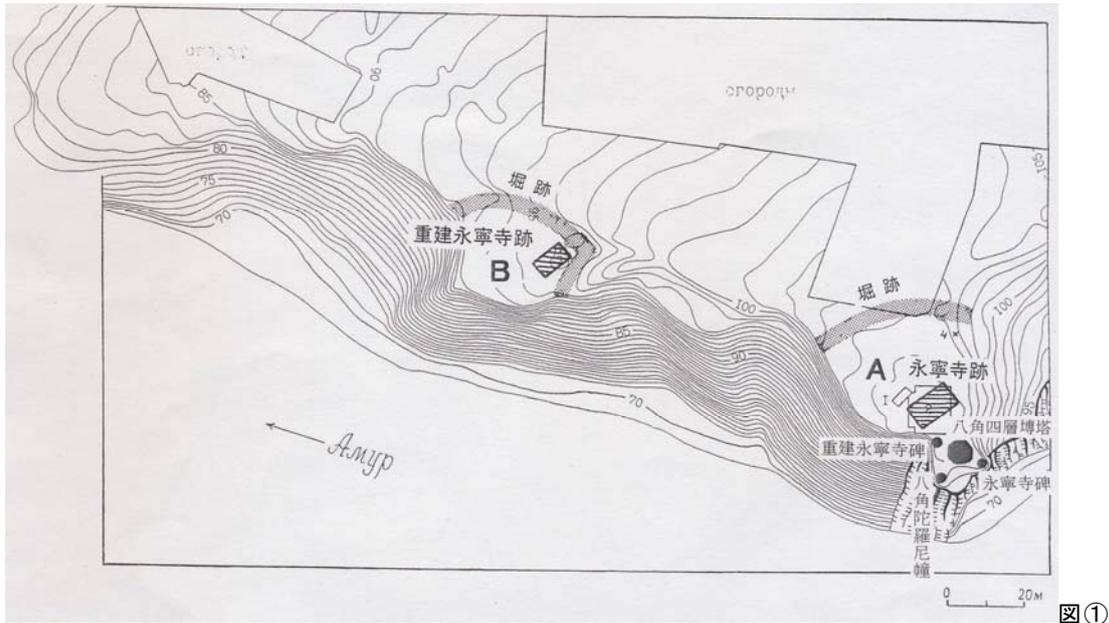
★『佛頂尊勝陀羅尼幢』^{ブツチョウソンショウダラニキョウドウ}八面の教文は、三種より構成され、一つは『佛頂尊勝陀羅尼』二つは『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大経王経』三つは『金剛明最勝王経』となる。八面の教文は、【東方光明電王名阿揭多・佛頂尊勝陀羅尼幢・南方光明電王名設鞞嚩・圓滿報身盧舍那佛・西方光明電王名主多光・清浄法身毘盧遮那佛・北方光明電王名蘇多末尼・千百億化身釈迦牟尼佛】と、あり、神秘莊嚴の教えとなる。

佛頂尊勝陀羅尼幢について 「佛頂尊勝陀羅尼」は、密教経典・陀羅尼の中でも一際多くの信仰を集めたものであり、その遺経・遺品の分布から推し量るとアジア一帯に流通したものである。佛頂尊勝陀羅尼が中国へ将来したのは683年の頃、^{ブツダハリ}仏陀波利(インド僧・五台山へ文殊菩薩の像^{まみ}に見える願でやって来た)の教伝による。

そして特に石刻文化と結び付、中国独自の信仰形態に発展、「佛頂尊勝陀羅尼幢」と呼ばれるものが建造された。石製と^{いえども}雖も、長い歴史の中で摩耗し、倒壊してしまった経幢も多く、現存するものは氷山の一角となる。幢幡^{どうぼん}(はた)とは、布製の幕などに文字や模様を写したもので、一般的には軍隊の象徴であり、王や貴族の行列行進の目印、その居場所として用いられる。経典では仏の莊嚴具として^{どうぼん}幢幡を説き、様々なレリーフに彫刻される。幢幡の有する軍事的な性格は、釈迦牟尼が瞑想中で魔軍と独り勇ましく戦うイメージと合致し、王権的な性格は、釈迦牟尼が古代インドの理想の王「^{てんりん}転輪聖王」に^{なぞら}擬えられた事と一致する。

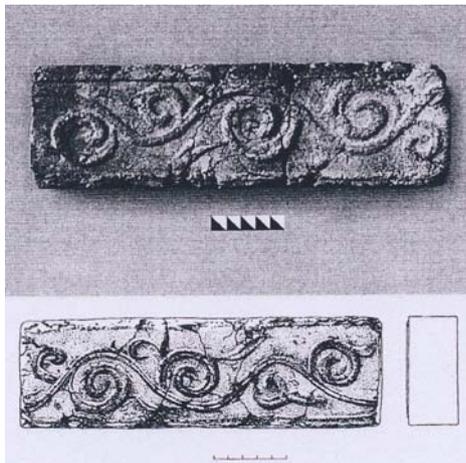
このような重層的イメージを背景として、幢幡は^{さんぎょう}仏菩薩を^{ほうえ}讃仰し、法会を彩り、仏教徒の信仰を^{こぶ}鼓舞するものとして重要されてきたものである。幢幡はとくに仏(釈迦牟尼)が説かれた聖なる言葉(経典)^{きょうどう}「経幢」と称するのが本義となる。「幢」は^{どう}仏堂の装飾布、「幡」^{ばん}寺院の飾り布となる。「^{ほうがい}宝蓋(仏像頭上かざす)を有する幢幡」は中国へ伝わり変容し「石幢」と呼ばれる独自の幢幡が形成されたのである。(「佛頂尊勝陀羅尼経幢の研究」佐々木大樹著より)

3章 永寧寺址から発掘遺物が出土した煉瓦類

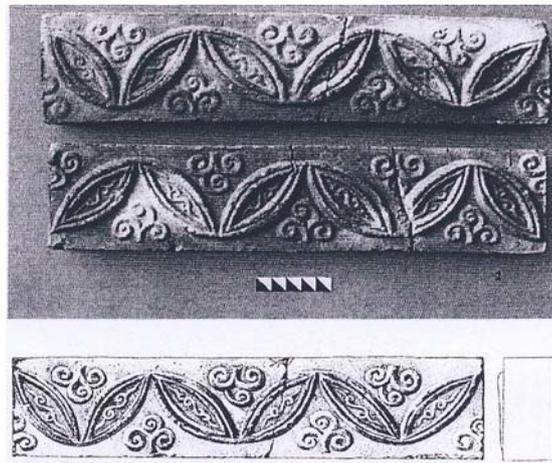


①・永寧寺・重建永寧寺遺跡図(『青森県史研究』第5号・齊藤利男、ベースマップは発掘調査報告書・遺跡付近地形図。※永寧寺碑・重建永寧寺碑・八角陀羅尼幢・八角四層塔塔の位置は推定)より転載

煉瓦・瓦等の出土 下記出土写真は、『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』A・R・アルテームエフ著・北海道大学出版会より転載した。化粧煉瓦の文様はすべて同一の華麗な葡萄の枝であり、大きさもほぼ同一の27、5×8cm、厚さ3、5cmである。



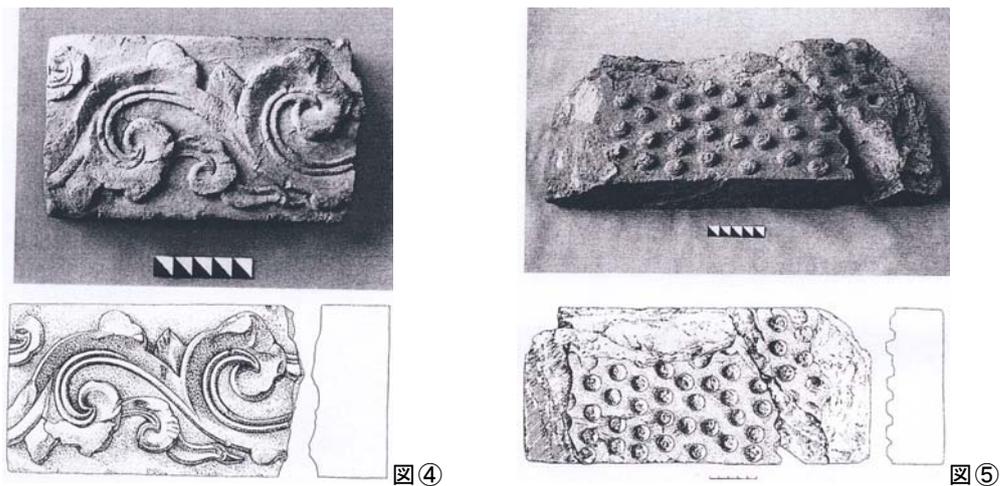
図②



図③

②・永樂年代寺院のブドウ巻き蔓文の化粧レンガ(タイプ1)宣徳年代寺院に再利用されたもの。土製品。これは1413年の寺院の華麗な葡萄の枝だけの押圧文様のレンガによって裝飾されている。

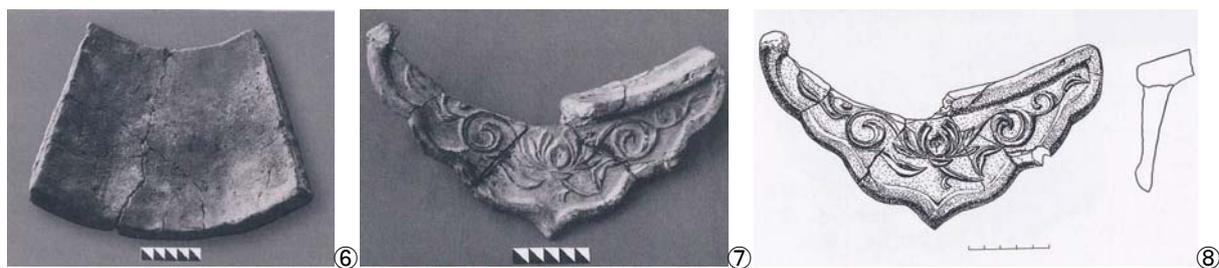
③・宣徳年代寺院・施文されている化粧レンガ(タイプ2)。大きさは②図と同じであるが、より手の込んだ、相互につながっている楕円形で、植物文様が組み合わされている文様のレンガとなっている。このレンガは疑いもなく1413年の寺院の廃墟から持ってきたレンガである。



④・宣徳年代寺院・施文されている化粧レンガの破片(タイプ4)。土製品。

⑤・宣徳年代寺院・施文されているレンガ(タイプ5)。土製品。

1433年の寺院の遺物には、1413年の寺院の建築に用いられたレンガが全て見出される。即ち、1433年に建立された寺院に、1413年の寺院の廃材の瓦や煉瓦などが再利用されていることが判ってきた。



⑥・永楽年代寺院屋根の平瓦 ⑦・同代の屋根の滴水瓦の瓦当 ⑧・故宮屋根⑭参照

⑥は平瓦 ⑦⑧・軒先瓦の下端が舌状に垂れて、逆三角形を呈する滴水瓦となる。中央に蓮はすがあり、そこから植物の捩れた若枝ひねが両端に伸びている文様が押圧されている。

ニコラエフスク博物館にある永寧寺址からの出土品



⑨・写真No.1は左上亀の形のランプNo.2・3銅銭、No.7滴水瓦(軒先の瓦・裝飾文様・故宮瓦⑭参照)

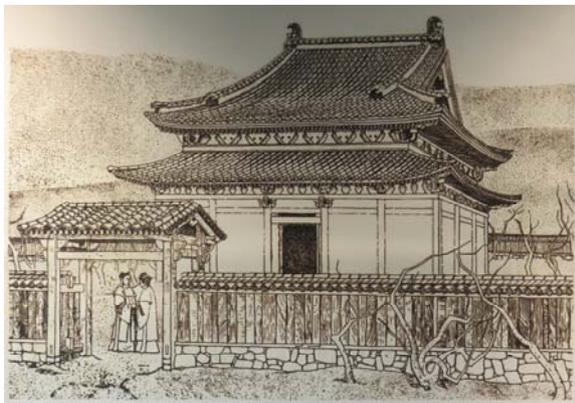
⑩・No. 4・5 建築の装飾煉瓦、No. 8 は中央下、屋根の大棟を飾った龍の角(故宮の屋根瓦参照)



⑪・現場の永寧寺址にある柱の礎石

⑫・礎石の丸径は 54、86cm・外周りは 60cm 以上となり、

1433 年の寺院跡からの出土、柱礎石は 3ヶ所で発見、全体の寺院跡から 16 個礎石が出土している



⑬永寧寺の想像絵図がニコラエフスク博物館あった

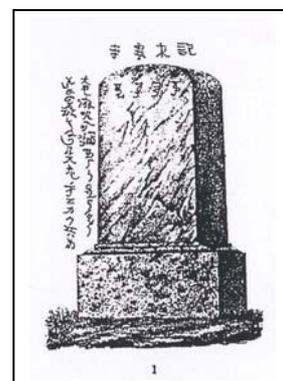
⑭北京の故宮瓦屋根・龍の角と滴水瓦

⑬の永寧寺絵図 ニコラエフスク博物館に永寧寺の想像絵図と「永寧寺遺跡解説文」がありましたので、概要を筆者による訳文で紹介。

《ロシア領土内のアムール下流部の仏教寺院で唯一の遺跡です。1411 年に中国皇帝の裁判所の宦官^{かんがん}イシハのリーダーシップの下で、アムール下流へ政府軍の遠征を送りました。中国の永寧寺は高い崖の上であって、アムール河口から 120 km 遡った所に「永遠の静けさの寺」永寧寺は建設されたが、先住民によって寺は破壊された。1434 年にイシハは、アムール下流へ第 2 回の遠征を行い、仏教寺院を回復しました。初めての寺院石碑には、中国語、女真語、モンゴル語の碑文がグラニット(御影石)のスラブ材で構築されていました。その石碑は、17 世紀の 50 年代に発見され、ロシア探検隊による、1845 年、1873 年、1935 年による寺院の調査を試みました。寺院の本格的な発掘調査は、1995 年アムール考古学グループで始まりました。A・R・アルテームエフをはじめ、歴史と考古学の指導の下で、極東の人々の民族誌を地方自治体博物館に寄贈

されました。1995－2000 年当博物館は新しいユニークなコレクションを獲得しました。》と、説明文ありました。

図⑤の1の永楽碑文を読む 碑文図絵 1 7 頁図⑤を参照、石碑の写真 2 5 頁参照。永楽碑の和訳を『中世の北東アジアとアイヌ』隆志書院刊・「モンゴル時代の東征元帥府と明代の奴児干都司」中村和之著より借用させていただいた。



「永楽寺記」は永楽 9 年(1411)設置した経緯を次の様にある。

《惟だ東北の奴児干国は、・・・其の民は吉列迷及び諸種の野人と曰い、焉に雑居している。皆(中華の)風を聞き化を慕っているが、未だ自分で至ることができない。況其の地は五穀が生せず、布帛を産せず、畜養(家畜)のは惟だ狗だけである。或は野人が□(不詳)を養い、□(不詳)を運び諸な物を用っている。或は魚を捕える以(こと)を業と為て、肉を食べ而に皮を衣ており、弓矢を好む。諸般の衣食の艱は、言に為(する)ことが勝(でき)ないほどである。・・・永楽 9 年(1411)春、特に内官の亦失哈等を遣し、官軍一千余人を率い、巨戦二十五艘で、復た其の国に至り、奴児干都司を開設した。・・・十年(1412)冬、天子は復た内官の亦失哈に命じて其の国に戴至(いた)らせた。海西より奴児干に抵り、海の外クイの苦夷クイの諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし、給えるに穀米を以てし、宴もてなすに酒饌(さかな)を以てしたところ、皆踊躍て懽忻(よろこ)び、一人も梗化(さから)つて率(したが)はない者は無かつた。上は復た金銀等の物を以て地を擇んで寺を建て為(さ)せ、斯の民を柔化(きょうか)し、・・・十一年(1413)秋、奴児干より西に、満涇まんけいという站(駅)が有えきのをト(えら)んだ。站の左は、山が高く而に秀麗であつた。是より先、已に観音堂が其の上に建てられていたが、今寺を造り仏を塑つたところ、形勢(すがた)は優雅で、燦然として観る可べきものがあつた。国くにじゅうの老ろうじんも幼おきなごも、遠きも近きも濟々(たくさん)争つて・・・》と刻まれている。

「海の外クイの苦夷クイの諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし・・・」とあるように、明朝は唐太アイヌの朝貢関係を持っていた。苦夷とは骨嵬と同じでアイヌ夷を指し、元代は「骨嵬」、明代は「苦夷」の呼び名らしい。明朝から齎された衣服や品物はやがて、蝦夷地から津軽安藤氏に渡り、「蝦夷錦」のルートとなっている。

「永楽寺記」の口語訳 「黒龍江下流のヌルガン国に居住している民は、吉列迷(ニヅフ・ギリヤークに繋がる)やいろいろ満州人、ナーナイ(ゴリド・間宮林蔵はコルデッケと呼ぶ・第5章参照)等が、混在して生活をしている。原住民たちは、満州人の文化を好んで真似ているが、自分らではその文化を作りだすことはできない。ヌルガンの地は、農耕で五穀を生産していない。衣服の木綿・絹織物もできない。が、彼らは犬を家畜として飼っている。住民らは犬を多く養い、いろいろの物資を犬橇で運んでいる。生業は鮭・鱒らの漁撈民で、冬は狩猟による熊・鹿等の肉を食べ、獣類の皮は、衣服・防寒・物々交換としているが、歳年(年月)の安定した生活は困難を極めている。

永楽9年(1411)春、明王朝の家臣(宦官)のイシハが、官軍1千余人を乗せ、巨船25艘でやって来て、ヌルガンに軍政局と永寧寺と記念碑を建立した。翌年の冬、またイシハをヌルガンの地へ派遣し、黒竜江河口より海の向こうの庫頁島(唐太)の苦夷(アイヌ)にまで、男女差別なく、衣服や穀米を与え、更に宴会に酒肴を振舞ったところ、アイヌたちは、躍り上がって喜んだ。一人も指揮使に逆らうものはいなかった。永楽11年(1413)、ヌルガンの種族民に金銀を与え、住民教育をするために、丘陵の上に観音寺を建立し、隣接して駅(站)は山高く秀麗の地に創りこれより以後、仏の恵みを求めて、国中の老も若きも、遠近の民もやって来た。」(筆者による口語訳)

図⑤の2 宣徳碑文を読む 碑文絵図17頁図⑤参照、
石碑写真25頁参照。明朝の役人や駐屯軍が留守の間隙をぬって、吉列迷族(ニヅフ)によって永寧寺が破壊した。「重建永寧寺記」には次のように刻んでいる。



《宣徳七年(1432)、^{おかみ}上は^{たいかん}太監(長官)の^{イシハ}亦失哈と^{どうと}同都指揮の^{こうせい}康政に命じて、官軍二千と^{きよせん}巨艦五十を率いて再び^{いた}至らせた。民は^{たみ}皆故(いぜん)の如(とお)りであったが、^{ひと}独り永寧寺が^{はかい}破毀され、^{きそ}基址が^{のこ}在っていた。之(じ)事情(きゆうめい)を^{きゆうめい}究審したところ、其の口人と吉列迷で寺を^{こわ}毀した者は、^{おそ}皆^{おの}悚れ^{おの}惧いて^{ふるえ}戦慄(ふるえあがり)、^の之(じじょう)を^{おそ}憂(おそ)れ^{ころ}戮されると^いった。而し^{おも}太監の^{しか}亦失哈等は、^{イシハ}皇上の^{こうてい}生を^{いのち}好^{いつくし}み遠きを柔(てなづ)ける^の之意(と^{たい}いういし)を^{かんたい}躰して、^そ特に^そ寛恕に加(あつか)い、^{すなわ}斯の民の^{もてな}謁(はいえつ)する者を、^{もち}乃ち^よ宴すには酒を以い、^よ給するには^よ布物を以いて、^{ほご}愈(ますます)撫恤(ほご)した。是に^よ於って人民(たみ)は^{おどりあが}老いも^{よろこ}少(わか)きも^{みな}踊躍(おどりあ)って^い歡忻(ほめそ)やして^い曰うには「天

(明朝)の朝(ちょうてい)には仁徳の君(くんしゅ)が有(いらっしゃ)って、乃(さら)に賢良(けんりょう)の佐(ほさやく)も有(おられる)、我(われら)が属(ふくぞく)するのに患(しんぱい)は無いのだ」と。時に衆(みな)で議(はなしあ)って西(にしがわ)の郭(くかく)に原(もと)の寺を再建し、敢(あえ)て復(また)た治(しゅうり)し不(な)いことにした。遂(そこ)で官(くわん)に委(ゆだ)ねて重創(たてなお)させ、工(たくみ)に命(ほとけ)じて仏(ぶつ)をつくらせ、勞(らう)せずして畢(おわ)った。華麗(わいれい)にして典雅(てんが)であり、先(まえ)よりも優勝(ゆうしょう)すぐれていた。国(くに)の(とち)の人は遠(たみ)いも近(ちか)いも無く、皆(みな)来(き)て首(こうべ)を頓(さ)げ、謝(かんしゃ)して曰(い)うには「我等(われら)の臣服(しんぷく)は、永(なが)きこと疑(うたが)いも無い」とある。

「重建永寧寺記」の口語訳で 「宣徳7年(1432)、明朝は長官(太監)のイシハと指揮の康政(こうせい)に命じて、官軍2千名と巨船50艘を引き連れヌルガンの地へ再びやって来た。住民たちは以前と変わらなかったが、永寧寺が破壊され、寺の基礎石だけが残っていた。寺の破壊された事情を問いただしたところ、寺を壊した種族はギレミで、他の住民たちは、恐れ震えあがり、皆は殺されると思っていた。しかし、太監のイシハらは、宣徳帝の住民への愛情ある行政政策の命令を受けていたので、寛大な扱いを住民に示した。そのイシハの話に民たちはひれ伏した。そして、イシハは宴会をもうけて酒を振舞い、布物を支給して観音の恵みを以って諭した。イシハの情ある指導に老も若きも躍り上がって悦び、皆の衆は「明朝宣徳帝の仁徳の君主の他に、太監の勇姿がおられる、我々はそれに従って行けばよいのだ」と、住民たちは衆議しあって、重建永寧寺を再建したのである。イシハは匠に命じて、仏をつくらせ、その観音信仰は先の仏より霊の力が増していた。近くの人でも遠くの人でも、皆やって来て、首をたれ感謝して言うには、「我らの臣服は長く続くことは疑いがない」と、褒め讃えた。」(筆者による口語訳)

中村氏は碑文の二行目にある「其の口人と吉列迷で寺を毀した者は・・・」の欠字の部分は、「野」と読み「其の野人と吉列迷で寺を毀した者・・・」となり、この推定が正しければ、アムール下流域ツングース系の野人とニヴフ(吉列迷)が永寧寺を破壊したことになる。明朝は地域住民に仏教を広め、先住民を鎮め導く政策を指導したが、受け入れられていない事が分かる。亦失哈等は情諭で諭したとあるが、この地域の諸夷らはシャーマン信仰(第5章53頁シャーマン教解説)が根強く、シャーマンの指示によって観音堂は破壊されたのである。観音寺の破壊は1427年～1432年の間となる。

明朝の終焉 アムール川下流域に明帝の永楽帝・宣徳帝の二人の皇帝は、仏教による政策でアムール下流域の諸民族を治める政治政策を施行していたのであるが、やがて、明朝の国力が弱まり、政府側にも「大航海時代」の発展行動が止まり、1433年以降、遠洋航海用の船舶の建造が禁止され、明朝の僻地への軍政行動が止まり、終に明朝はアムール川下流域の統治を放棄、そして、明朝は終焉を迎える。これ以後 300 年余年、僻地の永寧寺記・寺院跡の存在は世間から忘れ去られてしまった。

ウラジオストク沿海地方国立アルセーニエフ総合博物館の石碑を見る



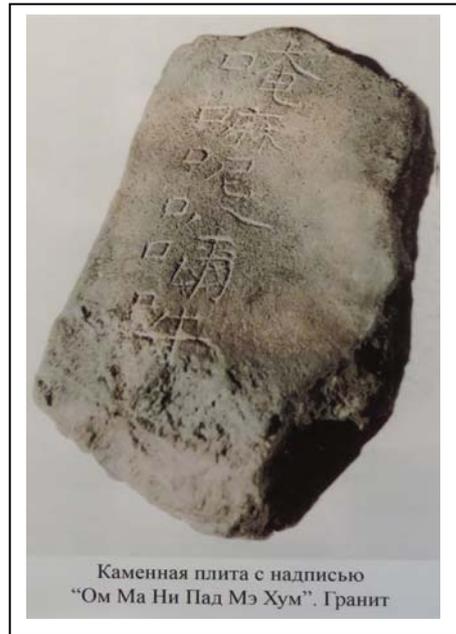
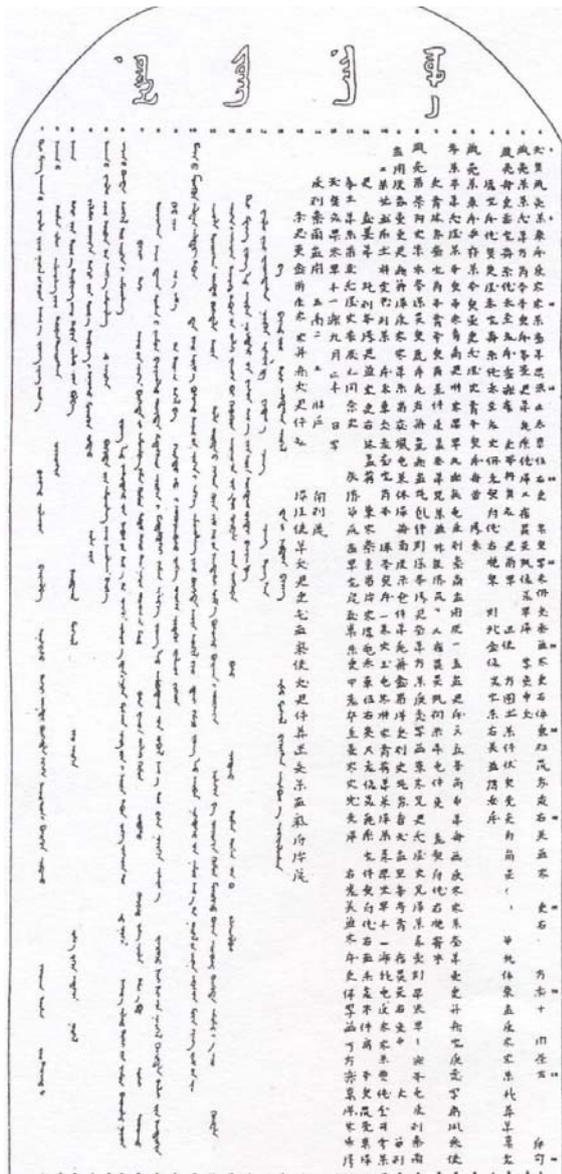
1413年の永寧寺記(永寧寺碑)・高104、5cm×巾49cm×厚26cm・大理石 アルセーニエフ博物館

側面には仏教の呪文「オム マニ パドメ フム・om-mani-padme-hum」4言語文字、漢字を右上に、蒙古文字を右下に、改行して西蔵文字を左上に、女真文字を左下に配し刻まれている。2014年5月。



1433年の重建永寧寺記・高119、2cm×巾70、3cm×厚30cm・花崗岩 アルセーニエフ博物館

1433年の重建永寧寺記は漢文のみで刻まれているが、1413年の永寧寺記は、中国文字、女真語文字、モンゴル文字、チベット文字で刻まれている。



板石にオムマニ バドメクムの漢字呪文
ニコラエフスク博物館より

発音	ām	ma	ní	bā	mi	hōng
漢字	唵	嘛	呢	叭	彌	吽
モンゴル文字	ᠠᠮ	ᠮᠠ	ᠨᠢ	ᠪᠠ	ᠮᠢ	ᠬᠤᠮᠤ
チベット文字	ཨོྫ	མཎི	ཎི	པཎི	མི	ཧོཎི
女真文字	尖	兆	采	豕	兵	尚

永寧寺碑裏面(蒙古・女真文字碑文)永寧寺碑側面に記された6字の仏教呪語一覧・『青森県史研究』5号

補足・観音菩薩 観音菩薩はインドに起源を持つ。釈迦の弟子で、普通“慈悲の神”と呼ばれ、もっぱらその情け深さと思いやりから、女性の姿で描かれるが、実際は男性である。仏教の教えでは、観世音は苦しむ人の叫びを聞いて手を差し伸べるのである。そのため中国人は、“苦しむ人の叫びに耳を澄ます人”という。しかし、唐代(618～905)に太宗李世民的治世に「世」の字は観世音を表すために用いられなくなった。と云うのは、唐代、皇帝の名に使われている漢字は、一切その他の用に付すことが禁じられたからである。仏教では観世音について、インドの神ビシュヌのように、33の化身を持つという。「^{かんぜおんぼさつ}観世音菩薩」は「^{かんじざいぼさつ}観自在菩薩」ともいい、「^{くせぼさつ}救世菩薩」など多数の名称があり、一般的には「観音さま」と呼ばれている。

勅修奴兒干永寧寺碑記

伏聞天之德高明、故能覆幬、地之德博厚、故能持載、聖人之德神聖、故能悅近而服遠、博施而濟衆、洪惟我朝統一以來、天下太平五十年矣、九夷八蠻、梯山航海、駢肩接踵、稽顙於闕廷之下者、民莫枚舉、惟東北奴兒干國、道在三譯之表、其民曰吉列迷及諸種野人雜居焉、皆聞風慕化、未能自至、況其地不生五穀、不產布帛、畜養惟狗、或野人

人養駕、運(用)諸物、或以捕魚爲業、食肉而衣皮、好弓矢、諸般衣食之艱、不勝爲言、是以皇帝敕使三至其國、招安撫慰、安矣、

聖心以民安而未善、永樂九年春、特遣內官亦失哈等、率官軍一千餘人巨船二十五艘、復至其國、開設奴兒干都司、昔遼金疇民安故業、皆相慶曰、今日復見而服矣、遂上朝都司、而餘人

上授以官爵印信、賜以衣服、賞以布鈔、大賚而還、依土立與衛所、收集舊部人民、使之自相統屬、十年冬、天子復命內官亦失哈等載至其國、自海西抵奴兒干及海外苦夷諸民、賜男婦以衣服器用、給以穀米、宴以酒饌、皆踊躍歡忻、無一人梗化不率者、

上復以金銀等物、爲擇地而建寺、柔化斯民、使知敬順、太祖以聖之瑞、十一年秋、卜奴兒干西、有站滿涇、站之左、山高而秀麗、先是、已建觀音堂於其上、今造寺塑佛、形勢優雅、粲然可觀、國之老幼、遠近濟濟爭趨、

聖朝高威靈、永無厲疫而安寧矣、既而曰、亘古以來、未聞若斯、

天民之上下、吾子子孫孫、世世臣服、永無異意矣、以斯觀之、萬方之外、率土之民、不飢不寒、歡忻感戴難矣、堯舜之治、大不過九州之內、今我朝盛德無極、至誠無息、與天同體、斯無尚也、無盛也、故爲文以記、庶萬年不朽云爾、

永樂十一年九月廿二日立

欽差(內官)亦失哈、成(勝)、張童兒、張定安、

鎮國將軍都指揮同知張旺、

撫總正千戶王迷失帖、王木哈里、(玄城)衛指揮失禿魯苦、弟禿花哈、妻叭麻、

指揮(哈)徹里、(藍)、王謹、弗提衛指揮僉事禿稱哈、母小彥、男弗提衛千戶納蘭、……

千戶 吳者因帖木兒、齊(誠)、馬兀良哈、朱誠、王五十六、黃武、王君、……

百戶高中、劉官永奴、孫、得試奴、李政、李敬、劉賽因不花、傳(同)、(王)里帖木、韓、張甫、金衛、原、高邁、葉勝、……

趙鎮古奴、王官音保、王阿哈納、崔(源)、鬼三、康速合、阿卜哈、哈赤白、李道安、道、(閻威)、總旗李速石、……

所鎮撫王溥、戴得賢、宋不花、王速不哈、李海赤、高夕都、李均美、都事席、醫士陳恭、郭奴、總吏黃顯、費、……

監造千戶金雙頂、撰碑記行人銅臺邢樞、書丹齊憲、書蒙古字阿魯不花、書女真字康安、鑄字匠羅泰安、

來降快活城安樂州千戶王兒卜、木答兀、卜里哈衛鎮撫阿可里、阿刺卜、百戶阿刺帖木、(咬)納、所鎮撫賽因塔、把禿不花、付里住、火羅孫

自在州千戶(把)刺(答)哈、弗的、阿里哥出、百戶滿禿、木匠作頭石不哥兒、金卯白、揭英、粧塑匠方善慶、宋福、漆匠李八回、

匠黃三兒、史信郎、燒磚瓦窑匠總旗熊問、軍人張豬弟、泥水匠王六十、張察罕帖木、

(奴兒干)都指揮同知康旺、都指揮僉事王肇舟、佟答刺哈、經歷劉興、吏劉妙勝、

永寧寺碑文は各民族文化の交流と融合 永寧寺碑文は、漢字・モンゴル文字・女真文字・チベット文字の4種類の文字を用いて刻まれている。まさにこの地域に多民族が“雑居”し、民族の文化交流と融合を促していたことを示している。ここから分ることは、遼・金・元・明と、奴兒干の地は、黒龍江下流域の政治経済へ大きな影響を与えていた。

碑の表面には漢文、裏面にはモンゴル文字と女真文の二種類が刻まれ、碑の裏面の題辞はモンゴル文で記されている。碑の左右側面に四種類の文字、右側の上段には漢文が、下段にはモンゴル文が、左側の上段にはチベット文が、下段には女真文が刻まれている。漢文の「永寧寺記」は漢人の邢枢が書いたものであり、モンゴル文はモンゴル人の阿魯不花^{アルクブカ}が、女真文は女真人の康安^{こうあん}が書いたものであり、チベット文は恐らくラマ僧によって書かれたものであろう。明朝はこの地域での多民族の“雑居”の状況に合わせた民族文化を融合させた証となっている。

永寧寺碑文は衣服文化を齎している

「永寧寺記」に永樂9年春、明朝が奴兒干地区に対して「賜うに衣服を以ってした」という銘文が刻まれ、永樂10年に「奴兒干及び海外の苦夷(サハリンアイヌ)の諸民を・・・」賞し、「男婦に賜うに衣服を以ってした・・・」という文字が刻まれ、これは衣類をサハリン島に送っていたことを意味する。碑文はさらに「布帛^{ふはく}」と刻まれ、布帛とは、絹織物、麻織物、錦の総称である。

「重建永寧寺記」に宣徳7年に「給うに布物^{ぬのもの}を以ってした」とあり、これは大変重要で、「衣服」等の品が、日本の北海道に伝わる流通経路が存在していることを示している。これは元代から、黒龍江下流域及びサハリン島には、すでに日本の北海道との間に経済的かつ文化的な交流の証を示している。北海道のアイヌが、毛皮類の品々を舟に乗せ、サハリン島の少数民族を通じて、山丹人^{さんたん}等の部族と交易活動、すなわち、山丹交易が行われていたのである。サハリンの各民族は、黒龍江下流域の満琿人^{まんぐん}(オロッコ夷・ニヴフ・ウリチ・ナーナイ)、の住む地を山丹と称し、交易が北海道アイヌを通じて行われていた。その山丹交易の代表する交易品が「蝦夷錦^{えぞにしき}」である。「蝦夷錦」については、6章「サンタン交易」で詳しくのべることにする。

(『中世の北東アジアとアイヌ』「永寧寺碑文と北東アジア・奴兒干都司と黒龍江下流域」楊暘・1937年生まれ、吉林省社会科学院歴史所研究員・より)

第4章 ヌルガンの地理 『奴児干都司考』鳥居龍蔵著・昭和22年(1947)参考に。

奴児干都司のあった特林(ティル)の場所へ、初めて入ったのはオランダ人のウィトセンである。彼がこの地に至り、この丘陵(北緯53度、東経104度)の遺跡について、初めて1708年に発表した。(フランス文の翻訳は1785年)

次にこの地域に入ったのは日本人の間宮林蔵となる。林蔵は文化6年(1809)7月2日、^{テレン}徳楞満州仮府を探索した帰途の舟中で、特林の丘陵を遠望し、2つの石碑の存在を見て著書の『東韃地方紀行』に下記のように記述している。

《この日、^え経たるところの地名は、サンタンコエ(ティル)であり、^{せきじつ}昔日にロシアの盗賊がホンコ河より流れに乗って下り、この地に至って^{ぼうおく}房屋(家屋)を築き、^{そば}夷に傍いて居り、以ってその産物を掠奪し、この地を^{どんしょく}呑食(食欲に食いつく)せんとした。満州夷のために^や敗ぶられ、終にこの地より逃亡した。その時、賊夷は、河岸の高地に、黄色の石碑二座を建立した。林蔵は、船中よりこれを遠望したが、文字が彫ってあるかどうかは解らなかった。衆夷はこの地に至れば、携帯する米、粟、草実を以って河中に散き、この碑に向かって拝礼した。・・・》とある。林蔵は同行した土民(スメレンクル夷は後のギリヤーク・ニヴフ族)が、この碑を遠くから拝んでいる姿を見て、なぜ土民らが拝むのか、そのわけが理解できなかつたと述べている。



間宮林蔵はこの辺で舟中より遠望した所、黄色矢印永寧寺跡に大砲が見える。2015年8月末撮る

間宮林蔵が見た「河岸高き処」を説明すれば、アムグン河口の対岸の断崖上に2つ

の石碑を仰ぎ見た地名をサンタコエと呼んでいる。白鳥庫吉は、サンタコエとはツングース語で「拳の崖」を意となるという。2碑はロシア人が建てたものであるという伝聞を、林蔵は記述しているのである。ここは北緯52度50分に位置となる。

ホンコ河とは今日のアムグン河のことであり、この河は、ヤクーツク州とプリモルスカヤ州との間の山脈より流れ、特林^{テリン}(中国名)の丘陵の所で黒竜江に注いでいるのである。当時のロシア人はヤクーツク州方面から、この川に沿って降り、黒竜江合流点に至ったものであろう。

間宮林蔵が唐太島のノテト(北緯52度の手前)より乗舟し、大陸側への黒竜江河口より^{デレン}徳楞満州仮府へ夷らと同行出張し、その帰途の道すがらこの石碑を見た。林蔵がデレンに行く熱い探検行動の原動力は、唐太北部地域や韃靼大陸のアムール河口地域の状況、そして、ロシアの管理地域はどの様なになっているのか、清朝の管理地域はどの様なになっているのか、その真相情報を得るための探索であった。その情報を入手するために、幕府は^{やとい}雇(身分の低い)の間宮林蔵と松田伝十郎に偵察を命じたのである。

それは、ロシア船の南下(北海道周辺)による国内の政情不安が続き、幕府はこの問題解決の糸口を探っていたのである。身分の低い雇身の間宮や松田が、異国で捕まるような問題が発生した場合、幕府は相手国に対し、「個人的な関心事で入国したので、幕府は何も承知していない」との回答で済ます国際外交方針が窺える。

それは兎も角、調査目的を秘め、林蔵はロシアの勢力がカラフト島のどの辺まで侵入しているのか、又、韃靼大陸ではどの様な国の支配体制となっているのか、満州仮府はどの様な管理体制になっているのか、その調査が最大の探索目標となっていた。

そして、ついに探索の結果、林蔵は唐太北部地域・大陸のデレン地方は、清朝政府のみが管理する地域となっていることを確認し、ロシア人はこの地域に一人も居住していないことを確認したのである。これ等を確認した林蔵は、即ち北海道の先、北蝦夷地方と韃靼アムール地域の地理を確認し、自信満々の気持ちで帰国したに違いない。帰国後、林蔵の絵図入りの著述書を見ても、異文化の絵図とその様子と語りに、自信と熱意がみなぎっているではないか。林蔵の齎したものは、当時の日本国民も幕府も一番知りたかった情報だったのである。

この探索に於いて、唐太は大陸との半島ではなく、狭い海峡幅(7、3 km)であることを確認した。後に「間宮海峡」名称され、この件は第7章「間宮林蔵の『東韃地方紀行』概観」で述べることにする。

間宮林蔵以後のティル

林蔵の韃靼探索調査の46年後、1855年に至りロシア人のペルミーキン(永寧寺碑記の絵図を描いた人物)が、この地に来訪し丘陵に登り調査を行った。1847年にムラヴィヨフ(第8章「サハリン島問題考」で述べる)が東部シベリア総督に任ぜられてより、ハバロフスクより下流と河口のニコライエフスク及びオホーツク海岸を調査した事により展望を見出し、ロシア政府は公式な国領とする方針を決めた。それは清朝政府が黒竜江下流域に軍隊を入れて管理していない事、この地方はどの国も入っていない、無風状態になっていたからである。

ムラヴィヨフは黒竜江を詳細に調査し、河口より海岸に至るまでの間の情態がどうなっているか、総督の着任8年後、1854年に調査隊を派遣することが決定され、英国で製造したペトロフスク構造の外輪船(アルゲン)を中心にして、50艘の船艇及び多数の木筏で黒竜江を航行に乗り出し、コサック歩兵大隊1千名の衛隊が付き、武器を装備した軍事進攻となる。この時、ペルミーキン、アノソフ、ゲルストフェルト等も参加している。

ペルミーキンの記述に、《特林(ティル)は石灰岩より形成された山岳地帯となり、針葉樹林によって覆われ、山麓に樺と少数の榿、白楊が生長している。アムグン河は黒竜江に流れ入り、その下流の左側オレル湖・チリアを形成している。特林の集落は、アムグン河が黒竜江に流入する1マイル半(2、4km)ばかりの所であり、姿勢の勇壮な断崖が河中に突出している。断崖の上部には、古代の寺院の遺址が残存している。・・・》と、特林の状景を記述している。



①・江戸時代の民族分布
「ヘジェ・フィヤカ・エゾ、近世における日本と中国の北方に対する認識」佐々木史郎著より

図①

又、『元史』の「地理志」に、俊禽(優れた鳥)の海東青(白鷹・狩猟用弓の羽・裘(衣)に使われた)という説明があり、海の外(唐太島)から奴児干(かいせい)に海青が至ると言っている

る。又、罪人(流刑地)が奴児干に流されるものは必ずここに経るとも称している。

ハバロフスクより黒竜江に沿って下航し、河口に至るまでの間は、地理学上、文化史上最も民衆の居住する中心地域が特林(ティル)であり、風景の美しい所は、特林地方の特徴となっている。居住のギリヤーク人(ロシア人の呼名・ニヴフ)は、古代よりこの地は諸夷の集落となっており、更に、アムグン川上・中・河口にはツングース族のネグダル人(ニヴフ・ウイльта・マングン含む)が居住している。元・明代に奴児干都司及び永寧寺をこの地に建立したことは、実に戦略上の的をえた要衝となっている。

特林とはこの丘陵の地名であり、ギリヤーク人はその場所をティル・バハと呼び、ティルとは崖のことであり、バハとは岩のことで、即ち岩崖の意となる。ロシア人はそれをTy rと呼び、今日の地名となっているのである。中国人は、古より特林(テリン)と呼び、テリンの原語はツングース語に属するのである。

ロシア人が黒竜江(アムール川)地域への進出は17世紀初めにこの地に現れたが、キーレン族(サマギール・5章の先住民族たち参照)の居住地となっていた。アムグン河流域の2ヶ所の塞^{とりで}を築いたのは1682年で、翌年には清朝側が大軍を黒竜江域に押寄せ、ロシア勢力を駆逐^{くちく}に乗り出し、ロシア人は戦わず、黒竜江を下りオホーツク海のウダ河畔のウドスコイに逃れたという。

ティルは元・明時代の地名は「奴児干」の名称地であり、アムール下流域と外の海の庫頁島(唐太)経営のために、元時代に東征元帥府(軍政)^{とうせいげんすいふ}を置き、明代には奴児干都司(軍政)が置いた所である。林蔵が船上で遠望した2碑は、永楽11年(1413)に建てた「勅修奴児干永寧寺碑記」(永楽碑)と、宣徳八年(1433)の「重建永寧寺碑記」(宣徳碑)の2つ石碑となる。その石碑は現在ウラジオストク沿海地方国立アルサーニエフ総合博物館に陳列(1891年搬入)されている。(『奴児干都司考』鳥居龍蔵著参考)



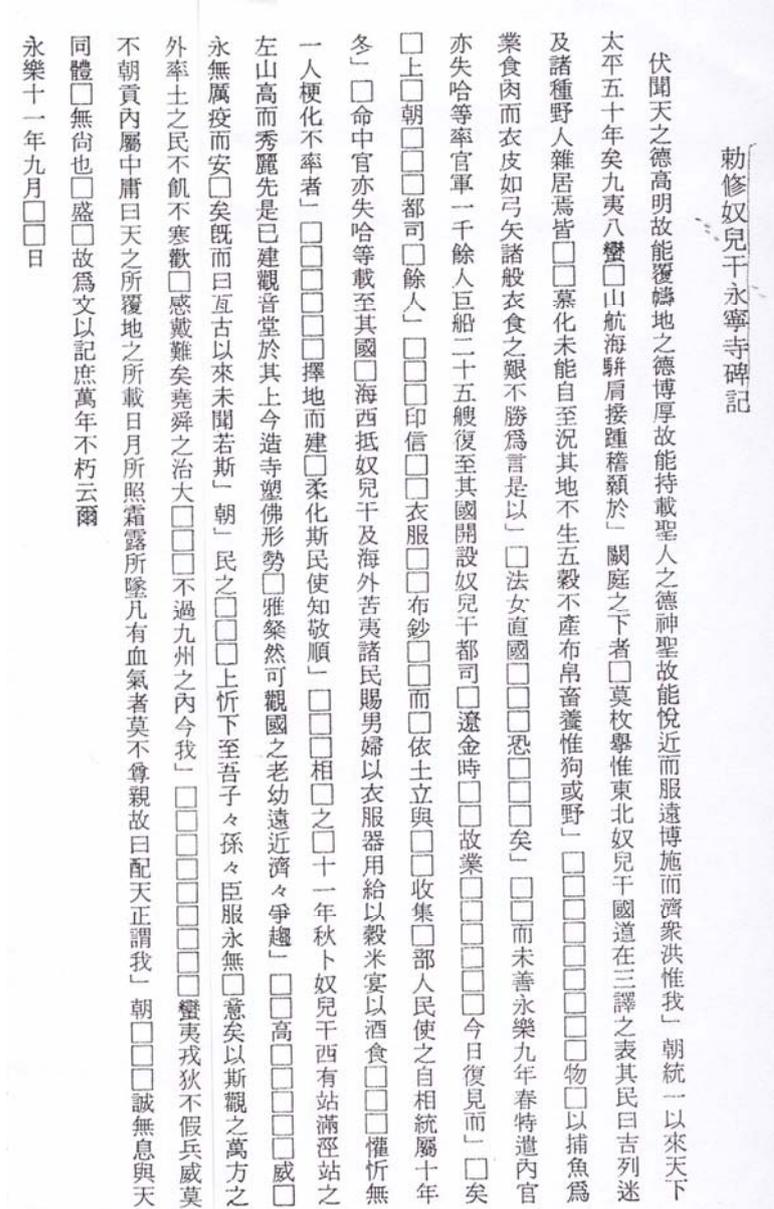
②・元明時代の民族分布

図・佐々木史郎著より

図②

永寧寺碑文解説の流れ

この石碑の存在は長い間、300 余年も忘れ去られていたが、オランダ人のウィトセンをはじめ、1809 年には間宮林蔵の『東鞆地方紀行』にもサンタコエの地名で記載され、1929 年には、内藤虎次郎の『奴兒干永寧寺二碑補考』となり、1947 年・1976 年、鳥居龍蔵の『奴兒干都司考』の研究となる。そして、永寧寺の二碑文を通読したのは、曹延杰^{そうていけつ}である。



③・勅修奴兒干永寧寺碑記
 ※第3章、27頁参照
 「勅修奴兒干永寧寺碑記」
 「奴兒干永寧寺二碑補考」
 より。次頁に続く

図③

1885 年、曹延杰^{そうていけつ}（清朝末期役人の地理学者）は著書『西伯利東偏紀要』^{シベリアとうへんきよう}を世に出版し知られることになる。彼は困難や危険を恐れず、辺境に赴き、碑文の拓本をとり、さらに碑文の漢字を判読し著作を世に出した。曹延杰の拓本を、1891 年に金石志^{きんせきし}（石彫文）の『吉林通志』が出版され、この書籍拓本から、内藤湖南や白鳥庫吉、園田一亀らの解説が進められた経緯となる。「勅修奴兒干永寧寺碑記」「奴兒干永寧寺二碑補考」

張童兒 張定安 鎮國將軍都指揮同知張旺 撫總正千戶王迷失帖 王木哈里 □□衛指揮失禿魯苦弟
 禿花哈 妻叭麻 指揮 徹里 □□ 王謹 弗提衛指揮僉事禿稱哈 母小彥 男弗提衛千戶納蘭以下不明
 千戶 吳者因帖木兒 賓□ 馬兀良哈 朱誠 王五十六 □□ 黃武 王□君 □□以下不明 百戶高中 劉
 官永奴 孫□ □得試 奴□□ 李敬 劉賽因不花 傅□ □□里帖木□ 韓□ 張甫 金□ □原高
 遷 葉勝 □□以下不明 趙鎖古奴 王官音保 王阿哈納 崔□ 鬼三 □□ 康速合 阿卜哈 哈赤白 李
 道安 □道 閆□ 總旗李速右以下不明 所鎮撫王溥 戴得賢 宋不花 王速不哈 李海赤 高歹都 李均
 美 都事席□ 醫士陳恭 郭□ 總吏黃顯 費□ 監造千戶金双頂 撰碑記行人銅臺邢樞 書丹竇憲 書
 蒙古字阿魯不花 書女直字康□ 鑽字匠羅泰安 來降快活城安樂州千戶王兒卜 木答兀 卜里哈衛鎮撫阿
 可里 阿刺卜 百戶阿刺帖木□納 所鎮撫 賽因塔 把禿不花 付里住 火羅孫 自在州千戶□刺□哈
 弗□的 阿里哥出 百戶滿禿 木匠作頭石不哥兒 金卯白 揭英 粧塑匠方善慶 宋福 漆匠李八回 □
 匠 晉三兒 史信郎 燒磚瓦窰匠總旗熊閏 軍人 張豬弟 泥水匠王六十 張察罕帖木 都指揮同知康旺
 都指揮僉事王肇舟 佟答刺哈 經歷 劉興 吏劉妙勝

遼東都司都指揮康政 指揮高勛 崔源 高□李□以下不明
 金寶 金□ 崔越以下不明
 高□ □□ 馬旺 黃督 馬□中間不明 醫士□□以下不明
 □□ 王□ □□ 春 陸□以下不明
 海西□□等衛指揮 木答兀哈 弗家奴 李希塔 木兀花□ □□刺木兀哈以下不明
以上不明 周□ □□ 金海 王全 □□ 羣英□□ 通事百戶康安 書丹□□張兢
 書匠□升 孫義 木匠 □成 石匠 □□ 余海 泥水匠□□ 鐵匠雷遇春以下不明
 □□都指揮康福 王肇舟 佟勝 經歷孫□ 吏劉觀

図④・勅修奴兒干永寧寺碑記 ※第2章・27頁も参照で

『内藤湖南全集』 33卷に「永樂碑記の釋読に就いては、照像三種、拓本二種に、吉林通志石志、石澤發身氏(今の犬倉發身氏)の「白山黒水」(明治33年11月發行)をさんこう参攷にした。碑中に見える行人刑樞ぎょうにんに就いては、珠域周咨録の外にも、使職文献通編(珠域周咨録と同じく明の行人司行人嚴從簡が嘉靖中に撰せる所なり)卷之七使範篇に傳あり。」とあるが筆者は恥ずかしながら理解できておりません。

重建永寧寺

□天之高覆四時行萬物生焉地之厚載二氣合萬物育焉□人之至德五常明萬姓歸焉故□仁昭而□□□所化□
 無爲而治□□□者恭惟我□朝布德□□而逾明□□□久矣□蠻夷戎狄聞風□□而朝□貢者絡繹不絕
 惟奴兒干國□□□之表道□餘里人有□□野人吉列迷苦夷□重譯莫曉其言非威□□其心非□舟□其地□
 □□其居風俗之□弗能備述洪武間遣使至其國而未通五樂中□上命內官亦失哈□□大航五至其國撫諭□
 設奴兒干都司其官□□斯民□□捕海青方物朝貢□上嘉其來服□給賞□還之□朝廷□□命□使柔化之
 十一年秋擇地滿涇之左規□寺國民所觀□□曰□互古以來未有□此□也宣德初復遣太監亦失哈部衆再至□
 聖天子與□天同赫明如日月□德之□□□之其民悅服且整飾□佛寺大會而還七年□上命太監亦失哈同都指
 揮康政率官軍二千巨缸五十□至民皆如故獨永寧寺□□基址有焉究□□其人□吉列□者皆悚懼戰慄憂之以戮
 而太監亦失哈等躡□皇上好生□逸之意深加□□斯民謁□□宴以酒食□□愈撫□於是人無老少踴躍歡忻咸嘖々
 曰□天朝有□□之居乃有啓處之方我屬無患矣時从□□□敢不優□遂委官重造合工塑佛不費而□華麗典雅
 復勝於先國人無遠近皆來頓首□曰我等臣服□無疑矣以斯觀之此我□聖朝□□道高堯舜存心於天下加意於□民
 使八□四裔□士萬姓無一飢寒者其太監亦失哈都指揮康政□能□仁厚德政治普化□□夷□□偉懋哉正□
 聖主布德施惠非求報於百姓也郊望禘嘗非□求報於鬼神也山致其高雲雨起焉水致其深蛟龍生焉君子致其道德而福祿
 歸焉是故有陰德必有陽報有□隱行必有昭名此之謂也故爲文記萬世不朽云

大明宣德八年癸丑歲季春朔日立

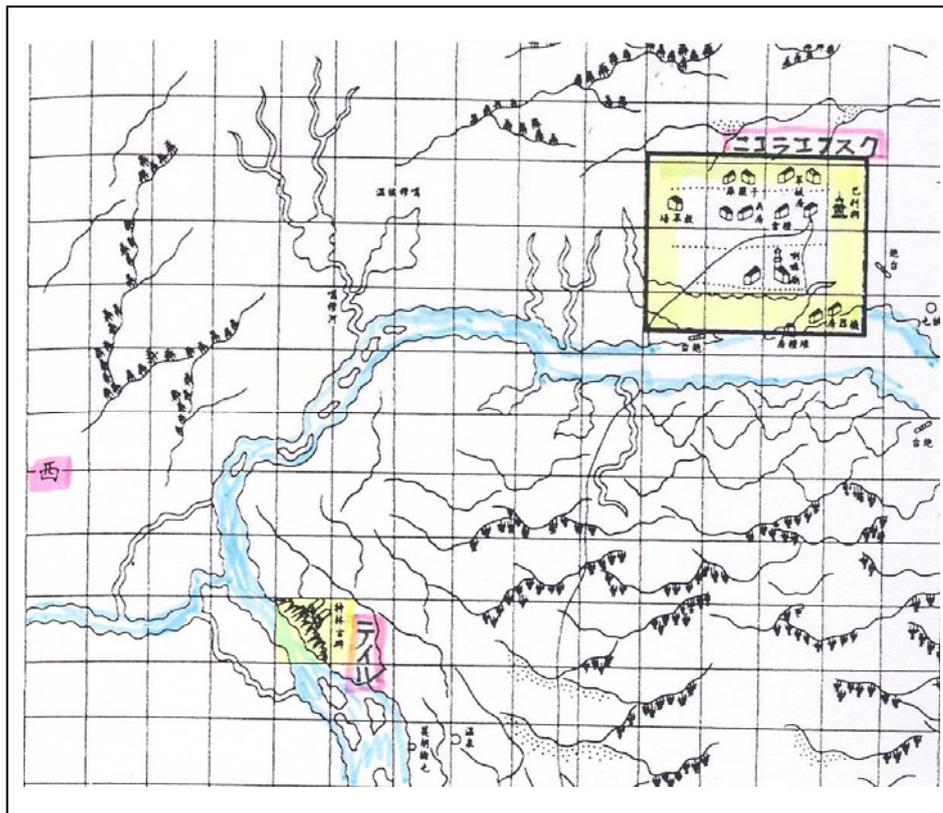
欽差都知監太監亦失哈 御馬監左少監三金內官范桂 □□ 阮落 □藍 □阮通 給事中□且

遼東都司都指揮康政 指揮高勛 崔源 高□李□以下
 金寶 金□ 崔越 不明
 高□ 馬旺 黃督 馬□ 不明 醫士□□ 以下
 □□ 王□ 春 陸□ 以下
 海西□□等衛指揮 木答兀哈 弗家奴 李希塔 木兀花□ □□刺木兀哈 以下
 不明 周□ 金海 王全 □□ 羣英□□ 通事百戶康安 書丹□□張旒
 書匠□升 孫義 木匠 □成 石匠 □□ 余海 泥水匠□□ 鐵匠雷遇春 以下
 □□都指揮康福 王肇舟 佟勝 經歷孫□ 吏劉觀

図⑤・重建永寧寺碑記「奴兒干永寧寺二碑補考」より『内藤湖南全集』33巻より

曹延杰は松花江からアムール川に入る 清朝末期の地理学者。吉林、奉天、黒竜江を実地調査し、『東北边防輯要』を刊行した。帝政ロシアからの防衛のために、地理『東三省輿地險要図』を纏めたのである。この二書を吉林將軍希元に提出したら、ロシアとの国境付近を偵察するように彼は依頼された。曹延杰は兵士2人を連れ、商人に変装して松花江からアムール川に入った。アムール河口に至った後、ハバロフスクからウスリー川に入り、ハンカ湖を経て帰国する。129日間の1万6千里の旅を踏査した。東シベリアのロシア軍の拠点、兵数、道路、人口、交易、民族風俗情報を『旅俄日記』にまとめたのである。この旅で曹延杰はアムール下流域(特林^{ていりん})で2つの「永寧寺碑」を発見し、拓本を持ち帰った。吉林へ帰国後、確実な資料を基に、絵図・論文

を纏めたのが『西伯利東偏紀要』を著し刊行した。曹延杰はこの功績により光緒帝(清朝第11代皇帝)に拝謁を許され、『条陳十六事』を提出して、外交でロシアの拡大を防ぎ、軍事、政治、そして辺境の経済開発を主張している。



図⑥

⑥・曹延杰の絵図・「特林」ティルは左下・現在のニコラエフクは右上、色付は筆者による。

(『中世の北東アジアとアイヌ』「モンゴル時代の東征元帥と明代の奴兒干都司」中村和之著より)

『曹延杰日記』の記述に

《廟爾(ノモハン)を上ること2百50里(約千km)の混同江(松花江)東岸の特林地方には、石壁が江辺に立っており、形は城闕(城門の台地)の如くにして、高さ十余丈である。上には明代の碑二つがある。一つには、「勅修永寧寺記」と刻し、一つは「宣徳八年重建永寧寺記」と刻しており、みな太監亦失哈が奴兒干海及び海中(アムール河口より海の樺太島)の苦夷を征服したことを述べている。碑の陰に(裏側)二体の字の碑文があり、碑側には四体の文字がある。文はただ「唵嘛呢叭彌吽・オムマニ バドメクム」の六字の漢文をしるすことができるのみであり、余は(自分)はともに辨考(翻訳)できない。》とある。(『奴兒干都司考』鳥居龍藏全集6巻より)

第5章 奴児干周辺の先住民族たち

アムール川下流域と唐太島^{カラフト}の住民に関する人類学、民俗学方面からの本格的な調査研究が始まったのは、19世紀の中頃からである。ロシア人が初めてアムール地方に到達した17世紀初頭、当時はまだその地方を研究する素地はロシアにはなく、18世紀中頃になってロシアにも学術水準の向上が図られるようになってきた。日本に於いては18～19世紀にかけて、民族学的な著作研究ではなく、各地から聞き書きの資料の記録は残されている。それは最上徳内、中村小市郎、間宮林蔵、松田伝次郎、松浦武四郎らの江戸中期・後期の日本人による調査聞き書きの記録となる。ロシアに於いては先達の調査研究を整理して記録を残したのがマーク(1823-1867年) E. E. Maakであり、ロシアの名称としてはアーチスト・E.マイヤー(E.E. Мейер)となる。その後が続いたのがロシア人、L. i. シュレンク (Л.И.шренк)(1826-1894年)となり、この2人の研究成果は長くこの地域の民族学研究の古典となり、民族学の基礎となったのである。今章は『近現代のアムール川下流域と唐太における民族分類の変遷』佐々木史郎著を参考にして奴児干周辺の8つの諸民族を概観する。

シュレンクによる民族分類 マークに続いてアムール川下流域の民族構成について詳しい報告書を残し、後世の研究の基礎を築いたのはL. i. シュレンクとなる。彼はマークが旅行した同時期に、1854年～56年にかけて、約2年半にわたってこの地域の調査を行った。彼の2大業績である、『1854年～56年のアムールランドにおける旅行と調査』と『アムール地方の異民族について』を著し、後者の民族学関係の部分だけを取り出し、1899年ロシア語版で出版された。

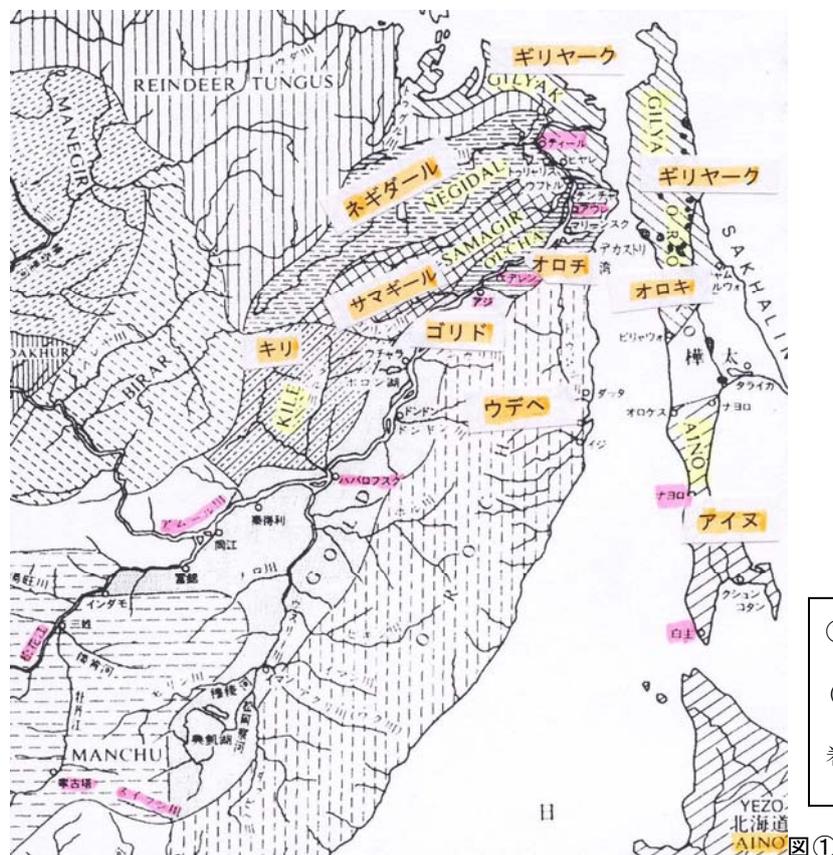
シュレンクはこの地方の種族を「異民族」と名称し、(当時帝政ロシア支配下ではキリスト教に帰依しない住民を異民族とした)ギリヤーク、アイヌ、ツングースという言語的に全く異なる3つの種族グループに分類して、諸民族を明確に分類したのはシュレンクが最初である。この大きな分類枠で最も広い範囲の大地を占めたのが、ツングース系民族、次に北部地域と唐太北部を占めているのはギリヤーク族(ニヴフ)、その次が唐太南部をアイヌ族が占めていると述べている。

そして、シュレンクは次のように諸種族集団を分類している。松花江とその支流域には満州^{マンジュ}(女真)族がいて、彼らツングースの中では文字と文献を持つ唯一の民族となっており、因って広大な中国をも支配したのが満州人である。嫩江^{のんこう}(アムール川水系に属し

松花江最長の支流)の河谷平野(吉林省と黒竜江省の西南部省境)にはダウル(モンゴル系、内モンゴルソロン八旗、中国語音をカナ転写「^{ダウル}打虎児」)がいて、この地域で最も早くロシアのコサックと遭遇した民族となっている。

嫩江^{のんこう}を更に北には清朝の軍団の子孫であるソロン(内モンゴルのエベンキ族、八旗の「^{ソロン}索倫」)がいた。シルカ川とアルグン川が合流してアムール川となる地点から、この川を下って行くと、漂白民であるオロチョン(アルタイ諸語のツングース系の言葉話す民族)に出会い、次にゼーキ川にかけてネギダール(ネギダル・アムグニ・ツングースの名称もある)がいる。そしてブレヤ川にはビラル(キリの西側)が住み、ブレヤ山脈の山地を過ぎると、河谷平野^{かこく}にゴリド(ナーナイ)が住み、そして彼らの下流にはオリチ(山丹人)、マングン(山丹人)と呼ばれる人々が住み、彼らは下流でギリヤークと接している。

この他にも、アムール川左岸に注ぐ支流沿いにツングース系の「民族」は、クル川沿いのキリ、ゴリン川沿いのサマギール、アムグニ川沿いのネギダールとなる。さらにウスリー川右岸支流の上流地方の山地と海岸地帯には、人口は稀薄であるがオロチの集落がある。唐太中部には半遊牧的生活のツングース系のオロキは少数であるが、同種のオロキには毎年トナカイを遊牧してオホーツク海沿岸からアムール川下流域に移動するトナカイ・ツングースもいる。



①・シュレンクによる民族分布図
(国立民族学博物館研究報告 26
巻1号)・民族名と色づけは筆者

アムール川下流域の民族 『アムール川流域の人々』 マーク E. E. M a a k
 (Художник Е. Мейер・アーティスト E. Майヤー)1859年の「アムール川沿岸の先住民民族」



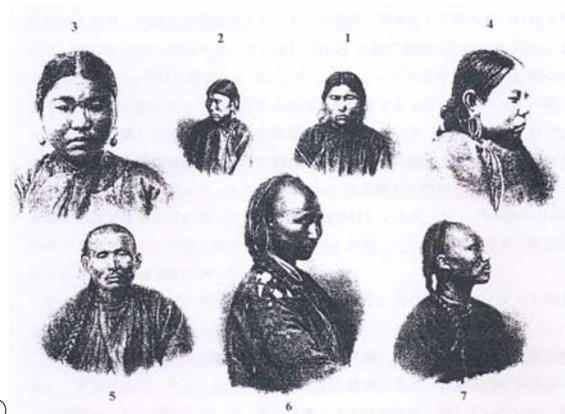
図②

②・「民族名」1～5・ネギダール、6～7・満州、8～12・ゴリド(ナーナイ)、13・マンゲン(ウリチ)、14～15・ギリヤーク(ニヴフ・ツングース系)となる。

ギリヤーク(ニヴフ)(図②の 14～15)言語が他の諸民族間との異なる点が大きな特徴である。「ギリヤーク」という名称はロシア人が広くアムール川下流域の住民全体を指して呼んだ。その居住地域はアムール地方の北東の外れ、アムール川最下流域と河口両岸の海岸地帯と唐太の北半部となる。彼らは東と北には他民族と接していないが、西と南にネギダール、オリチ、オロチらと交流し、唐太ではオロキとアイヌが直接接触している。この事は一面でギリヤークを他の民族から孤立させるが、彼らは大陸と唐太の諸民族を繋ぐ架け橋となり、中国・日本にも影響を与えている。



③



④

③・ギリヤークの男性 ④・1、2ギリヤーク女性・3、4ギリヤークの少女・5、6、7ゴリド(ナーナイ)
 ゴリドの男性は額をそる弁髪を結び「清」の文化を受けている。マーク E. E. M a a k (1883)

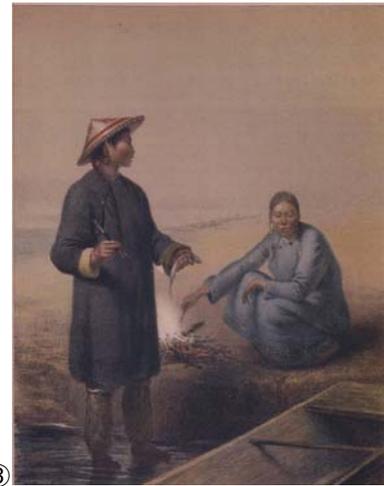


⑤スメレンクル夷(ニヴフ)男性 ⑥スメレンクル夷(ニヴフ)女性『北夷分界余話』国立公文書蔵

⑤・間宮林蔵の『北夷分界余話』男夷について、「其の人物は理髪・耳飾りともにヲロッコ夷に異なる事なしと雖も、容貌何となく少し上品なり。其の言語悉く異にして弁知(思慮分別)しがたき者多し。其の衣装も亦獸魚を用いる者少なからずと雖も、満州に至たって交易をなす事屢々なれば、木綿衣の類、満州製の物を用いる事多し。

⑥・女夷について、「女夷も亦ヲロッコ夷に小異ある事なしと雖も、其の容貌嫩艶(若くなまめかしい)なる者多く、浴場・成粧(よそおい)の事は見聞する事なしと雖も、嗽口(口をすすぐ)・成粧の事は見聞する事なしと雖も、嗽口・拭面(ぬぐう)する事は日毎に是をなす。故に顔色いつも瀟麗(さっぱりした素顔)として醜穢(みにくい)の色ある事なし。且つ其の情、蝦夷島(北海道)女夷と大に異にして、相識(知り合い)ならざる人と雖もよく馴昵(なれしたい)、言語通じないがその云処瞭然ならずと雖も時気歓談の応接などあつて、いかにも婉情妖態(従順でなまめかしい)多く、男子に接するさまは親意殊に深いと云う。

ゴリド(ナーナイ)(図②8～12)・ツングース系民族。ホジェン、赫哲とも呼ばれる。サケ・マス等の漁撈民。漢族から魚皮韃子(ユイピーダーズ)と呼ばれ、ロシア人からはゴリドと呼ばれた。尚、「ゴリド」という呼称は、19世紀当時のロシア語説となっていたが、シュレンクはそれには反論し、その理由は、間宮林蔵のアムール探検記録、『東韃地方紀行』に登場する「コルデッケ」は「ゴリド」に外ならないからである。ロシア語の「ゴリド」は、日本語の「コルデッケ」と語源的に同じ言葉となり、ロシア語起源説は成り立たないという。間宮林蔵も「コルデッケ」という呼称をゴリド自身から聞いたわけではなく、スメレンクル夷、即ちギリヤークから教わったのである。1850年代のロシア人も初めてアムール川を河口から遡った際に、ギリヤークから「ゴリド」という名の種族を知った。彼らの習俗は「狩猟と漁労を生活手段とする生活から、農耕民族としての満州の文化的な生活への転換が明白に観察される」とマークは述べる。

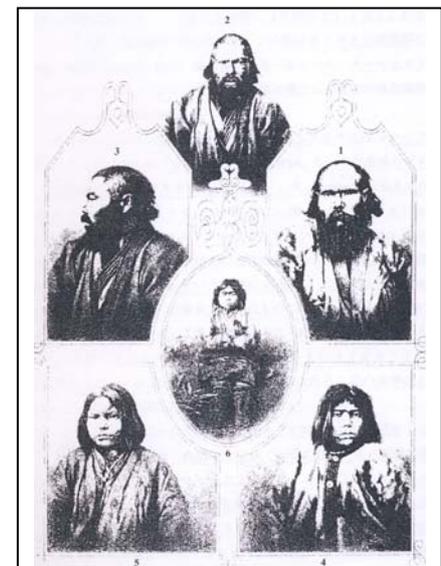


⑦・冬服を着ているギリヤーク ⑧・夏服を着ているゴリド ⑨・夏服を着ているギリヤーク

⑦⑧⑨L.シュレンク『アムール地方の異民族たち』第2巻・1899年刊行より

ネギダール(図②の1~5)・アムール川の西側には、左岸に注ぐ3つの大きな支流、即ちアムグニ川、ゴリン川、クル川が流れていて、その流域にそれぞれツングース系の住民が住んでいた。最も北のアムグニ川沿いにいる人たちをロシア人から「ネギダール」と呼ばれる住民となる。アムグニ川沿いでは、その居住地が上流方面と下流方面に分かれており、上流ではアムグニ川左岸に流れ込む支流であるネミレン川と、右岸のチュクチャギール湖周辺が居住地になっている。彼らは既に、17世紀から「アムグニ・ツングース」の名でロシア人に知られていた。

アイヌ ギリヤークがアムール川の東北部を占め、アイヌはその南東の地を占めている。唐太西海岸にアイヌの居住域があって、北部でギリヤークと重なる。ピニヤ・ウォ(ポロトコタン50度)から南へ北緯約49度迄無人地帯が続き、アイヌだけの村となる。最も北に位置するのがヲロッコである。東海岸ではオロキとの混住の村タライカ(湾)を除けば、ナヨロ(名寄)が最も北になる。シュレンクは樺太アイヌの流動は北海道から広がったものであるとしている。



⑩アイヌ・マーク E.E.Maak(1883)

★アイヌ民族をシベリアの諸民族の居住地から見れば

「北方民族」ではなく「南方民族」となる。ヤクーツク地方は冬期にはマイナス50度となり、

ユーラシア大陸北東部の寒冷地の諸民族の中ではアイヌが最も南端に住む民族となる。

★明治8年「樺太・千島交換条約」締結時に樺太名を使用。「交換条約」の日本語訳文に[樺太島(即薩^{サガレン}哈^ハ噠^ダ島)ノ権理ヲ受シ代トシテ其後胤^{いん}ニ至ル迄現今所領「クリル」群島、即ち第一「シムシユ」島と交換・・・]明治8年よりカラフト・唐太・北蝦夷名を「樺太」の字を使用。



⑪・北蝦夷アイヌ男性『北夷分界余話』 ⑫・北蝦夷アイヌ女性・(同、国立公文書館蔵)

★エゾ(蝦夷)とは今日のアイヌの祖先を指すが、サハリンのアイヌ民は自らを北海道の仲間とは明確に区別し、言語も北隣のニヴフ、ウイльта、更に大陸のウリチ、ナーナイや、時には満州や中国文化の影響も見られる。

オロキ 唐太の中部の民族オロキは樺太第3の民族で、ギリヤークとアイヌとの定住漁労民に挟まれて分布している。彼らは元々漁撈民ではなく、トナカイを使って季節的に移動する半遊牧的民族であった。南の方ではチェルペニヤ湾一帯で、アイヌと混住し、その名称については、南の隣人であるアイヌには「オロフコ」、西海岸のギリヤークには「オロングタ」、ティミ川流域のギリヤークには「オロコ」、大陸のギリヤークには「トゾング」、日本人からは「ヲロッコ夷」と呼ばれている。

シュレンクはその名称の起源を、オロチョンと同様にトナカイを意味する、「オロン」という言葉に求めている。つまりトナカイを飼う者という意味である。シュレンクは、このオロキ民族は山中や平原でトナカイを飼って生活をしてきた人々が、事情によりトナカイを失いその者たちが海岸に出て漁労民となった。トナカイ飼育を続けた者たちが大陸のオロチョンとなり唐太の「オロキ」が漁撈民と考える。



左よりサモゴン人、満州人、オロチョン
季刊ユーラシア・アムール河流域民族誌1

シュレンクは唐太の民族を総括してギリヤーク、アイヌ、オロキの言語や性格が全く異なる民族

民族がそれぞれ唐太と周辺地域の諸民族との交流を仲介していると述べる。そして、**ギリヤーク**はオホーツク海沿岸やアムール最下流域の人々と交流を密にし、**オロキ**はアムール地方やツングース系の住民との交流を密にして、**アイヌ**は北海道やクリル諸島と、そして日本(和人)との交流を担っていたのである。



⑬ヲロッコ夷(ウイльта=オロキ)男性

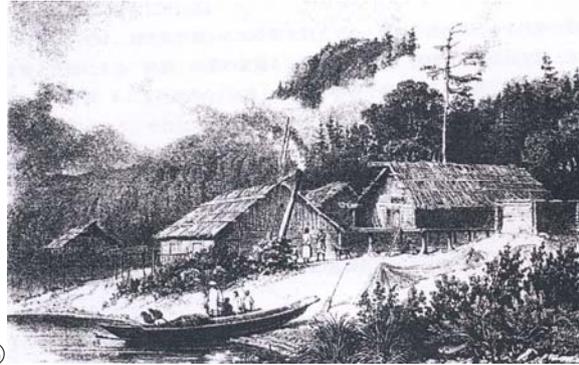


⑭ヲロッコ夷女性『北夷分界余話』国立公文書館蔵

オロチ 大陸にもどり、南にはオロチという民族がいる。彼らは日本海に面した海岸地帯に、その海岸に沿って走るシホテ・アリニ山脈(沿海地方からハバロフスクに位置し、900 kmの山脈)、そしてアムール川下流やウスリー川に流れ込む支流の上流方面に居住する。彼らは周辺のゴリド、ギリヤーク、^{マンジュ}満州らから「キャカラ」「ケカル」などの名で呼ばれ、それが漢族にも使われていた。シュレンクは、ゴリドの方がオロチと接する機会が多いことから、ギリヤークはゴリドから「ケカル」という名称を借用したのではないかと考えている。そして、**オロチ**の人口分布は南に多く、北に行くほど密度が低くなることから、彼らは元々朝鮮との境から北上して来たのではないかと述べている。彼ら夏期に多くは日本海沿岸に居住、冬期はキジ湖やそれに注ぐ川、アムール川に注ぐ支流の流域に移動し、彼らの南限はスイフン川(^{すいふんが}綏芬河)となり、「**マンズ**」「**マンツ**」と呼ばれ中国人と混在し、彼らはターズ(ウデヘ)と呼ばれている。漁撈民のオリチやゴリドと違って、漂泊的な狩猟民で移動性が高く、一般的にアムール川とウスリー川の支流の上流は**オロチ**が占め、河口付近と下流を**ゴリド**が占めていた。

オリチ(マンゲン) アムール川下流域でギリヤークと接しているのはオリチ(ドイツ語ではオルチャ)であり、ロシア人からはマンゲンと呼ばれた。彼らはツングース語を話し、北隣のギリヤークと異なり、方言の違いと外観、生活様式などの違いによって、南の隣人であるゴリドとも^{ことな}異っている。山丹交易の山丹人は**ウリチ**に推定される。

シュレンクは「オリチ」という名称について次のように説明している。「なぜ私がこの民族に「オリチ」という名称を使うのか、それは現在この名称をこの民族自身が名づけており、この名称が彼らのものであることを疑わないからである。私それを 1855 年に初めてアムール川沿いのオリチの全居住地に沿って旅をしたときに確信した。この名称の意味するところはオリチの有史以前の動向を垣間^{かいま}見せてくれる。



⑮・マンゲンたちの移動(E・M a a k 1859年)

⑯・マンゲンの夏の家(E・M a a k 1859年)

即ちオリチはかつて西に広がる山岳地帯でトナカイと遊牧していたが、トナカイを失ってアムール川沿岸に移住せざるを得ず、定住的な漁労民になったのである。同様のことは規模の大小はあれシベリアにいたツングース系の種族の間で繰り返されて来た。オリチの場合、この生活様式の転換が極めて古い時代に起きていたらしい。その記憶が現在でも伝説の中に残されていることを付け加えておこう。》と、述べている。



⑰松花江河口の住民・E.Maak・1859

キレング族はゴリドと同一民族となる

マンゲン族の熊祭り マーク原著「アムール河流域民族誌3」『季刊ユーラシア7号』

《マンゲン族のもとでは熊のために特別の檻が設けてある。マンゲン族は熊を神聖視しているので、よく世話をして飼い、祭日には熊はなくてはならない重要なものである。熊の頭部、頭蓋遺骨などでマザンカの内部を飾っている。熊の檻はマンゲン語で「コレー」という。丸太で方形に囲み、上部を厚板で打ちつけてある。その一隅に棒を立ててあって、何か宗教上に関係のある飾りものがそれに吊るしてあるのが普通である。時にはシャーマンが用いる髪飾りなどが縛りつけてある。どういう風に檻から熊を引き出すかここに記述する。熊を檻から引き出すには、檻の天井の一部を開け、わざと熊を怒らせて立ちあがらせる。その時一人の男が熊の頭上から輪索^{わな}をかけて熊

の胸中を縛り上げる。その準備ができると、こんどは檻の格子の一部をはずして、熊を檻の外へ引きだす。すると最も勇敢な者がいきなり熊の背中におどりかかって馬乗りになり、両耳をしっかり掴んで噛みつくことのできないようにする。他の者はこの鋭い爪で搔き裂くことのできないように前肢の掌と指をぐるぐる紐で縛り、また口の中へ鉄の鎖をはませる。かくして胸中を縛った輪索の左右両側へ綱をつけ、両方から人が引っぱって2本の柱にこれを縛り着ける。(略)『季刊ユーラシア』1972年

サマギール マムグニ川より1つ南のアムール川左岸支流であるゴリン川流域に
いるのがサマギールである。彼らはごく少数であるが、アムール川沿いの村ブルやウ
ディリ湖畔にもいる。その居住範囲の北端で、隣接するネギダールとの境界線はゴリ
ンとアムグニ川の分水嶺が形成している。彼らの来歴についてシュレンクは、類似の
名称を持ったツングース氏族がバルグジン地方やアンガラ川北部にいることから、そ
の一部がスタノヴォイ山脈またはブレヤ山地を超えてゴリン川にたどり着き、生活環
境の変化と、ゴリド、オリチらと交流、そして漢族、満州族との接触を通じて、次第
に源郷に残った人々とは、異なる民族になったと考える。そして、彼らが奥地のツン
グースと深い関係の証拠として、サマギール自身が他のグループの出身者に対して自
らを「キレ」と呼ぶことや、ギリヤークも彼らを「キリ」と呼んでいることが挙げら
れる。間宮林蔵も「キーレン」と呼んだ住民も、サマギールを指しているという。

キリ アムール川左岸に流れ込む第3の支流であるクル川にいるのがキリで、彼
らについては極めて情報が少なく、シュレンク自身もクル川河口付近の集落に住むゴ
リドから話を聞いたに過ぎない。彼の時代までクル川がアムール川のどの辺に流れ込
むのか、はっきりしていない。しかも「キリ」という名称は漢族によって歪められた
ツングース系民族の総称で、ゴリドの話によれば、彼らは卓越した狩人で、交易用の
毛皮も豊富であったという。

満州族(図②の6~7)・中国東北部、沿海州に住み、満州に発祥したツングース系民
族、古くは女真族と呼ばれた。17世紀に中国及びモンゴル国の全土を支配する「清」
を興した。清朝では民族全体が8つグサ(旗)に組織された満州8旗の氏族マンジュ、
満州民族、満州族、満州人とも呼ばれている。12世紀に中国北半分を支配して「金」

を打ち立てたのは女真族で、女真地域にいた 肃慎(みしはせ)・挹婁・勿吉(肃慎・挹婁の後裔)・靺鞨(随・唐代に活躍)の後裔と考えられている。更にマンジユ国は海女真4部と野人女真を併合して「後金」を建国となる。清朝ヌルハチは満州語を表記するため、「モンゴル文字」を改良して「満州文字」を作っている。

諸民族の家々拝見 シュレンク著『アムール地方の異民族たち』第2巻より



⑱

⑱・ギリヤークの夏用の家



⑲

⑲・冬のギリヤークの家中での犬餌やり



⑳

⑳・ゴリドの夏用の家



㉑

㉑・オリチの夏用の家

犬たちの活躍



㉒

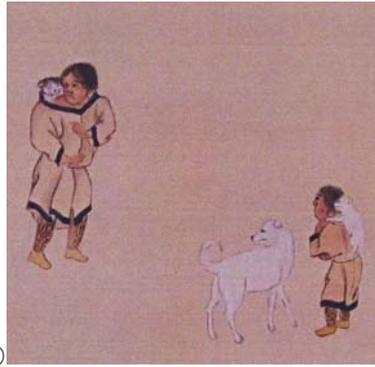
㉒・ギリヤークの冬の乗り物(L. シュレンク)



Гольди, едущие на собаках.
Художник Е. Мейер

㉓

㉓・犬橇に乗るゴリド(ナーナイ)E. Мейер(マーク)



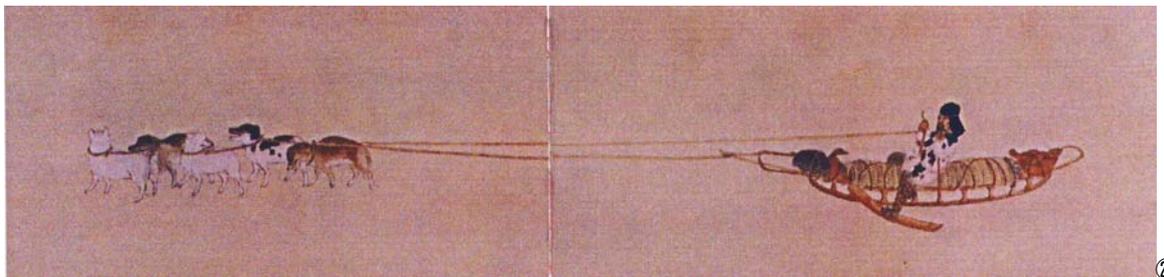
②④・「リュスク」で飾った犬の頭、ギリヤーク語で「飾り付けのホースカラー」の意。(L. シュレンク)

②⑤・『北夷分界余話巻之4』^{きんじゆう}禽獸馴呢(しゅんじ・犬を可愛がって教える。筆者の解釈)

②⑥・「使犬食餌」(犬そり用に飼育)『北夷分界余話巻之四』間宮林蔵原著より

②⑤・^{こいぬ}見犬を養うことは、縄で繋いでいるのは最初の頃だけ、又、魚骨は食べさせない。肉の小割にして是を食べさせている。実に小児が優しく育てるようである。

②⑥・此の島の夷、生産の第一事となす者は使犬なり。貧賤の夷は其の失費に困り、是を養う事はできないが、富貴の者は家々是をいとわず餌をあげている。一家養う処の犬、大抵5、6頭から12、3頭は飼って居る(是其の用をなす者、此れ他の牝犬・見犬の類、絆をもって養う者多し)。犬に食餌与える事、其の詳なる事は分からないが、大抵一日中、1～2回与えているようだ。生魚や肉を食べさせる事はない。能く乾魚を煮出してニマムと称する木器に盛り、2、3匹の犬と一緒に餌を与えている。



②⑦・「使犬曳橇」(犬曳橇は5頭組と8頭組があるという)『北夷分界余話巻之四』より

②⑦・^{ぎよじゆうつ}馭術(あやつる)は図の如く、両手に木杖を持って、^{そり}橇の上に^{そんきよ}蹲踞して、犬が駆けだすと、トウトウと云う声を発し、^{そり}橇に犬が何か当たる時は、^よ両手の杖で避ける。又^{そり}橇を止める時は、杖を地面に刺して、是を止めると、ある。(『北夷分界余話巻之四』)

★犬橇について、『サハリン島占領日記・1853-54・ロシア人が見た日本人とアイヌ人』ニコライ・ブッセ著・「九・ルダノスキーの西海岸調査」に犬橇の記述に、「自分で犬橇を御して旅をする時は、乗馬と同様に疲れるものである。軽くて丈の低い橇は道路の凸凹によって跳

ね上がり、たえず不安定な振動を起こす。それに加えて車外に投げ出されないように注意深く足をふんばり、鳥さえ見れば追いかけてやうとする犬たちを、監督しなければならない。掛け声はトウトウと声を発する」》とある。

サハリンアイヌの熊祭り



⑳



Илл. 13. Медвежий праздник инков. Голова и шкура медведя, выставленные в доме

㉑

⑳熊に1日中餌を与えライフルでハンターが屠殺 ㉑ニヴフの熊祭り・家の中に熊の頭と皮を飾る

熊祭り(イヨマンテ・熊送り)は熊を捕獲した時に行われる祭りではない。アイヌ民が幼い子熊を、2、3歳まで大切に育て上げた後、それを殺して神からの贈り物として、肉を食べ、血を飲んでいただく祭りで、その熊の霊を天国へ送るために、近隣の人たちが集まり盛大な祭りを執り行う、即ちアイヌ社会の最高の儀式となっている。

(イヨマンテに関心のある方は拙書電子書籍『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか』「第5章・シャーマンと鳥について・Ⅲ」68～70頁ご覧ください。)

『サハリン島占領日記 1853—54』「五・アイヌ熊祭り」ニコライ・ブッセ著に次の様にある。《・・・われわれは熊がどのように飾られているかを見るために外に出た。それは大変な敏捷さを必要とする作業であった。熊はまだ若いとはいえ、すでにかなり狂暴で力が強かったので、多くの人たちが押しつけ、長い格闘の末、アイヌたちはようやく、熊の首に両端を長くした輪縄(クサリ)を着けることに成功した。それから檻おりの天井を取り壊して熊をそこから引きずり出した。4人の男たちが熊に飛びついて、綱の両端をあちこちに引きずりながら熊を地面に押しつけたので、熊はどうにも動けなくなった。熊には色々な飾りが取り付けられ、頭には小さな木の削り掛け(イナウ)が結び付けられた。このような装束が調ったとき、群衆は歓びに溢れてススヤ川の方へ動きだした。15分ほど深い雪道を歩いた後、樹林に囲まれた空き地に到達した。

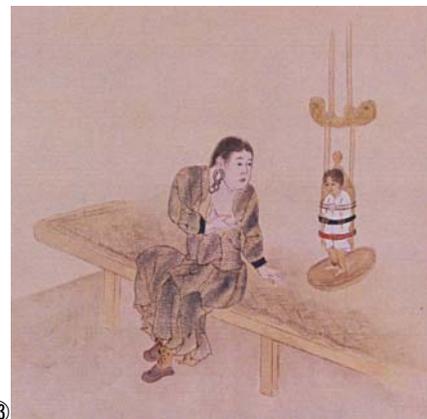
その空き地には祭壇(長さ約11m、高さ人の丈の柵)が建てられていた。特別に選り出された2本の丸太が立てられ、木は表面が削られ、先端は削り掛けで飾られていた。その一方に熊が繋がれた。アイヌたちはその周りに輪になって座り、一人の老人(シャーマンの役割)が熊の殺害に先立って行われる儀式を始めた。彼の手には木の削り掛けが握られ、しわがれた低い声でつぶやきながら、それを熊の上で振り回した。熊は恐ろしく怒り狂い、革紐をひきちぎろうとした。20分ばかりの祈禱を唱えて儀式を終えた。その時、熊の脇腹に力いっぱい矢を射込んだ。そして第2の、続いて第3の矢が射込まれた。やがて熊は息を引き取り、死んだ熊は織物や武器を飾った祭壇の前に清潔な床の上に置かれた。熊の両側には2人の長老が、彼らの傍には2人の若いアイヌが座を占めた。アイヌたちは熊に近づくと、うずくまりお辞儀した。私は実際に彼らがこの獣を神として崇拝していることを確信した。》と記述している。



⑩ サハリンアイヌの熊祭り・サハリン博物館刊『коренные народы』(先住民族・2010年)

⑪ 冬の熊祭り前祭りの遊びをしている・ギリヤーク(ニヴフ)・シュレンクの絵図

女たちのしぐさ 女夷はまた髪を乱垂(乱れ髪)せず、大抵は両耳のうしろに束ね、あるいは図の如く、分けて髪ゆいして背にたらし、又は男夷のごとく頸くびの上に束ねてある者もあって、其の髪形はいろいろである。



⑫ ヲロッコ女夷『北夷分界余話卷之七』

⑬ スメレンクル「梳頭女夷」

⑭ スメレンクル「女夷育子」『北

夷分界余話卷之八』より。林蔵はギリヤークを「スメレンクル夷」と称している。

③②・女夷はまた髪を乱垂(乱れ髪)せず、大抵は両耳の後ろに束ね、あるいは図の如く、分けて髪結いして背に垂らして、又は男夷のごとく頸の上に束ねてある者もあって、其の髪形は色々である。その容貌・顔色、蝦夷島(北海道)に比べ、美貌にして且つ人(男性)に媚びるような妖態が多い。浴湯・施粉(パウダ)はすることは無いといえ、日々其の顔面を水濯(水で洗い落とす)し、其の頭を梳(くしけず)って(とかす)、粧飾(しょうしょく)する者が多い。

③③・林蔵の洗髪観察は、「女夷梳頭の状、図の如く口に水を含みおいて屢々櫛目を濕し梳頭(髪をすく)する」。ギリヤークは原則として生涯頭髪を切らない。男女とも1本の垂れ髪に編む。男は生涯1本のままであるが、女性は結婚後2本に垂らす。

③④・ギリヤークのゆり籠について。子供が生まれると、火・山・海に向かって祈願、父親は朝日の最初の光に当たる木を切り倒し、それをくり抜いて揺籃(ゆりかご)を作る。揺籃には犬や兎の毛皮が敷かれている。母親は赤ん坊を揺籃にくくりつけたままで授乳することができる。林蔵は「嬰兒より四、五歳に至る皆如斯し、含乳(口の中にふくませる)する時は、束縛のまま是を抱いて含くませる・・・」とある。

間宮林蔵が見たギリヤーク族 加藤九祚著・国立民族学博物館研究報告1巻2号に興味深い記事が述べられているので要約で紹介する。

《「序」に林蔵がサハリン西岸のギリヤーク集落を訪れたのは1808年と1809年、ロシア・コサックより約100年遅いが、シュレンクの調査よりも約45年も早い。シュレンクはシーボルトの『日本』訳文を通じて間宮林蔵の業績を知り、「人々はそれを日本の旅行家間宮林蔵に負っている」と云い、シュレンクは林蔵を高く評価している。》

《「シュレンク、シュテルンベルグの見解」 ギリヤークにおける実例をシュテルンベルグ(1889年～1897年サハリンへ流刑、ギリヤークの言語・親族・宗教を研究)は記述している。「兄弟が妻を共有して同居し、両者の間に完全な諒解のある例を幾つも観察した。私のギリヤーク語の最初の教師であるタンギヴォ村出身のギベリカは、全サハリンを通じて最も裕福で尊敬されている人物であったが、いつもその弟のプレウンと同じユルタに住んでいた。そしてプレウンと兄の妻との関係は誰にとっても秘密ではなかった。子供たちも二人の父親に同じ態度で接し、また二人から同じようにかわいがられた。プレウンの死後は、彼の財産は、世間からギベリカの子供と考えられた子供たちに移った。プレウンは大変裕福で数人の妻でも買うことができたが、兄の妻を愛した。」

兄は、高い値段で買った自分の妻を共有することに少しも反対しなかった」。そしてシュテルンベルクが、兄弟で妻を共有することについてギリヤークの若者たちに聞くと、彼らは驚いたように聞き返したという。「ロシア人はそうでないのか。兄の妻と同意するのが何故悪いか」、ロシア人はそうではないと答えると、「それは大変困った掟きてだ」と言って、信じられないような面持ちで互いに顔を見合わせたという。》

「性生活」について 《林蔵はギリヤークの性生活が自由であり、女性が色気たっぷりであることを指摘している。たとえばギリヤークの女性は「其の情は蝦夷島(北海道)女夷と大に異にして、相識^{そうしき}ヲさる人といへ共能馴昵(ともにじっこん)し、言語通ぜざれば其の云う処は瞭然^{りょうぜん}(めいはく)ならずといへ共、時気寒暖の応接などなし、いかにも婉情妖態^{えんじょうようたい}多ク、男子に接するさまは親意殊に深しと云う」(★「と云」とあるのは、記述した村上貞助が「林蔵がそう語った」という意味で書いたものである)。

シュテルンベルクによると、ギリヤークは性的感情がわりあいよく発達している。ギリヤークの生業^{なりわい}が季節的漁労であり、余暇が多いこともその理由の一つに上げられる。戦争らしい戦争もない。せいぜい氏族間のトラブル位なものである。

狭い住居の中に数家族が住んでいることも早熟の原因であろう。ナーナイ人の作家ホッドジェルの小説の中に、アゴアカというナーナイの娘の結婚初夜の状況が次のように描写されている。「アゴアカは、ウルスカ(新夫の名)が彼女の毛布に入ってきたとき、恥ずかしそうに身をちぢめ、体をこわばらせた。彼女はその夜幸せであった。兄弟たちが彼女のそばで、夜ごとにその妻たちを可愛がる様子を見て気持ちをたかぶらせ、早熟になり、早くから自分が女であることを感じていた彼女は、この夜、自分の夫を愛し、彼に身をすり寄せ、そのぬくもり、力、耐久力にひたりきった」と。

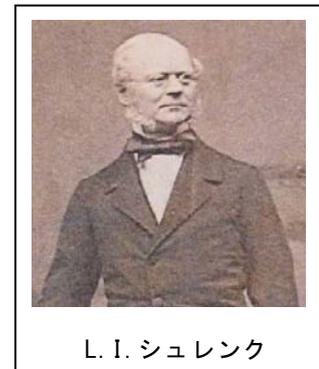
ナーナイとギリヤークは、いうまでなく場所によっては混住し、生活様式の面でも多くの点で共通している。ギリヤークの男性は成人と同時に性生活を始め、その余暇と想念のほとんどが女性に向けられた。それに、誰も彼もが結婚できるわけではなかった。多夫一妻と同時に一夫多妻の風習もあり、婚資(結納金)が無ければ嫁をもらうことはできない。そこで独身の若者たちは、自分の部落だけではなく、女性を求めて遠方の部落へ出かけて行った。ギリヤークは本来客好きで、いろいろニュースを持ってくるよそ者が歓迎された。「新来の客人は到着後、部落中の家々を廻り、自分の持って来たニュースを語る。男も女もこれに熱心に耳を傾け、客人はその間に、そこにいる女性に目をつける。ギリヤークの女性は一見近づきにくいように見え、眼を伏せ、話

かけても蚊のなくような声で答えるだけである。しかし、これはあくまで外見だけで、周りの家族に分からないように、気を引くような視線をなげる」。林蔵の言う「^{えんじょうようたい}婉情妖態」（色気 of 感情と妖しいさま）とはこれを指すのであろう。シュテルンベルクは、ビグルナイカという未婚の一女性は、自分の未来の夫を含めて、14人の愛人と交渉を持っていたという。

しかし、こうした自由も社会的規範によって制約される。即ち、付き合っただけでならない間柄の人との交渉は厳しく追及されるのである。この追及はしばしば自殺をもって終わる程である。しかし、妻の浮気の現場が夫に見られた場合でも、妻が殺されることはない。これについて林蔵は、「ギリヤークより山丹、コルテッケ、其の他韃地の諸夷、女夷はいかなる過失ありといえども殺すことなきを法とする。其の女を貴ぶ情しるべし」。シュテルンベルクは、彼の20世紀初頭のハリン島調査をし、男1000人に対し女785人、オホーツク海岸でも女694人となり、「女」不足の現象が見られ、妻をもらう結納金には苦労があったのであろう。またシュテルンベルクは、「ギリヤークの女性は、金銭で自分を売るロシア人女性をひどく軽蔑する」と記述している。》

★シュレンク л.и.шренк 【Leopol'd Ivanovich 1826—1894】

ロシア帝室アカデミーの支援を受けて民族学者、動物地理学者、気象学者、地質学者らからなる学術調査団を組織し、1854～56年にアムール川下流域とサハリン北部を調査し、膨大な資料を集める。報告書を1900年にドイツ語出版し、民族学の巻は1883～1903年に帝国科学アカデミーフェロー、帝国科学アカデミー出版『アムール地方の異民族たち』第2巻、シュレンク著・サンクトペテルブルクでロシア語出版した。彼が参照した文献の中には、シーボルトが翻訳した最上徳内と間宮林蔵の著作が多く含まれている。



★E・A・マイヤー 【Художник Е. Мейер・アーティスト・E. Майер1823—1867】、一般には「マークE.E.Maak」となる。極東の歴史・民族学者として知られている。ビックロシアの百科事典によれば、ロシアの風景画の才能ある画家と、美術史家に理解されている。特に色彩と光の明暗、光と色の合成は見事であると伝える。1842年、中央アジアのアルタイ、シベリア南部、ブリヤード共和国の旅に出て、山と谷の絵画は学位の銀メダルを授与されている。1854

年からアムール川とウスリー川に入り、先住民族アムール地方の風景画、民俗の道具・武器等の美しい図絵を描いている。1857年、サハリン島で最初の先住民の国勢調査を行い、2479人の人口を確認している。1859年、沿海地方・アムール地方の書籍を刊行。1860年、ニコラエフスク郡を管理する役職に就く。【『Годы и друзья старого николаевска』（「古い年代や友人のニコライエフスク」）の「Амурский художник—академик живописи」（「アムール川絵画のアーティストアカデミー」より）ニコライエフスク博物館発刊】訳は筆者による。

マークのシャーマン教について 『季刊ユーラシア』1972年・「アムール河流域民族誌」

(2) 探検家R・マーク原書の『アムール紀行』1859年刊を編集。加藤九祚訳。

《マネグル族(ツングース族・マネグルは主としてゼヤ河の中流域居住する種族。『満州国の現住民族』満州弘報協会発行・1936年より)の全体はシャーマン教を信仰している。教義の根本は善霊と悪霊の存在を認める事にある。マネグル族は「地の霊」尊崇畏怖し、この霊は地球上に生きており、密林や山上に生きており、密林や山上に住んでいると考えている。この悪霊は人間の生活に害を及ぼし色々な凶事を望んでいる。しかし各人は生贄を捧げることによってある程度まで凶事を免れることができると考えられている。それ故、狩猟や漁撈の際、旅行に出発する前、その他いろいろな家事を行うにあたって悪霊に生贄を捧げるのである。この凶悪な霊を特によく支配しうるのはシャーマン(土語はサーマン)と称するマネグルとなる。彼等はすべての宗教的儀式や呪術を行い、悪霊を呼び出し、それによって悪霊の欲するところ、人間に与える凶事を予知する者とされている。シャーマンが儀式を行うときは、いわゆる魔術の太鼓(ウントーヴン)を用いる。これは彼等の呪術にもっとも重要な役目をなすものである。



③⑤



③⑥



③⑦

③⑤・シャーマン・1894年 ③⑥・シャーマンの衣装 ③⑦・シャーマンのベルト・写真は『негидальская коллекция・ハバロフスクコレクション』ハバロフスク博物館刊より

シャーマンの上衣と帽子は必ず儀式を行う際に身につけるもので、上衣は膝のあた

りまでの外套のようなもので、この上衣には色々な動物を形の鉄製の飾りが縫い付け
てある。シャーマンの予言や呪言は無条件に信仰され、特別の尊敬を受けている。》

民族間の繋がり シベリア大陸の民族は、ロシア人を除くと、ツングース、モン
ゴル、トルコ、フィンなどいわゆるウラル・アルタイ系民族と同じ語系となる。遠い
昔に於いては、彼らは共通の起源をもっていたようである。しかし、人種学上に於い
ては、いささかも関係のない他の民族、ユカギール、アイヌ、カムチャダール、チュ
クチ、コリヤーク、エスキモー、ギリヤークなどの民族は、ウラル・アルタイ系民族
とは何も関係が無いのである。その種族は決して同じではなく、古アジア人、あるい
は古シベリアから出発している。今日の分布地域から彼らを見れば、みな遠隔の不毛
の海岸や孤島に居住し、彼らは農業に適さない大地に散在して居住している。

後、ユカギール・アイヌ・ギリヤーク等々の各民族は、優勢なウラル・アルタイ系
民族の移動に遭遇し、次第にその勢力に圧迫された。衝突、闘争を繰り返す終に追わ
れて今日のアムール川の流域に落ち着いたと考えられる。カムチャダールはカムチャ
ツカ半島へ、コリヤーク、チュクチはベーリング海峡に接近する海岸線に、エスキモ
ーはベーリング海峡に接近する島嶼^{とうしょ}に住み分けた。ギリヤークは黒竜江一帯で安住の
生活を送っていたが、やがてツングースに接触し、駆逐され現在の黒竜江河口周辺か
ら、唐太中部以北に位置に残存したグループと、唐太南進したギリヤークたちもいた。
唐太へ南進したギリヤークは、ここで日本人に駆逐された苦夷(古アジア人)たちと衝突
して、やむを得ず、唐太北部・中部に留まった。そして、アイヌ民族は北海道から日
本本土北部までに居住していたが、更なる大和民族の追逐^{ついちく}にあい、北海道、千島、樺
太南部に追い込まれた結果、残存し現在に至っているのである。



③⑧・サハリン北部・ノグリキのニヴフ村を2012年訪ねる ③⑨・サハリンアイヌ・『коренные народы』

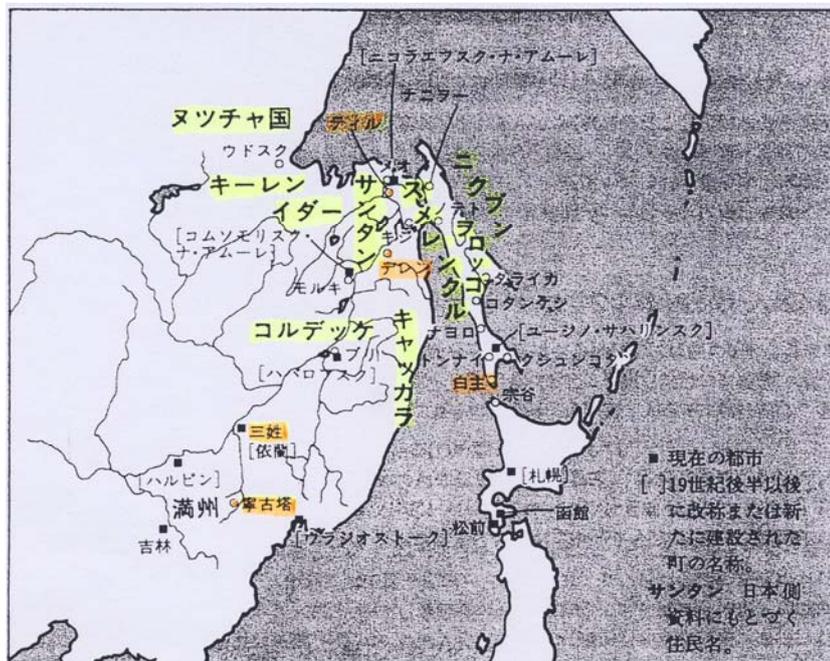
(「先住民族」サハリン州郷土博物館刊)北サハリンニヴフ村・1893年の写真。

第6章 山丹交易(サンタン交易)

序、山丹交易とは、山丹人と唐太^{カラフト}アイヌの人々が「絹と毛皮」の交易を指す。「サンタン」とは漢字で「山丹」、「山靱」、「山旦」とも表記され、「サンタン」の語源はアイヌ語の「サンダウクル」(サンタン人という意)にあるという。日本の史料に本格的に登場する時期も定かではないが、日本の北方に位置する“蝦夷地”が中国や朝鮮の北方地域と繋がっていることは、国内では中世代には知られ、それは“韃靼”^{だつたん}“韃地”^{だっち}と呼ばれていた。

元文4文年(1739)に刊行された坂倉源次郎の『北海随筆』に「サンタン」という言葉が登場する。《此タライカ(タライカ湾)より北方にあたりで、サンタン、マンチウと云所有、是北高麗也と松前者は云へり。錦、青玉等も此両国より渡り来るタライカの者共両国へ商いに行きて、常に交易するとなり。言語は夷とは亦違ひて、通ぜざる故、タライカの幼稚なる者^注を渡して言語習はせ、是を以て通辞とせり。・・・》とある。

有名なのは間宮林蔵の『東韃^{とうだつ}地方紀行』の“東韃”というのも韃靼^{だつたん}東部という意味で、このような名称を受け継いだものである。サンタン交易は、唐太や大陸のアムール川下流の住民たちが交易の主役であった。これらの「サンタン交易」について、『北方から来た交易民・絹と毛皮とサンタン人』佐々木史郎著と、『樺太研究』洞富雄著、『日露関係とサハリン島』秋月俊幸著を参考にして考察して行きたい。



図①

①・サンタン交易の舞台となる地域(『北方から来た交易民』佐々木史郎著より・色つけは筆者)

注・タライカの幼稚なる者とは、幼児をタライカ夷に預けてサンタン言語を学ばせていた。

毛皮と絹 お互いの国々は遠隔地となるが、唐太アイヌたちの毛皮と、中国の絹との交易の最大の目的は、中国国内での毛皮の需要は高く、絹などの物資交換をアムール下流域や唐太島(サハリン島)から毛皮を集めていたからである。その仲介を取るのが女真(女直)や満州と呼ばれた人々が主役となり、13世紀には金朝、13～14世紀には元朝、15世紀には明朝と続き、更に17世紀には清朝と、中国を支配する王朝が山丹交易に関わっていた。元代はアムール下流域の奴児干(ティル)の地に東征元帥府を置き、海の向こうの唐太島の先住民たちを服従させ、毛皮を朝貢させる事を政策としていた。諸民族の朝貢に対する獣皮の代価として、絹を恩賞として与えることによって、毛皮獣の産地を支配していたのである。

明朝は前代の元朝の方策を取り入れ、奴児干の地に都司指揮司を設置し、黒竜江中・下流地域の先住民族たちから、高級毛皮の朝貢を受け、その返礼として絹や木綿を与えた。諸民族側に於いては絹織物を欲していたので、明朝は「収貢頒賞」(朝貢)によって毛皮の産地を支配し、獣皮資源収穫と交易の管理を、満州民族を使って毛皮交易を独占していた。

帝政ロシアの場合は、毛皮獣の獲得に動き出したのは、1480年「タタールのくびき」(モンゴル帝国)から解放されると、ロシアは毛皮の獲得にシベリア地方から、更にカムチャッカ・アラスカへ進出し、やがて、北アメリカへと拡張して行く。毛皮獣資源の獲得に乗り出した仕方は、帝政ロシアはコサック軍の武力を基に、地域の民族たちの抵抗を抑え、毛皮による税(ヤサーク)として毛皮納めることを先住民たちに強要した。これが成功すると次には、ロシア本国から毛皮商人たちを連れて来て、鉄・金属製品と毛皮等の交易を拡大した。そして次の段階はロシア人自ら、毛皮獣を獲る狩猟人を送り込む手配侵略となって行くのである。



②



③



④

②エゾクロテン ③アムール・コサック兵 ④アルバータの毛皮交易者・1890年(ウィキペディアより)

★黒貂・[イタチ科テン属哺乳類]ロシア・中国・朝鮮半島・日本等ヨーロッパ東部まで分布。

帝政ロシアはヨーロッパ各地への毛皮輸出の販路を整備し、毛皮をヨーロッパ輸出に成功し、18世紀に始まる帝政ロシアの近代化は、毛皮交易の富を財政的な基盤の一つになっていた。毛皮生産地では強力なコサック軍隊の弾圧行動を以てし、毛皮確保に手を緩めず、飲酒をも毛皮交換に使かわれ、本来酒を知らなかった先住民族たちに悲劇を生み出す毛皮交易ともなっている。18世紀末に「露米会社」(86頁参照)として発展して行くのである。

交易活動の主役はサントアン人 サントアン交易は、18世紀～19世紀にかけての時代に、今日のアムール川下流域と唐太を舞台に盛んに行われた交易活動となる。この交易の主役の「サントアン人」は、現代のニヴフ(ギリヤーク)、ウイльта(オロッコ)、ウリチ(オルチャ)、ナーナイ(ゴリド、ゴルチ、^{ヘジェン}赫哲の名称)、唐太アイヌや北海道アイヌたちなのである。18世紀の後半、唐太に派遣された松前藩や幕吏調査官たちは、大陸から交易にやってくるサントアンの人と遭遇し、事情を聞き書きしている。満州風の装束で現れる彼らを、アイヌたちは「サンダ」、「サンダウングル」と呼び、日本側の調査官からは「サントアン人」と呼ばれた。彼らは当時日本で海峡渡し(宗谷一白^{シラヌシ}主間)に使われた「^{ずあいぶね}函合船」と同じ大きさの船に、7、8人ほど乗り込み、^{きぬ もめん}絹や木綿の生地、鷲や鷹の尾羽、青いガラス玉(青玉)を持って交易に到来し、唐太アイヌたちはクロテン・カワウソ・キツネなどの毛皮と交換した。彼ら山丹人は海峡を越え、北海道北端の宗谷にあった幕府指定の交易会所まで足を延ばし、北海道アイヌらと取引をしていた。いろいろ不都合が生じ、寛政3年(1791)、交易所は宗谷から白主(唐太南端)に移り、彼らとの取引は「サントアン交易」は唐太白主の松前藩直轄会所となったのである。



⑤



⑥

⑤蝦夷錦・本来の形を留めている・市立函館博物館 ⑥蝦夷錦幕(赤地^{もろぼろ}蟒袍)清の官僚たちの儀礼服地



⑦青玉(唐太玉) ⑧山靴交易調書・北海道文書館 ⑨間宮海峡幅 7、3 km、最浅部 8m『蝦夷錦の来た道』

日本へ入荷した絹織物は「山丹服」(筒袖で前身が広く、韃鞃スタイルの長衣「十徳」^{じゅうとく}とも呼ばれる)、「蝦夷錦」(山丹切れ)などという言葉が生まれた。十徳は羽織や僧侶の袈裟に、山丹切れは刀袋や長刀袋^{ながなた}として武家や寺院衣装に愛用され、また蝦夷錦の紙入れ、青玉(アイヌ玉)共に、町人たちの「粋文化」^{いき}の小道具にもなっていた。

間宮林蔵は唐太から韃鞃大陸へ渡る

間宮林蔵(1780-1844)は文化5年(1808)北海道宗谷岬から唐太に渡り、唐太が島であることを松田伝十郎と共に確認する。当時、ロシア海軍が南下して幕府の領海線を侵犯していたのは、ロシアの目的は日本との通商を幕府に求めていたが、幕府は鎖国政策を頑^{かたくな}堅持し、和親の場を作ることを拒み続けていた。そのために幕府は北蝦夷地(唐太)を緊急に調査の必要に迫られていた。

即刻、幕府は手始めとして、唐太の南端から北端までを調査するよう箱館(函館)奉行に命じた。当時、幕府の唐太地理の掌握の認識は、松前藩が唐太南端シラヌシ(白主)に夏期(春先から9月中頃)の場所請負制(アイヌ民使役の漁業場)の藩の役人と、漁場(場所)請負商人が詰めていた程度の支配領有意識となっていた。松前藩の唐太の国界意識^{くにざかい}は、唐太南部に住んでいるアイヌ夷・オロッコ夷・ギリヤーク夷が、暗黙の了解地点なる所は、ナヨロ(北緯48度)辺りが境となっていた。従ってナヨロから北の北端までどのようになっているか、そして北の海岸は大連続きの半島であるのか、さらに唐太北端の上に、更に「サガリイン」(実在する島か否か)という島が、もう一つあるという話については、その確証は得られていなかった。

寛政4年(1792)ロシアのラクスマン(1766-1806 ロシア帝国陸軍中佐)が、伊勢国の漂流民大黒屋光太夫ら3人を連れて、日露交渉を求めてきたが、その交渉は幕府の強い意志と方針により拒絶された。文化3年(1806)9月、苛立つ^{いらだ}ロシアの軍艦2隻が、太南

端の松前藩会所を襲撃の暴挙に出た。その翌年4月には、^{えとろふ}択捉島に上陸し幕府守備隊を襲い施設を破壊され危機を抱いた幕府は、松前藩の唐太南部の地を幕府直轄領^{ちよつかつ}にして、弘前藩と南部藩に領土保全の警備命令を出した経緯となっている。(露国は武力行動に出て日本との交渉成立を思考していた)。この時代、幕府首脳はロシアの勢力が、唐太のどの辺りまで及んでいるのか、その確認調査を急務とし、その人選に間宮林蔵が選ばれたのである。何故に「雇^{やとい}」の身分の低い役人の間宮林蔵が選ばれたのか、それは幕府



⑩・アダム・ラクスマン

の鎖国政策問題に依ったものである。国交の無い幕府政府役人は、露国へ入国した事が発覚した場合を考え、民間人が唐太に潜入した程度の地方事件での解決策を考えていたのであろう。

唐太の大地をロシアは何処まで領有しているのか、それを正確に知りたかったのである。その役目を間宮林蔵に指名し、諜報の任を命じた。唐太は宗谷岬から43kmの距離となり、大陸アムール河口から唐太島までの幅は7、3km、水深8mの至近距離となっていた。蝦夷アイヌ(北海度)と北蝦夷アイヌ(唐太)の関係は知り得たが、その先の東韃靼地方の地理と山丹交易行路が掴めず、幕府は唐太経由の奥地山丹人^{さんたん}による蝦夷錦^{えぞにしき}や樺太玉^{からふとだま}(青色玉)等の交易路と実情は全く掴めていなかった。

更にその先のアムール下流域に居る山丹夷族等については話しだけの理解であり、幕府は唐太アイヌ経由の毛皮交易の実情を幕府は入手しなかったのである。

安土桃山期の豊臣秀吉が、蝦夷錦を褒め称えた話が伝わるように、好奇心の強い全国の藩主たちが、蝦夷錦を松前藩に求めていた。その交易品については唐太南端の白主のアイヌ民を通じてのみ入手する方法であった。

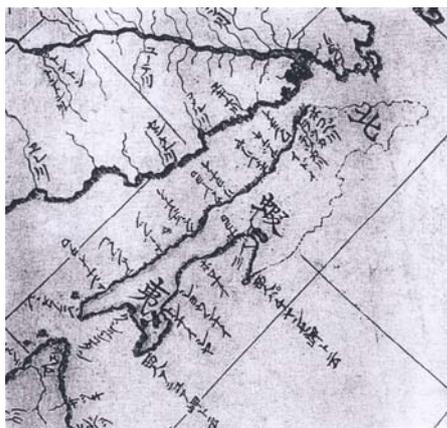
それ故に松前藩はアイヌ民へ苛酷な強制命令で蝦夷錦等を差し出すように求めていた。その結果、唐太南部のアイヌ民たちは、錦の代価(毛皮)を支払えず、山丹人らに代価の未決済が続き、その結果、山丹人へ借金の形に、アイヌ民が大陸へ連れ去られる人質事件が起きていた。この問題を放置することは、幕府に於いて唐太南部の居住するアイヌ民たちの心情が幕府(日本)から離れ、ロシア側に帰属してしまう事を幕府は恐れていたのである。(関心のある方は、拙書電子書籍『ジンギスカン即源義経・流布の顛末』「第3章 32～34頁参照」)

間宮林蔵の「間宮海峡」発見の意義

19世紀に入ると最上徳内・中村小市郎らによる唐太調査も進展していたが、その調査は唐太の中央部当たり迄で、唐太が半島であるのか、島であるのか判断できないでいた。その正確な情報は間宮林蔵と松田伝次郎による「間宮海峡」の確認(発見)によって唐太は、島であることが正確に知り得たのである。海峡調査に関して、林蔵ともに調査に従事した松田伝次郎の方が先に、唐太は半島ではなく島であることを、確認したのは伝次郎の方であるが、唐太北端のナニオーまで行き、海峡であることを再確認したのは間宮林蔵である。

しかし、その後の間宮林蔵の行動は凄かった。文化6、7年(1809-10)、コーニという名のスメレンクル夷(ニヴフ族)との信頼関係によって、アムール上流の「デレン」(満州仮府交易出張所)までの探索行は、日本人による「海峡と韃靼地図の確認」に於いて、ロシア・ヨーロッパの探検家を追い抜き、多大な功績を世界の歴史に示した。そして、林蔵の『東韃地方紀行』の記述は、日本研究のフォン・シーボルトによって、ドイツ語で『日本』の著作はヨーロッパで発表され、林蔵のアムール下流域の地誌・民族・民俗学を世界の人々に図絵入りの紹介となったのである。

後世から見れば輝かしい大殊勲の功績なるが、これは多大な犠牲者を出した「シーボルト事件」に発展し、幕府天文方高橋景保他十数名が死刑者を出し、歴史の必要悪と言える事件かも知れない。そして、極東の唐太島周辺は気象条件の難事が重なり未解決の地域となり、当時、北半球上で最後に残されていた未開地図の地域、それは、日本・清国・ロシア等の野心国に併合できるチャンスの宝の島であったのである。



⑪



⑫

⑪高橋景保の『日本境界略図』北蝦夷北部とその東側は点線図となる ⑫・宗谷岬の間宮林蔵の立像

⑫・稚内市教育委員会の「間宮林蔵渡樺の地」説明板に、「ロシアの南下政策に驚いた幕府は文化5年(1808)4月13日間宮林蔵と松田伝十郎を北蝦夷(カラフト)の調査に向かわせた。・・・この年、林蔵は再び北蝦夷に渡り越冬、翌年文化6年(1809)春、

西海岸を北上し北蝦夷は大陸と海峡を隔てた島であることを確認した。夏期に大陸交易に赴くギリヤークに同行、アムール下流の満州仮府デレンを訪れ、この地方の情勢を調査し、『韃靼紀行』に報告した。後にシーボルトは海峡の名を「間宮の瀬戸」と名付けて世界に紹介した。」とあった。(稚内市教育委員会)



図⑬

⑬・フィリップ・フランツ・シーボルトの『NIPPON』・福岡県立図書館郷土資料室蔵より

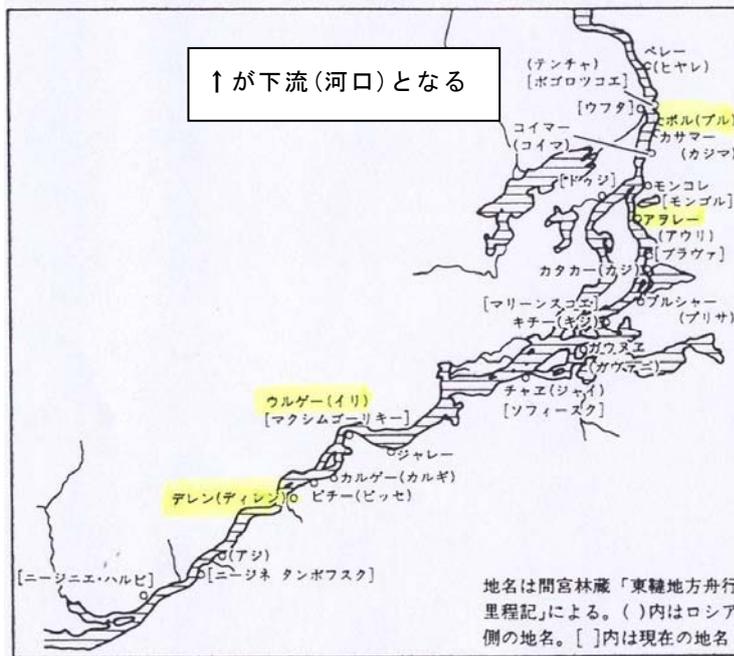
シーボルトは高橋景保^{たかばし}から間宮林蔵の樺太図^{まがはら}を入手し、シーボルトは最上徳内との約束を守り25年後の1851年にこの地図は刊行された。この図でもノテ岬の北端と、東海岸北端は地図が詳細となっていない。

サンタン人の故郷 サンタン人は、現在のウリチ(オルチャ)という民族であると云われている。間宮林蔵が採録した「マンゴー」は重要な話で、後のロシア人に採用された「マングン」と同じである。この呼称の正確な形は「マングーニ」で、「マングー」とは彼らの言葉でアムール川を意味し、「ニ」は「～の人」を意味する接頭語である。直訳すれば「アムールの人」という意味なる。既に19世紀に明らかにされた事であるが、アムール川を「マングー」というのは今日の「ウリチ」と、彼らの隣にいた「ナーナイ」のアムール下流方言を話す人々であり、その他方言は「マンボー」と呼んでいる。自らを「マンゴー」と呼ぶのは、今日のウリチとナーナイで、林蔵が採録した自称から今日のウリチの祖先につながる人々となるのである。

⑭・デレン仮府と思われる所の風景なので写真を載せた



⑭



⑮ サンタン人の居住地について林蔵は、ウルゲーより上流にコルデッケ夷があり、ポルより下流にスメレンクル夷があると述べている。

図⑮

⑮・林蔵はアムール川下流域のサンタン人居住地について、ウルゲーより上流にコルデッケ(ナーナイ)がいて、ポルより下流にスメレンクル(ギリヤーク)がいると述べている。この地域の要に満州仮府があった「デレン」(德楞・現在のカルギ附近)やウルゲー付近は兩岸に山が迫り、川幅も狭くキジ湖に近づくにつれて川幅が増し、幾つもの水流となり、キジ湖、カジ湖、ウディリ湖らが点在する大アムール川の流れとなる。この辺は魚類の豊富で川の恵みに溢れている。緯度的にはサハリン北部と同じだが大陸的な気候となり、夏はサハリンより高温になり、そして真冬にはマイナス30度にもなり、因って地形と気候の問題等から農業は困難となっている。

山丹交易の歴史 山丹人は満州仮府役人から賞賜された品物や、交易市場で満州人から得た古官服(拾徳)・錦・綿織物・玉・タバコ・扇・銭等の中国製品を唐太へ持ち込み、唐太アイヌや北海道(蝦夷)アイヌを相手に、水獺・狐・貂等の毛皮に交換、

そして日本側から渡った鉄類・鉄製品(斧・小刀・鍋・針・燧鉄^{ひうちがね}・夷刀等)・酒・米・煙草等と交換となる。山丹から持参の品物の内で、錦の拾徳や切地(織物・反物の服地)は本土で蝦夷錦と呼ばれて珍重され、アイヌ酋長らの晴着等になっている。

山丹交易は北蝦夷に居住していたギリヤーク(ニヅフ)、中部のオロッコ(自称ウイルタ)らが、唐太南端の白土へ中国の物品を交易場に持ち込み、その物品を南部のアイヌの毛皮と交換し、さらに山丹人は北海道宗谷にも渡り、北海道アイヌからは日本より仕入れた米・酒等に交換した。宝暦(1751~1764)の頃から、宗谷アイヌの乙名(酋長・日本側の役族長)が唐太へ渡り、唐太アイヌと交易を行っていた。安永中(1772~1781)頃に名寄(ナヨロ・西海岸・北緯 48 度)の酋長楊忠貞(清朝漢名・族長・ナヨロのバラ・イ・ダ)が宗谷に来たことが知られている。

★ナヨロの惣乙名シトクレランは、サハリン島に於ける最も有名なアイヌ長老であった。彼の曾祖父は清国の三姓地方兵丁副都統からハラダ(部族長)の官名を授け、「楊忠貞」の名を与えられていた。シトクレランは幕吏の呼び出しに応じなかった。三姓は現牡丹江市辺り。

当時の状況では、寛政 2 年(1790)初めて唐太経営に乗り出した松前藩は、この年、白土に会所を開いて、山丹人と唐太アイヌ及び宗谷アイヌとの交易場を白土に限定した。それまでの松前藩の統治権が及んでいない時代は、北唐太のギリヤークやアイヌでも北辺の人たちは、それぞれ地方で山丹人と自由に交易していた。限定前の山丹交易はアイヌ人と山丹人であって、松前藩吏はなんら関与せず、又、山丹人から貢物を受け取らない政策を執っていたのである。

当時の交易状況は、松前藩は山丹人の対応をまるで腫物にでも触れるようにしていたと伝わる。それは中村小市郎・高橋次太夫の両人が、享和元年(1801)幕命により北蝦夷(唐太)探検の際、聞き書き記事に「山丹人に松前家来は相對致さぬよし。松前を尊敬する事もなく、我儘^{わがまま}なる風儀のよし。同類喧嘩を時々致し候の由。其節は唐太運上屋にて鉄炮を放し候、止め候由也。」とある。又、松田伝十郎も『北夷談』の文化 6 年(1809)の條で、「山丹人、会所(交易場)へ出入りするに、晴雨に拘わらず、笠をかぶり、ゲリ(履物)をはき、くわえ煙管^{きせる}、後ろ手にて、鼻唄をうたい、入出いたし、甚だ不法の風俗、不取締の第一也。」その振舞いは傍若無人の態度であると記している。

山丹の交易取引は、山丹人は唐太アイヌに今年度分を貸付け、翌年取り立てるという方法を取っていたために、どうしても追々に負債残高がたまり、その決済ができな

くなり、その代償としてアイヌの子弟を連れ去っていた。その部落で親類縁者もない者や、貧困の者は錦3、4巻ないし6、7の価格で山丹人に売り渡すような悪風もあったという。

寛政4年(1792)に西海岸をクシュンナイ(北緯48度の上)まで巡察した最上徳内は、「かかる事実はまったく松前藩政のしからしめた(その様な結果)処である」と痛憤し、最上は更に「クシュンナイ(久春内)より山韃への渡り場ノテト(間宮海峡入口52度手前)という所まで百余里の間、蝦夷住居は2、3カ所のみにて、其の外、皆山韃へ借金の代わりに連行されたと聞く。人家絶える所もあり。初めて此の事を聞き、皆落涙した。蝦夷錦は美しきものであるが、紙入れ拵^{ごしら}え、青玉を風鎮^{ふうちん}(掛軸の錘)して愛玩するが、顧みれば、蝦夷の身を異国へ売り渡した代金なり。実に体の塊^{かたまり}なり。山韃へとられて蝦夷の女房や子供は、錦・青玉は親の身に夫々の敵よと、嘆き哀^{あわれ}ども、借金をせめられ、返すことができなければ、抛^{よる}なく一生の別れをして、異国へ囚^{とら}われ、又残された妻子は、草の根を掘って食べ、「あぢきなき」(どうにもならない)命をながらえても、生きて甲斐なき風情なり。

是皆松前にて催促にて、錦・青玉を買い上げるからだ。此のような事を、数十年来、知らずにいたこと、不埒^{ふらち}(道理に外れた)と申す事なり。其の上に錦・青玉の類を国産のように言いふらし、諸侯へ遺物にしているのも、実は国産にあらずして、此の上もなく悪産なり。満州の官人どもは、日本の油断している事を笑っているにちがいない。たとえ数萬両の金を捨てるとも、是まで捕らえられた蝦夷を返してくれと思うなり。」と憤懣^{ふんまん}の気持ちを述べている。(最上徳内『蝦夷草紙後編』)

寛政4年(1792)当時の松前藩による唐太経営に着手してから3年目、クシュンナイやこれより少し南のナヨロのアイヌたちは、日本側と清国側との両国に服属の状態になっていたのである。唐太北部のアイヌに関しては松前藩の勢力範囲外になってはいたが、松前藩の山丹人による南部アイヌを借金の形に連れ去る事について、何ら保護をしなかった事も事実である。徳内が言うように、松前藩は山丹交易品をアイヌから買い上げたものではなく、東岸のクシュンコタンや西岸のトンナイ(真岡・ナヨロとシラスシ中間)の番所で行う漁撈の秋場所の引き払い前に、「オムシャ」(撫育政策・役夷人の任免、役料支給等による統治)の儀式があり、その時に松前藩吏の与える米・酒・煙草などの「土産」に対し、アイヌ側の返礼として山丹交易品を差し出した物が、松前藩の蝦夷錦等の品物であった。「オムシャ」の儀式は下記の様な絵図となる。



図⑩

⑩・日高アイヌのオムシャ之図・絵図は奥座敷に藩士、アイヌ族長は土間に^{むしろ}蓆に座して拝礼となる

★アイヌの人々は13世紀頃から蝦夷地を拠点として、本州や唐太や大陸の人々と自由な交易を行っていた。16世紀末に松前藩が成立すると、アイヌの人々の交易は松前藩に独占され、松前藩は米の収穫がゼロであったため、藩の財政はアイヌ交易によって賄われた。その仕組みは「商場知行制」呼ばれ蝦夷地各地に「漁場所」を区切り、それを家臣に支配させ、アイヌの漁労交易で得た品物で、本州の米・酒等に交換していたのである。7月～9月頃、「オムシャ」の行事期で、アイヌ民を集め、米や酒等で振舞い、場所の規則を申し渡す儀式であった。初期の段階では、対等の関係であったが、やがて1669年、松前藩が「シャクシャインの戦い」でアイヌを平定し、松前藩は蝦夷地に於けるアイヌ交易との交易に絶対的指導権を握る。「オムシャ」儀式もやがて松前藩への服従の儀式に変わって行く。(函館市中央図書館より)

幕府は唐太南部を直轄地にする 文化4年(1807)、幕府は唐太島南部を直轄地したことで、この時点で初めて山丹人の不法行為を取締り、アイヌ民を保護するために山丹交易の改善に着手した。その役回りに当たったのは、間宮林蔵と松田伝次郎であり、同6年、唐太・宗谷アイヌの山丹人への負債を調査し、この年に渡来して来た山丹人に官物をもって償却(返済)した。尚、旧債を有する山丹人には、必ず3年以内に請求すべしと申し渡した。そして今後の貸し借りを一切禁止し、且つ交易の取締を厳重にして、無礼な行為をした者に打ち懲らしたので、山丹人は^{いふく}畏伏し、松前官吏に対する不遜な態度を改めた経緯となる。この時の旧債精算額は、^{てん}貂皮 5546枚(唐太 2975枚、宗谷 2571枚)、及び^{かわうそ}獺皮直し 2523枚の内、499枚だけを負債者に支払わせ、残りは官の費用を持ってこれに当て、皆是を以って完済とした。ここに於いて、アイヌ民に対し、今後の貸し借りを一切禁ずると同時に、オムシャに於ける山丹交易品を提出させる旧習を廃止した。これ以後、自主に於ける山丹交易は官営(幕府側)に移り、交易品は全て

官に属し、蝦夷地各所で買い上げた獣皮を自主会所へ集め、山丹人と直接交易をすることになった。

このように幕府が積極的にアイヌやオロッコ夷の保護に乗り出したのは、我が領土内の夷人たちを、清国領土内の夷らが経済的優位の立場に置くことは、清国の夷らによって政治的関係を結ばせる結果となることを恐れたからである。同時に唐太南部が日本の領土であることを、唐太夷らに明確に認識させるための処置でもあった。困って、名寄アイヌ、自主アイヌたちに幕府の統治政策は深く感謝されたのである。

唐太が幕府の直轄地となった以上、長崎一カ所のみ許されていた外国貿易港に付いては、幕府としては困った問題であったが、幕府の立場として、国境を越えて、山丹人が不法を働く事ができないように厳重に取り締れば、サンタン夷と唐太アイヌたちの負債問題は、自然に止むであろうと考えたのである。



図⑱・於シラヌシ会所山丹交易之図

「山丹夷来る時は先ず、海浜に仮屋を造り居となし、山獵をかせぎながら交易をなすなり。大抵島夷、其仮屋に至って交易をなす・・・」

山丹交易と政治的背景と歴史 幕府がカラフトと関係を持つに至るのは、寛永12年(1635)松前藩の家臣佐藤嘉茂左衛門・蠣崎蔵人を遣わし、ウツシャム(自主附近)に渡っただけで引き返している。翌年甲道庄左エ門遣わし、ウツシャムで超冬し翌春に東岸をタライカ湖畔(東側)まで踏査した。(『新選北海道史』第2巻・通説I)

当時、唐太夷らは松前藩に対し、商船を唐太へ廻して交易を開きたいと願いが出たが、松前藩はその処置を執らなかった。下って宝暦2年(1790)、漁場の運営に唐太南部に場所を開いた。この時、松前藩から派遣された高橋清左衛門が、西岸はコタントル(古丹)、東岸はシレトコ(中知床岬)までを探検し、南端の自主に会所(漁場運営所)を開き、東岸のクシュンコタン(大泊・アニワ湾)と西岸のトンナイ(真岡)に番屋を設置した。翌3年、藩士松前平角らを遣わし、唐太の調査の結果、蝦夷と山丹人との交易場所は自主にのみとした。この唐太交易を請負ったのは、宗谷を拠点にしていた福山の商人、村山伝兵衛で、藩の直接支配の名のもとに営業し、藩からも毎年士卒3、4

名を勤番させて漁場を確保した。後、寛政12年(1800)に松前藩は唐太交易を直営に移して藩士に管理させ、大阪の商人柴屋長太夫が仕入れ事業を継続させた。

この頃、ロシアの南下の危機に直面した幕府は、蝦夷地に対する軍事的・経済的な現地政策の必要に迫られ、その準備として北海道・千島・唐太の調査探検を急務となった。第1回派遣調査班は、天明5年(1785)に唐太南端白土、西海岸タラントマリまで、東海岸はシレトコ岬まで踏査し、翌年、西海岸クシュンナイまで探検した。これに続き、寛政4年(1792)、享和元年(1801)、文化5年(1808)と幕府の調査は3回行われたが北進することはしなかった。

享和元年(1801)に西岸を探検した高橋次太夫がナヨロで調査したとき、ナヨロ辺のアイヌの乙名ヤエンコロアイノの話に、「1年は唐太の運上屋に来て、1年は山丹に行き、双方に通じていると云う」という話を聞き、その事情は清国と日本との両属関係にあったことが分かった。ナヨロの酋長は清国側の「ハラダ」(族長)であると同時に、日本側の族長名「乙名」(酋長)に任ぜられて、両国の服属関係を持っていた。

幕府は、島の東側の蝦夷地の永久上地を命じただけで、唐太島全域に対し領土の熱意を示さないでいた。唐太の西側海岸の地を幕府の直轄地としたのは、文化4年(1807)3月のである。唐太の呼称「カラ」に外国(韃靼地方)の意味があるので、幕府は文化6年(1809)、唐太を改め「北蝦夷」と呼び名にしたが、唐太の字を当てたが、「カラフト」の呼び名が依然として続けられていた。これが結局この名称が「樺太」という無理なあて字に改められたのは、明治2年に北海道国郡命名が施行された時となる。

幕府はロシアの南下を想定していたが、文化3年(1806)9月及び翌年5月に、2度にわたり、アニワ湾のオフトマリ等の3カ所が露国軍艦の攻撃を受けた。更に露艦はエトロフ^{エトロフ}・リシリ^{リシリ}択捉島・利尻島(リージリ)の2島をも襲撃し、幕府はその様な状況下に、ロシア勢力が唐太に向かうのは時間の問題と捉えた。が、現実の帝政ロシアの方針は、日本を武力で威嚇して通商の道を開こうしていただけで、この頃のロシアの思惑はまだ領土占領の意図はなかったようである。この報に接した箱館奉行は、文化5年(1808)、会津の藩兵がカラフト警備に赴き、翌6年には津軽の藩兵が守備についていたが、ゴロヴニン幽囚事件(ロシア人の千島列島測量中に松前奉行に捕縛事件)が解決したのでロシアの脅威が薄らぎ、東北諸藩は財政負担に堪えられなくなった事情も重なり、同12年(1815)、唐太の衛所(砦)は廃止された経緯となる。

幕府直轄時代にはアイヌの撫育^{ぶいく}(大事に育てる)や漁業のため、藩領時代の区切りのま

まで国境も定めず、東海岸はオフイトマリ(アニワ湾)、西海岸はオ・ラウネ・トマリ(真岡郡)までを押さえていた状態であった。又、乙名・小使と称する夷らの役人の置いたのも、東はシレトコ(中知床岬・アニワ湾)、西はヲニツホ(真岡の北)に留まっていた。文政5年(1822)に唐太は再び松前領となり、かくて、清国側も唐太南部のナヨロ辺りが、日本領であることを暗黙了解となっていたのである。一方、ロシアは1851年、黒竜江の河口近くに、ニコラエフスク(尼港)哨所^{にこう しょうしよ}を設置し、黒竜江下流・朝鮮山脈に至る全地域及びサハリン島のロシアへの併合を宣言した。そのロシアの勢いは、嘉永6年(1853)8月29日、ロシア海軍大佐ネヴェリスコイは、「ニコライ号」で霧に煙るクシュンコタンに到来するのである。「クシュンコタン占領事件」は第8章で述べる。

山丹交易の終焉について 幕府は安政2年(1855)に再び蝦夷地を幕府直轄領にして、山丹交易を幕府の管理下に置くが、交易量は下がりはじめていた。それはアムール下流域に帝政ロシアの勢力が侵入して来たこと、それに於けるサントン夷等の故郷が、政治的・軍事的に不安定になったからである。更にそれに伴い、清朝の力が衰退し、19世紀前半までの様な、綿やガラス玉などの商品が十分に入ってこなくなった。それでもサントンやスメレンクルの商人たちはロシア人からも商品を仕入れて、唐太自主まで出張して山丹交易を続けていた。

江戸幕府が慶応3年(1867)まで山丹人らは来航していたことを考えると、彼らは交易を止める意志はなかった様である。それを打切ったのは日本の明治新政府であり、交易全体を妨げていたのはロシアと清国であった。清朝の役人も毛皮貢納受付の交易仮府まで出掛けて来ることは無くなった。因ってサントン人らも三姓まで出向く必要もなくなったのであるが、それでも一部のスメレンクルの子孫であるニヴフは20世紀初頭まで三姓に出掛けていた話は伝わっている。

19世紀後半にはいると、国際間の取引関係は、輸出・輸入の国対国の関係となり、北方からの細々とした先住民たちの交易取引から日本側が手を引いてしまった。因って彼らの仕入れる中国産の品物を買う相手は、地元の諸夷らだけになってしまった。過去のサントン夷らは、中国と日本との間の綿や毛皮の価格差で、利益を確保していた山丹商人たちは、急速に衰退し、現代社会から忘れ去られる存在となってしまったのである。

第7章 間宮林蔵の『東韃地方紀行』概観

『東韃地方紀行他』 洞 富雄著・『東韃紀行』 大谷恒彦訳を参考にした。

『東韃地方紀行 卷之上』粗筋で間宮林蔵の行動を探る 文化5年(1808)の秋、再び間宮林蔵は一人で唐太(北蝦夷)の奥地を探検する幕命を受け、その年の7月13日、蝦夷(北海道宗谷)からアイヌの舟に乗って出帆し、その日のうちに唐太南端「シラヌシ」(自主・1790年松前藩が会所を開く)に着いた。このシラヌシには土着のアイヌ人が少なく、従行のアイヌを雇うことができないので、北の奥地に向かうアイヌの船便を待つことにして、3日間シラヌシに滞在した。7月17日、アイヌ人の舟に乗り込むことができ、唐太西岸を北上し(5日間舟行)、23日「トンナイ」(西海岸真岡)に着いた。「トンナイ」にもシラヌシと同様に幕府の番屋があって、番人が土着のアイヌ人を指揮管理していた。ここにはアイヌ人が多く、番人らに、奥地へ従えて行く舟乗りを雇ってくれるように頼んでもらったが、誰一人承知してくれなかった。それは、この年の夏、林蔵と松田伝十郎と初めて唐太の奥地へ探検に同行したアイヌ人らの話では、「奥地の夷人はアイヌ人と違い大変乱暴者で、ずるがしこく危険だ。また気候や風土も悪く、行路も開けていないで難儀をする。とても人の行ける所ではない」と、苦情を聞かされた。

そんな事情があって、かれこれ8～9日間も「トンナイ」に滞在して、いろいろ智慧を回らし、彼らを説得した結果、^{ようや}漸く6人の舟乗りを雇い入れることができた。そこで、彼らに一艘の舟を仕立てさせ、8月3日「トンナイ」(北緯47度)を出発した。13日間の^{しゅうこう}舟行を続け、8月15日「リョナイ」(北緯49度の上)に着き宿泊した。



①西海岸旧^{まおか}真岡港(トンナイ)2012年筆者撮る ②同海岸旧^{なよろ}名寄から^{クシュンナイ}旧久春内へ『蝦夷錦の来た道』より

ところが、その翌16日、突然にサントン夷(黒龍江下流に住むオルチャ夷)数十人が

6艘の舟に分乗してリョナイに押しかけ、林蔵らを取り囲んだ。彼らは林蔵の従者のアイヌ人らを捕え、恐ろしい剣幕で、訳の分からぬ事を大声で怒鳴りながら、「これ以上、奥地に行くことはまかりならん」と罵ったが、言葉が通じないので何を言っているのか分からない。そして、更に彼らは林蔵が携行してきた食料(酒も)や諸雑器を略奪しようとしたので、アイヌ人の従者は恐れおののき、おじ気づいてしまった。

林蔵は落ち着き払い従者らに、「絶対さからうな」言い聞かせ、どうすれば良いか思い回らし、「奴らに少し、米や酒を呉れてやるのが一番」と少し取り出して与えたところ、サンタン族は満足したのか、乱暴を止め、舟を南の方に出して去って行った。

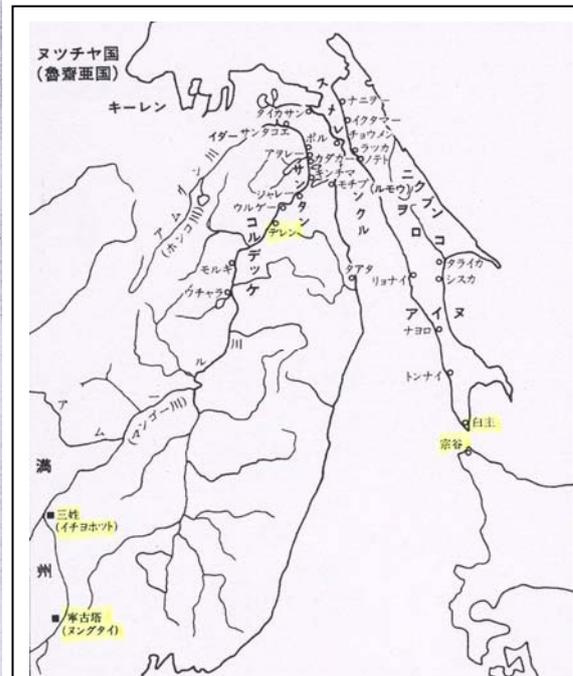
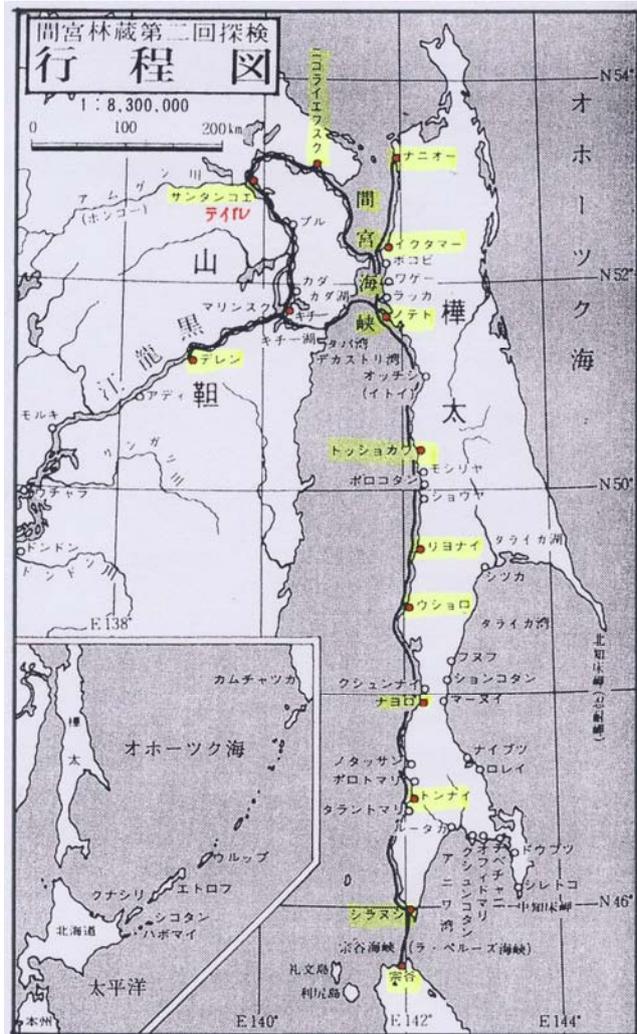
ところが今度は、従者たちはその始末を見て、「これ以上奥地へ行く事はできない。南方に帰ろう」とせがみ出したので、林蔵もこれにはホトホト困り果てた。しかし、林蔵は考えた。この程度の事で北進を諦めて帰る訳には行かぬ。林蔵は従者らに酒を振舞い、なだめすかして、彼らを元気づけ、ようやく恐れも去り、奥地へ進むことを承知させたのである。9月3日「トツショカウ」(北緯50度上)に着いた。この地はもうアイヌ人が住んでいる地域の北限で、これより北の奥地は、異種族(ヲロッコ)の住む所、そして寒さ日一日と厳しくなっていく様子となり、食料の貯えも残り少なくなってきたので、やむを得ず「南へ帰ろう」と従者に伝え、北進は無理と判断し、9月14日「リョナイ」へ帰り着いた。

ここから物語を早く進める。10月24日までリョナイのウトニシ酋長の家に泊っていたが、終に北進を諦め、舟と雑具一式を酋長に預け、11月26日に「トンナイ」(47度辺り)に戻った。

翌文化6年(1809)正月29日出発し、2月2日に「ウショロ」(北緯49度辺)へ着いた。ウショロから奥地は満州族居住地であるため、従者の南部アイヌたちは北進しようとしなない。やむを得ず勇敢な男を一人残し、他の5人は南へ帰らせた。林蔵は「ウショロ」で新たに従者5人を雇い入れて北進し、4月9日に「ノテト崎」(52度の手前間宮海峡入口)に着いたが、氷が解ける5月7日まで留まった。ここで又、「ウショロ」の従者は海が危険と嫌がったので、林蔵は仕方なく、ノテトの水先案内役を一人雇い入れ、サンタン舟を一艘借り入れた。その結果、5人の従者らも納得し、舟を出すことができた。

5月8日、「ノテト崎」を出発し、10日に「イクタマー」(北緯52度の上)という所に着いた。またしても従者らは、「この先は恐ろしいからいやだ」と言い出し、林蔵

はやむなく、更にもう一人水先案内者を雇い、12日早朝「イクタマー」船出、同日中に「ナニオー」(53度上)まで舟を進めることができた。この辺りは唐太の北限、土民の家もわずか、海水の流れは全て南に流れ、潮流が速い所であった。「ナニオー」の背後の丘陵に登った林蔵は、果てしなく北に広がる大海を眺望し、「唐太が大陸の半島ではなく、完全な離島である」ことを確認した。これが世に言う「間宮海峡」である。

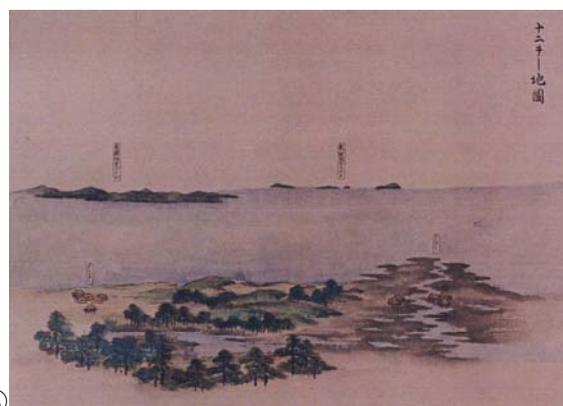


18～19世紀初頭の住民分布『唐太雑記』より
『アムール川下流域諸民族の社会』佐々木史郎

図③樺太図・間宮林蔵第2回探検行程図
『間宮林蔵の再発見』大谷恒彦著より



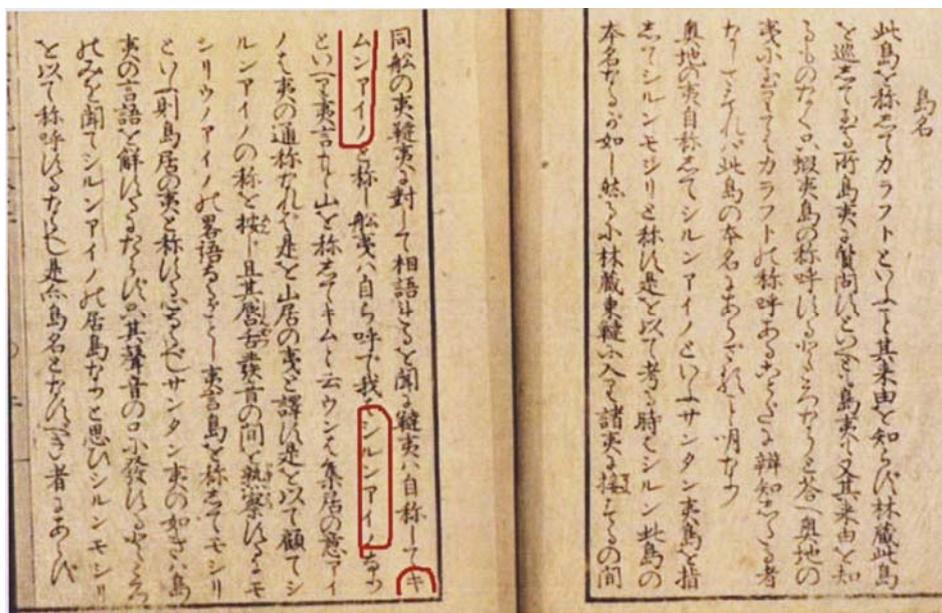
④『北夷分界余話巻之五』山靴夷の舟



⑤『同巻之二』唐太北端ナニオーで韃靼海峡を確認する

従者たちと希望通りには上手く協力してもらえない話ここでは省略する。林蔵が最も知りたい事は、西海岸の地形や海の水深、潮流、そして、東韃靼(大陸側)のロシア支配関係の境界等を聞きただすことであった。

「東韃靼には、唐太同様、オロツコ(ウイльта)、スメレンクル(ギリヤーク)、シルンアイノ、キムンアイノ、サンタン、コルデツケ(ナーナイ)、キャツカラ、イダー、キーレンなどと称する種類の土民が集落をなして住んでいる」とのことであった。しかし、聞きただしても、何処の国に属するのか、「デレン」という満州仮府には、清国の役人が管理している仮役所らしいが、言葉が通じない土民たちの説明では、詳しいことは解らなかつた。林蔵は東韃靼の奥地へ行く決心を固めた時、折よく酋長のコーニが、カーシクタ(清朝の郷長)の役目をもって、満州仮府「デレン」へ朝貢に行く用件に同乗させてもらった。ノテトに残す唯一人の従者に「もし拙者が戻らない場合は、お前は
この記録書を「シラヌシ」の役人に渡せ」と厳命した。ノテトの酋長の他男子4人と、「ウヤクトー」の土民(男女と子供1人)3人と、林蔵を加えた8人が、5尋^{ひろ}(約9m)、幅4尺(1、5m)の一艘のサンタン船に乗り込み、6月26日「ノテト崎」を出発し、大陸(韃靼)へ向かった。

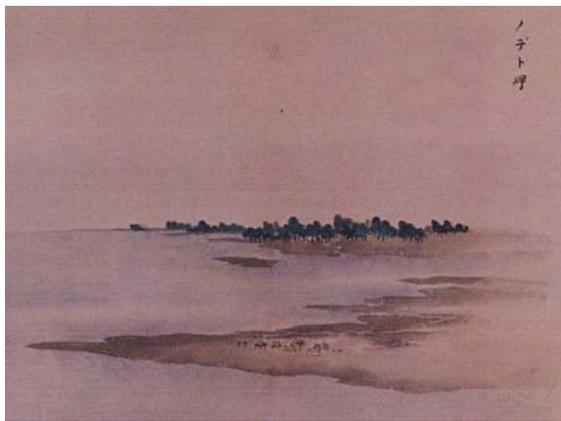


図⑥

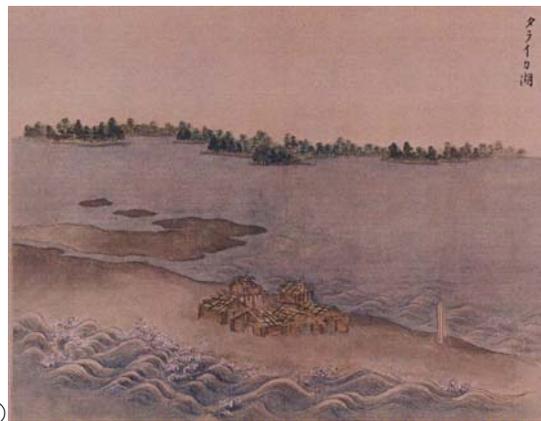
⑥・間宮林蔵口述『北蝦夷図説』「島名」シルンアイノ、キムンアイノの部分を見る

「島名」の部分 《此の島を称してカラフトという事、其の来由を知らず。林蔵この島を巡って至る処、島夷に質問するといえども、島夷も亦、其の来由をしるものがなく、只、蝦夷島の称呼する処なりと答え、奥地の夷に至とは、カラフトの称呼ある事を知る者なし。奥地の夷は自称して、シルンアイノと云い、サンタン夷島を指して

シルンモシリと称す。是を以って考える時は、シルンがこの島の本名なるが如とし。然るに林蔵、東韃^{とうたつ}(蒙古地方の民族を指し北方民族の総称)に入り諸夷と接するに間、同船の夷、韃夷に対して、相語る事を聞くにつれ、韃韃を自称してキムンアイノと称する者あり。船夷は自ら呼よんでシルメンアイノなりと云う。夷言もと山を称してキムと云う、ウンは集居の意、アイノは夷の通称なれば、是を山居の夷と訳す。是を以って顧^{かへり}みてシルンアイノの称を案じ、且つ其の唇舌発音の間を熟察するに、モシリウノアイノの略語なるが如とし。夷言島を指してモシリと云う、則^{すく}島居の夷と称する心なるべし。サントン夷の如きは島夷の言語を解するに至らず、只其の声の音の口に発する処のみを聞いてシルンアイノの居島なりと思ひ、シルンモシリを以って称呼するべし。是亦島名となすべき者にあらず。》とある。



⑦



⑧

⑦ノテト岬・『北夷分界余話巻之二』国立公文書館

⑧タライカ湖(多来加湖)樺太中部

7月6日、広々とした「キチー湖」(大陸側)に舟を浮かべた。湖の真中辺りにある「ヌツタランカタール」という所に泊った。風が冷たく日本の厳冬期のものであった。

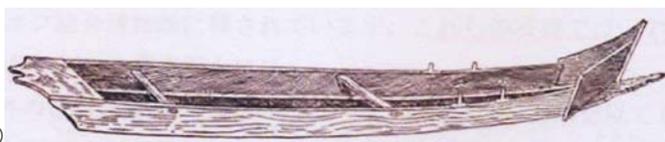
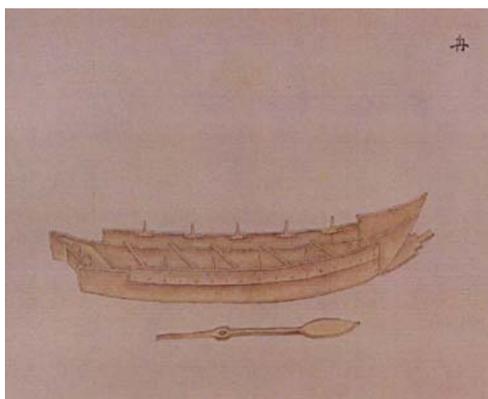
7月7日、前日と同様、キチー湖を舟行、約2里半(約10km弱)で「キチー」に着いた。林蔵は東韃韃に入って、初めてチオーという名の満州語の通訳土民の家に入ってみた。家の主人は外出中で、主婦らしい女性2人が留守番をしていた。その内の1人が曾長コーニの妹ということであった。すると、辺りに住んでいる土民らが、林蔵を怪しいと見たのか、数十人が林蔵を取り囲み、外に連れ出そうとした。林蔵は「自分は怪しい者ではない」と、いろいろ説明したが、上手く言葉が通じない。ついに別の土民の家に無理やり連れ込まれてしまった。そして大勢の土民たちが、林蔵を抱くやら、頬ずりをするやら、余りにもひどい乱暴を働くので、止めさせようとするのだが、言葉が通じない。そうこうする処へラルノという者が入って来て、「お前たちは林蔵且

那をどうしようとするのだ。それ以上は許さん」と叱りつけて林蔵を助け出して、河岸まで連れ戻した。一行の土民らの言うのには、「彼らは、旦那さまを殺そうとしていたのです」林蔵はホッと胸をなでおろした。その夜はチオーの家の倉庫に泊めてもらい、この騒動の目的は、林蔵の荷物を掠め取る様子であった。

7月8日、「キチー」出発、黒龍江(アムール川)遡航したが、強風が吹き荒れ、僅か1里(4km弱)上流のサンタン夷の5～6軒の集落に泊る。

7月9日、船出して5里(20km弱)所で、強風で舟が進まず難儀、「コルベー」というサンタン夷の集落に泊る。

7月10日、2里上流の「シャレー」に着く。同行の酋長コーニと上陸して、この族長の家で、米と粟が混じったお粥をご馳走してくれた。林蔵は「ヤスリ」1本を贈り、その好意を謝した。その族長はヤスリを受け取りはしたが、嬉しそうな顔もしないし、他に何を持っているかも聞かなかった。たいてい土民たちは、どんな品物を持っているかを尋ねたり、品物を欲しがったりした。「デレン」への長旅の途次で、こんな無欲な者は誰一人もいなかった。そこより舟を出して2里半上流、「ウルゲー」というコルデッケ夷の集落となる。同行の土民らは新たに舟を買い入れる所用があって、「ウルゲー」に滞在する。ここの夷族は、五葉松の大木で舟を造ることを仕事にしていた。南方にいる諸夷族たちの乗る舟も全部ここで造られるとのことであった。携行して来た獣皮と舟一艘を物々交換し、持って来た諸雑器を二艘の舟に分けて積み、「デレン」に向かうことにした。



⑨コルデッケ族の舟『北夷分界余話卷之三』国立公文書館蔵

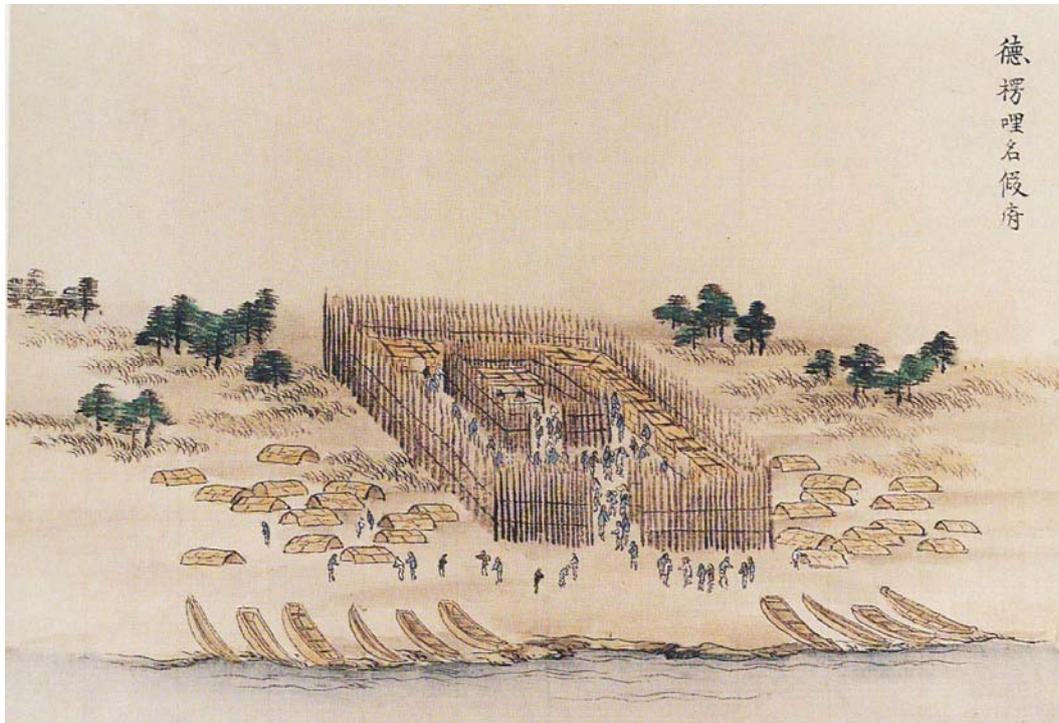
⑩ニヴフの板船

7月11日、「ウルゲー」を出発、凡そ4里、上流へ遡航し、ついに目的地「デレン」(徳楞)に着くことができた。同行の従者が満州仮府で、「日本人を一人同行して来ましたので申し上げます」と、報告したところ、満州の官吏らが、宿泊所の船まで林蔵を

連れて来るように命ぜられた。林蔵は直ちに宿泊船に乗り移り、官吏らは衣服を正して林蔵と接見した。沢山の土民たちによる乱暴を受けたりしたので、満州の官吏が時々仮小屋を特別に見回をしてくれ、林蔵が危険に会わないように保護してくれた。（『東鞆地方紀行上巻』終）

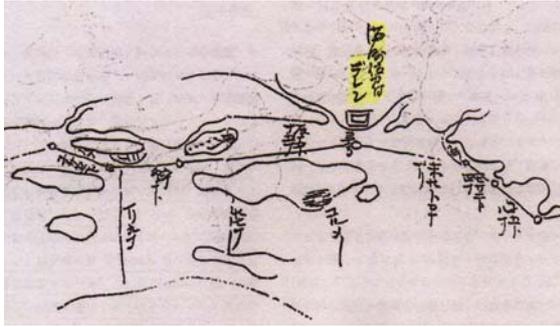
『東鞆地方紀行中巻』

満州仮府は夏期の間だけ臨時に設け、交易管理の役人出張所となる。黒竜江を前に臨み、後方は広々とした原野、樹木も繁っている。河岸から見渡すと、河の中程には、島々が見え、この辺りの大河は洋々し、波風の心配もなく、河幅も一里、舟の停泊にはすこぶる都合の良い所であった。ここ中洲の「デレン」は土民たちの住家はなく、仮府の周りには集まって来た土民たちの仮小屋が幾十、幾百とあって実に壮観な眺めとなっている。それらの仮小屋は全て樺かばの木で覆われている。集まる土民たちは、西は朝鮮との国境付近、東はロシアとの国境付近からはるばるやって来て、色々な品物をお互いに交換し、目的を果たすと土民たちは5～6日間で帰って行くことであった。林蔵が「デレン」に到着時は、交易の最中で5～6百人の夷らが滞在していた。



図①

①・徳楞(デレン)仮府・外形26～7m、四方に丸太で2重柵を作り、囲いの中に左右2カ所と後方と、計3カ所に交易場所を設け、更に囲いの中の中央にも1重の柵をめぐらし、その中に仮府を設けてある。仮府跡は現在不明。



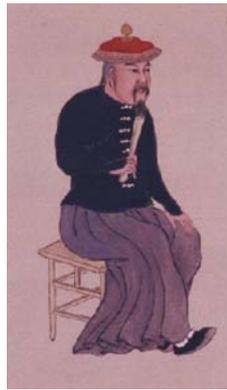
⑫ 間宮林蔵の描いた^{りてい}里程図



⑬ デレン仮府はこの辺り周辺らしい、右側はマリンスコエの街



⑭・進貢、中央で貢物を受け取り褒美の品物を与える。

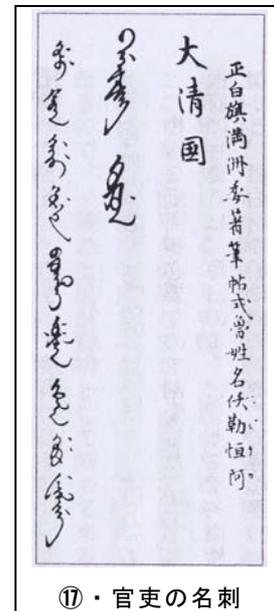


⑮・上官



⑯・中官

⑭⑮⑯官吏らは毎年、夏期に松花江を下って黒竜江に入り、6月中頃「デレン」に着任する。そして、初秋(陰暦7月)の終頃、中秋(陰暦8月)交易所を閉鎖して帰途につく。これらの情報は、林蔵は筆談で知る。仮府官吏は3人、中級官吏が50～60人いた。上級官吏が3人とも、1枚ずつの名前を書いた名刺を林蔵にくれた。右の名刺に書かれた文字は「正白旗満州委署筆帖式姓名伏勒恒阿大清国」で、このほかに二行、満州語の文字も書かかれていたが、ミミズが遣う様な字は読めない。別の人の名刺には「廂紅旗六品官驍騎校奨賞藍領葛姓名撥勒渾阿」と書いてあった。もう一人には「現任官職正紅旗満州世襲領姓舒名托精阿」と書いてあり、「大清国」の下には「天朝」の二字が加筆されていた。



⑰・官吏の名刺

★デレン仮府の最高責任者は「正紅旗満州世襲佐領舒名托精阿」という人物といわれる。

佐領=清朝八旗制の単位の長の名称。行政、全てにわたる監督責任者。

★サンタンやスメレンクルやコルデッケの様な毛皮貢納民は、清朝支配下に於いては、高い地位を与えられていた。それは、17世紀の露清紛争と関係していて、彼らの祖先が「清の側」についてロシアと戦った事実と、彼らが離反してロシア側につくことを防ぐ、防衛上の理由があった。諸民族は清朝の支配者である満州民族自身が、元々明朝の毛皮貢納民であり、クロテンの高級毛皮の産地の住民としての重要性を高く評価していたのであろう。そのため、現在のロシアでの先住民族たちのナーナイ、ウリト、ニヴフ夷らは今でも気位は高いという。

図⑭・進貢(貢物を差し出す)について。まず舟を河岸につなぐと、舟の長老格が官吏の船を表敬訪問し、上級官吏に3回平身低頭して交易所に着いたことを報告する。表敬がすむと、官吏から酒を振舞い、精製した粟を3～4合を長老に与えるのが決まりの儀礼となっている。次に、下級官吏が柵門から外に出て、貢物を持参した土民の族長を一人ずつ呼び、柵内に連れて入る。土民は3回平身低頭してから、黒貂の毛皮1枚をうやうやしく奉り、3人の上級官吏が土民たちから貢物を受け取る。貢物献上儀礼が終わると、褒美の品物が土民に下賜される。族長に与えるものは、長さ7尋(12、6m)の綿布一卷、村長には長さ4尋(7、2m)の緞子(つやのある絹織物)のような布地、同行の土民たちには、木綿4反(大人4人分の衣服が作れる)の他、櫛、縫い針、鎖、袱紗(小形のふろしき)、紅絹3尺(90cm)程度のものであった。

図⑮の上級官吏の衣服は、細かい薄織の絹か布地の厚い緞子(2色以上の絵抜きを用いて文様を織り出したもの)のような絹織物である。頭の被りものは、籐で編んだ笠のような形、その上に紅糸をかけ、上には金の輪の飾りがつけてあった。

図⑯中級官吏以下の者は木綿の衣装を着ていた。

「ナヨロ文書」を見る 乾隆40年(1775)清王朝政府の通達文書。北海道大学付属図書館北方関係資料目録「ヤエンコロアイヌ文書」唐太西岸ナヨロのアイヌ惣乙名の家に代々伝えられた文書。満州語文書2通、漢文文書2通、清国への朝貢関係を示す資料となっている。

この文書は吉林将軍が勅命を受けて伝達した内容を、三姓(ハルピン市の依蘭県)の政庁がサハリン島の「陶」姓(漢姓のひとつ)のハラタに通知したものである。その主旨は、「これまで冬末から春にかけて京師(みやこ)に朝貢し妻を得て帰る者の中には、春先に流行する天然痘(ほうそう)で死亡する者がいるので、今後は時期を早めて7～9月に入

京するように」との意味文である。この事から当時は北京まで朝貢に赴く者がいたことが分かる。清朝政府は、アムール川下流地方・カラフト島を朝貢関係(服属支配で軍事力の支配下ではない)結んでいた。



⑱・「ヤエンコロアイヌ文書」北海道大学附属図書館蔵

夷族の村々に「ハラ・イ・ダ」は氏族長、「カーシンタ」は郷長の役名を与え、「年々満州に入貢して獣皮(クロテン)1枚を献上せよ。その賞賜として錦1巻を与え、その他の交換品も安く提供する」と、夷族らに告げている。間宮林蔵はナヨロのハラタ(ヤエンクル)の家に残された一通の満州文書を写して持ち帰っている。

この文書には満州文書と漢字の二種の篆書で「管理三姓地方兵丁副都統印」と記した一辺約10cmの方形の朱印が捺されている。原本は戦前樺太庁図書館に保管されていたが、先の大戦後秘かに持ち帰り、現在は北海道大学附属図書館に所蔵されている。

交易内の動き



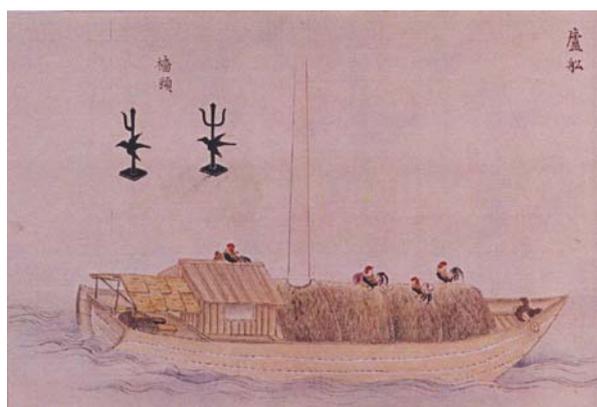
⑲・交易場のにぎわい



⑳・仮府の周りで樺の皮で小屋を作り雑居する諸夷たち

図⑲物々交換の場も見たが、これまた乱雑、無規律で、決まったやり方などが無い。交易所に入り、酒、タバコ、布地、鉄器(土鍋)など思い思いに交換する。各地から何百人の土民たちが毎日押寄せ、その騒がしいこと、たとえようがない。「大事な獣皮が盗まれた」とか、獣皮の交換談判で、喧嘩や殴り合いが起こり、大変な雑踏である。し

かし、交易所の官吏は、制裁に入らない。



① 盧船、官吏らの宿泊船(食事船)となる

② 林蔵(和装で髭面)を盧船の宴会歓談に誘ってくれた

図①・宿泊船盧船、横幅一丈(3、03m)×長さ約7～8間(13～14m)、積荷約百石の船である。船首には波を切る“水押し”をつけず、船板を並べ、板の継ぎ目には白土(しらつち・しっくい)を塗り込んでいる。船の三分の二は荷物積めるようにしてあり、その上を葦で編んだ筵むしろで覆い、船尾に樺かば(樺の木・樺桜)の皮で屋根を台所にしていた。官吏の船は4艘停泊していた。官吏の居船には床が張ってあり窓も付いていた。

図②・林蔵は滞在中に何度か上級官吏の船に呼ばれ歓談し、“アルカ”と云う日本の焼酎のような酒を進めてくれた。肴は豚や鶏肉、卵、川魚、野菜類であった。図②の右の奥側の髭面が林蔵となる。林蔵と官吏は筆談で話した際、この仮府の地名を尋ねたら「徳楞哩名」(4字で「デレン」地名)の4字を書き示した。彼らは林蔵が立派な文字を書くのを見て、「貴殿は中国人であろう」とか、「日本国は中国に貢物を持って行くのか」との質問に林蔵は、「長崎の出島で相互に貿易はしているが、貢物などは持って行かぬ」と答えると、「中国に貢物を持ってこない国はわずか3つあるだけ」と言い、「ロシアは中国の属国である」などと話した。(『東韃地方紀行・中巻』終)

『東韃地方紀行・下巻』

「デレン」に来て7日間、予定通り交易も無事に終え、7月17日、官吏に別れの挨拶をすると、粟と酒を少しいただき船出した。

翌18日、その日に13～14里下流の「キチー」に着き、再度チオーの家の倉庫に宿泊した。主人のチオーは歓待し、唐山産とうざん(河北省)のお茶を飲ませてくれ、米ごはん、酒や肴も用意し、夜のふけるまでご馳走してくれた。林蔵は好意のお返しとして、斧一丁と着ていた襦袢じゅばんを贈ったところ大変喜んでくれた。

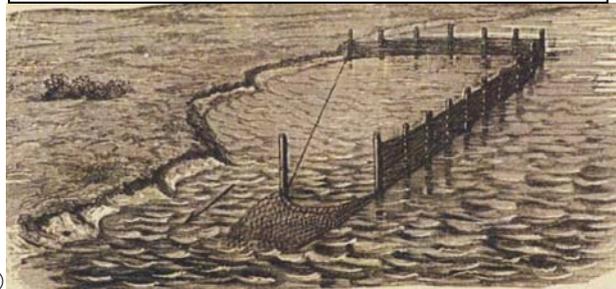
19日、従者の一行らが犬二頭を品物と交換し、チオーの倉庫で宿泊した。

20日、「カタカー」というサンタン夷の集落(14~15軒)に上陸した。この「カタカー」の地はその昔、満州仮府が設置されていた。しかし土民たちの争いが起こり、廃止されたという。夕方、ここを離れ、「アオレー」という所に上陸して野宿した。

21日出発、22日の夜「ポル」という所に到着し、この日、通り過ぎた所に「シュシュ」という土地があった。少しの家の集落で、初めて“鮭”を食べた。蝦夷地(北海道)に比べると、少し漁期が早いように思えた。この地方で鮭を獲るには、鮭が上って来る河岸に杭を立て、その水底に網を張っておく。こうすると、上って来た鮭は杭の処で行き止まり、さらに底を回って下流に行こうとして網にかかるので、この時、網を上げて鮭を捕えるとのことであった。



『アムール地方の異民族たち』L・シュレンク著
帝国科学アカデミー出版・第2巻より・1899年



㉓ サンタン夷による鮭の遡上の漁法・『下巻』

㉔ アムール川の鮭用の^{やな}築(ギリヤーク語・ムーリ)

現在の^{やな}築漁をニコライエフスク郊外で雄大な鮭の漁法を見学した



㉕・現在の^{やな}大仕掛けのアムール川(川幅 10 km位の中央に掛けてある)の^{やな}築 ㉖・川岸には^{やな}の鮭が棄てられていた。ニコライエフスク町より 15 km位上流、特別の計らいで漁場に案内されたものであるが、ロシア漁民のボートは最高速で走り、恐怖で船縁にしがみ付く有様でありさまでした。2015年8月末

7月23日、「ポル」を出発し、4日目に「カルメー」という所に着いた。この日、通過して来た所に「サントコエ」(ティル)と名付く土地があった。

「その昔、ロシアの山賊たちがホンコー河(アムグン河)を舟で下り、この地に住ついていたという。ホンコー河というのは、ロシアの方から流れて来て、この「サントコエ」で黒竜江に合流している河である。ロシアの山賊たちは、その地方に昔から住んでいた土民たちを平定して、彼らの生産物を掠奪し、この辺り一帯をさらに侵略しようとの野望を企んでいた。しかし、満州族が彼らを討伐したので、戦いに敗れたロシアの山賊たちは、その本国方面に逃げ去った、ということであるが、詳しい年代はわからない。」と述べている。

★補足・この戦いは1684年の清国とロシアとの「露清戦争」を指すと思われ、この5年後、1689年に「ネルチンスク条約」が結ばれ、アムグン河と外興安嶺とを両国の国境と定められた。

林蔵が「サントコエ」から遠望した。ロシアの山賊たちが建てたて云われている黄土色の石碑が二基は河岸のすぐ背後の山の上にあった。林蔵は舟の中から遠望したにすぎないので、その碑に文字が刻んであったかどうかは解らないと、言っている。同行の土民らは、その石碑の真下を通行する時、携行している米、粟、草の実などを河の中に投げ入れ、それをお供えがわりにして、この碑を遠くから拝んでいた。林蔵には何故土民らが拝むのか、その意味は理解できなかった。



㊦・サントコエ(ティル)の丘陵上の石碑を描いている ㊧・恐らくこの辺りで林蔵は見たであろう

7月27日、「カルメー」を出発、4里半で「テホコー」に着く。

7月28日、「テホコー」を出発、4日後に「ワーシ」に野宿。この4日間は、河岸での野宿の辛苦は、“死地に赴く”とはこのようなことかと、林蔵は苦痛を述べている。

その様子は、柳の枝をたくさん集め、地面に敷き、その上に獣皮をかけて寝るのであるが、朝になると、水滴が皮一面に、にじみ出て、まるで水をかぶった如くであった。と述べている。

8月2日、「ワーシ」を出発、5里先下流の「ヒロケー」に着き、野宿。

8月3日、ついに海岸沿いに南下し、「ワッカシ」に着き、野宿。翌4日に「チョーメン」という所へ着く。翌5日、この辺りは海面一帯が干潮となっていた。夕方、舟を出したが、「チャガガエハーハ」砂浜で野宿。6日、「ハカルバーハ」に泊る。

8月7日早朝船出。霧が立ち込めていたが、波風もなく、唐太の「ワケー」（ノテトの上）に渡り着き、その夜、「ラッカ崎」に宿泊。そして翌8日に出発の地、「ノテト崎」に無事帰還する。残しておいたアイヌ人従者らが首を長くして出迎えてくれた。「ノテト」には3日間滞在した。

8月11日、アイヌ人従者らと「ノテト」を出発し、翌月の9月15日に、唐太南端「シラヌシ」の役人の番屋に着いた。そこでしばらく滞在して、資料・地図・下書き等を整理して、文化6年(1809)9月28日、「ソーヤ」（宗谷）に帰還した。その間、およそ1年と2カ月半を費やした。（『東韃紀行』下巻終）

サハリン島より出土した日本製品



②⑨・日本の大きめ磁器・サハリンニブフ族に渡っていた ③⑩・日本の土鍋（『нивхи』より）

『нивхи』（ニヴフ）サハリン博物館刊より。サハリン北部の залив чайво (chayvo ベイ) で日本製品が発掘出土品している。

第8章 サハリン島占領問題考

「サハリン島」・「からふと」について考えてみたい。「からふと」の名は一説にアイヌ語でこの島を「カムイ・カラ・プト・モシリ」（神が河口に創った島）と呼んだ事に由来するという。カラフト・アイヌ語では「ヤンケモシリ」（陸地の国土）の意味となり、北海道アイヌ語では「カラフト」（カラフト）と呼ばれる。

「サハリン」は古くは「サガレン」とあり、満州語名「サハリヤン・ウラ」（黒龍江対岸の島）となるらしい。又、中国語では「庫頁島」（クイェダオ）と呼ばれ、ロシア語音訳では「薩哈林島」（サハリンダオ）とも呼ばれている。樺太南部にアイヌ民族、中部にウイльта民族（アイヌ民からはオロッコと呼ばれる）北部にはニヴフ（ギリヤーク）居住していた。唐の杜祐撰『通典』の卷200、边防16、北狄伝、「流鬼の条」に、《流鬼（の国）は

北海の北にある。北は夜叉国（オホーツク海北岸のコリヤーク民族相当）に至り、ほかの三面はみな、大海にあたり、南は莫設靺鞨（北海道のアイヌを指し中国東部の民族ではない）を去ること船行一五日のところにある。その国には城郭がなく、（流鬼は）海の中の島に依って散居している。・・・貞観一四年（640）に、途中で何度も通訳を替えて長安に朝貢にやってきた・・・》とある。

『通典』は唐の杜祐（735-812）によって766年から30年かけて編纂された。この流鬼国の所在の地はニヴフ民族に相当しサハリン島であったのである。



図① 『通典』北狄伝 流鬼の条

唐太の原住民について シュレンク・L.i.Shrenk, (Л.И.Шренк)は『黒竜江流域民族誌』で、北唐太のギリヤーク（ニヴフ）について、南唐太の原住民はアイヌであり、どちらの民族が唐太の占有者であったのか。シュレンクは唐太の原住民であったギリヤークが、日本人の圧迫を受け、その一部が海峡を越えて黒竜江の河口面へ移ったと解釈している。これに対し日本の白鳥庫吉博士は、アイヌは唐太島に最も古い民族（古アジア民族）であり、ギリヤークはその後に大陸からこの島へ渡って来たと推測している。アイヌ語はその構造に於いてウラル・アルタイ語に類似し、その単語に於いてこの語族の北系の言語に類するものが多いから、アイヌ民族は太古において、黒竜江の河口

から樺太へ移住して来たと思われる、と述べている。

サハリン・アイヌの人口は、寛政2、3年頃の記録は、57のコタン(村)に約1100人の数字となり、安政3年(1856)、「自主会所留記」によれば、家数373軒、総人口2694人(男1297、女1397)とされている。18世紀初期にイエズス会士の探検と測量を元に作成された『^{こうよ}皇輿全覧図』(清の康熙帝が9名の宣教師に作らせた中国全図、1717年完成)サハリンの南に海が広がっているだけである。日本を通じて「蝦夷」と呼ばれる人々がいることは知られていた。その「蝦夷島」(北海道)と「^{クイ}庫頁島」(唐太)とが狭い海峡で隣り合っていることは知られていなかった。それに気づいたのは曹廷杰で、『^{そうていくつ}東三省輿地図説』の一節で、蝦夷島の人^{クイ}が庫葉島(庫頁島)の人と共に三姓(地図31頁参照)の地まで毛皮貢納にやってくるというエピソードを載せている。

この様に古代より「カラフト」の夷族らは中国と関係が深いことを知ることができる。約4万年余前から、モンゴロイドの祖先たちが住み着いていた。そして西暦800年余前頃から、周辺国の強国が軍事圧力によって、毛皮獣の朝貢をさせた。17世紀に入り、帝政ロシアが極東への植民地化に乗り出し、19世紀に入り段々と、欧米の帝国国家の面々が、国家の主(民族を統率)がいない「サハリン島」を早く手中に収めようと動き出すのである。英国・米国をはじめ、オランダ等もその気があったようである。日本と中国だけは、武力による植民地的な統治を考えていなかった様である。

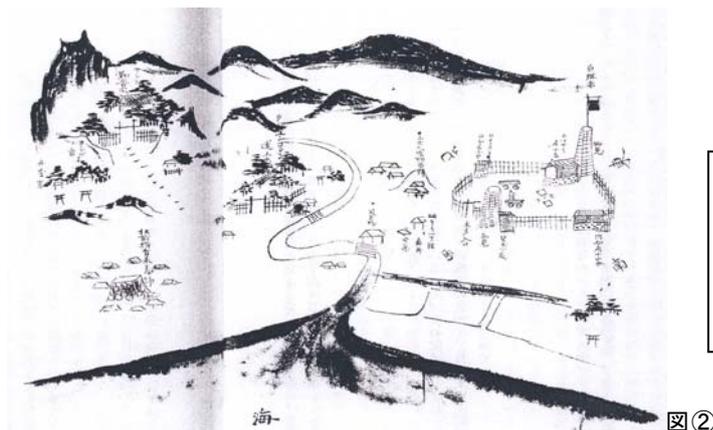
日本は北海道アイヌとの歴史的な経験(撫育)から、サハリン・アイヌらを武力で征服する植民地にするのではなく、服従・従属させて治める政策を執っていた。しかし、世界は、19世紀に入ると帝国主義国家樹立競争が始まり、日本・清国の様な^{ゆる}緩やかな服属関係が成り立たない国際状況になっていた。その様な日清の隙間に、武力征服に自信を持ち始めた帝政ロシアは「カラフト島」の併合に乗り出したのである。

ロシアの「クシュンコタン占拠事件」を考察 参考は『日露関係とサハリン島』秋月俊幸著と『サハリン島占領日記1853-54』ニコライ・ブッセ著・秋月俊幸訳を参照にした。

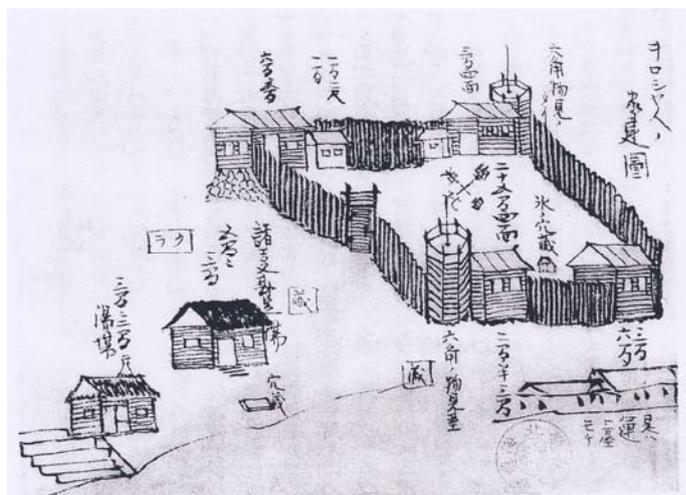
嘉永6年(1853)の初秋、ロシア海軍大佐ネヴェリスコイ(89頁参照)は、1853年4月11日にロシア皇帝のサハリン占領命令を受け、陸軍少佐ニコライ・ブッセ(ムラヴィヨフに見出され、1852年サハリン島占領行動する)、陸戦隊73名を率い、サハリン島南岸の日本漁業の中心地、クシュンコタン(旧大泊・アニワ湾)に上陸した。ロシア兵たちは

この地を占拠してロシア国旗を掲げ要塞を構築し、約8カ月間に亘りこの地を占領したが、同年にクルミア戦争(英・仏・オスマン対サルデーニャ・露)勃発し、ロシア軍は撤退して事件は終結した。これが「サハリン島・クシュンコタン占拠事件」である。

この事件は、文化年間(1804 頃)の露米会社船によるカラフト島・エトロフ島襲撃事件(1806-07)や、文久元年(1861)「ロシア軍艦ポサードニク号の対馬侵入事件」(英国東洋艦隊の嚴重抗議により撤退)と並ぶ幕末日露紛争関係史の一つである。当時、我が国の世論が大騒ぎにならなかったのは、北海道より北方の僻地であったことと、ロシア兵による乱暴は皆無、またクリミア戦争開戦の報が届き、英仏艦隊の攻撃を避けるため自発的に引き上げた結果である。このクシュンコタン占拠事件は、1689年のネルチンスク条約(露清国境を黒龍江と外興安嶺の国境線が決定)以来、ロシアはアムール河の航行を禁じられ、サハリン島への接近を避けていたが、約150年振りに呪縛を清国より脱し、沿海州、サハリン島の占有に着手し始めた事件なのである。



②・クシュンコタンのムラヴィヨフ哨所全体図 (北海道大学附属図書館蔵)



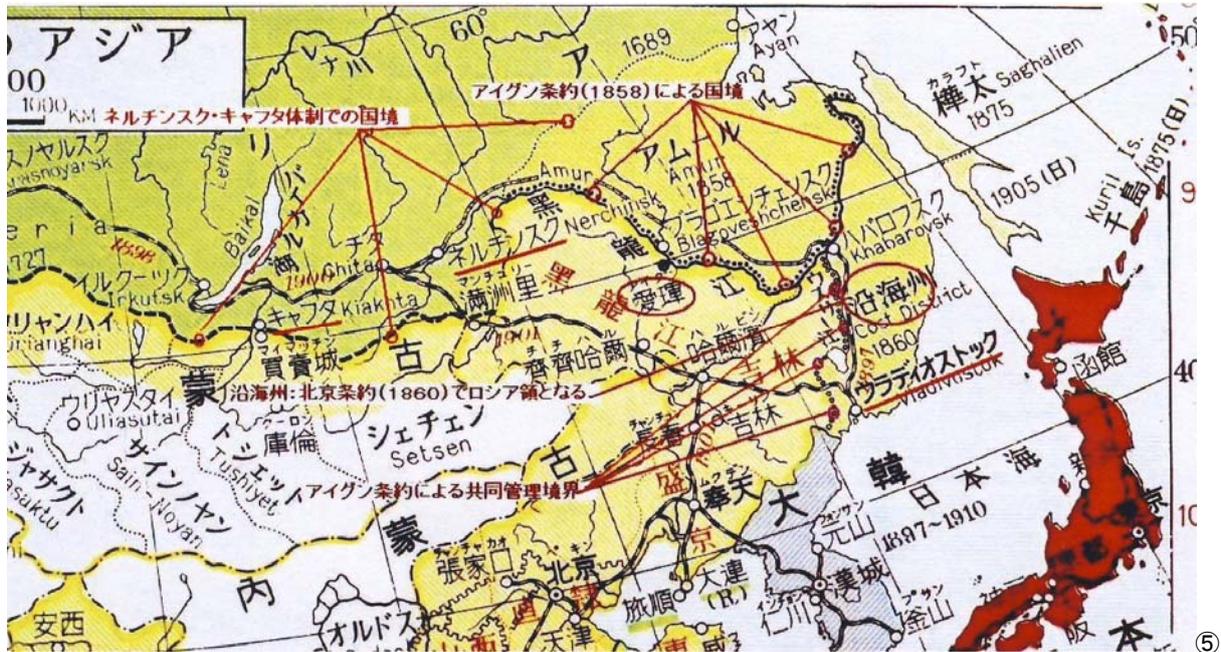
③ムラヴィヨフ哨所と「ロタノスケ(副官海軍中佐ルダノフスキーのこと)居小屋」(『樺太嶋日記』1854年)図②の右側部分を拡大 ④唐太南部地図、クシュンコタンはアニワ湾にあってススヤ川流れ込む。

★哨所^{しょうじょ}はクシュンコタン南側の小高い岬(網干場)が選ばれ、部落と海岸一望ができ、大砲(8門)を戦略的に好適な場所であった。この地点確保にネヴェリスコイ大佐は熱心であったが、日本の倉庫等の強制立退きを政治的に不得意としたブッセ少佐との対立があったが、結局ブッセはこの場所に哨所の建築を建て、東シベリア総督の名を取り「ムラヴィヨフ哨所」を建てた。この構造は丸太造りの兵舎3棟と士官棟を四辺形の角に配置し、対角線に当たる二隅には六角形の物見櫓^{やぐら}、兼砲塔を置き、建物間を銃眼(防壁に設けた小穴)のある柵で繋ぐ一種の堡壘^{ほろい}となる。日本人が保持していた木材600本を譲り受け、不足分は約4キロ離れた山中から、冬期に300本の木材を伐採調達した。9月25日(露暦)、荷揚げを完了したネヴェリスコイは、その翌日帰国の途につき、ムラヴィヨフ哨所には陸軍少佐ブッセ、海軍中尉ルダノフスキーほか69人の兵士らが残留し、ネヴェリスコイは出帆にあたり、ブッセに次のように指示をした。「日本人(逃亡)たちが戻ってきた時は、彼らが全く安全であることを保証し、彼らの身体、財産、産業及び交易が充分保護されるよう配慮せよ。そして、我々の習慣を強制してはならない」と忠告しアニワ湾を離れた。

注・露米会社 帝政ロシアは権益を拡大するために、1799年に設立された国策的な特権株式会社で、本社はロシア首都ペテルブルグに置き、活動本拠地はアメリカ北西岸のシトカ島(現バラノフ島)にあった。アラスカ・米国北西岸・アリューシャン列島・千島列島に於ける毛皮獣の狩猟や資源の利用、先住民支配と独占的な権限を有し、武力の保持や海軍士官の雇用も認められていた。1821年の第二次特許状で、千島列島に於ける活動範囲はウルツサハリン島南端までとなっており、サハリン島は無関係であった。しかし、1853年、ロシア政府はこの会社の旗のもとにサハリン島占領を命じ、その実行は提唱者ネヴェリスコイに委ねられた。19世紀後半より、毛皮獣の減少し、食料・資材の輸送困難となり、英米船との競争激化のために会社は経営不振となり、1867年、ロシア政府は米国にアラスカを含むアリューシャン列島以東の米国北西岸の植民地を、720万ドルで売却して露米会社を廃止した。

ネルチンスク条約とアイグン条約の国境線

★ネルチンスク条約(中国・尼布楚条約) この条約は1689年、ロシア帝国と清帝国の間で結ばれた境界線を定めた条約となる。内容は中国東北部(満州)の国境を黒龍江と外興安嶺の境界線に定める。この時代の清国は軍事力が強く、ロシア側が国境線を内側に引いている。



図⑤・ルネチンスク条約とアイグン条約の国境線 (アイグン条約で見つかった画像ネットより)

★アイグン条約(愛琿条約) アイグン条約はロシアと清朝とが 1858 年 5 月 28 日に中国北東部、アムール川中流のアイグン(黒河市)で結ばれた条約。1689 年のネルチンスク条約以来、清国領とされてきたアムール川左岸を、ロシアが獲得してウスリー川以東の外満州(沿海州)を両国の共同管理地と定めた。清国はロシアにアムール川の航行権を認め、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて結ばれた不平等条約の一つとなる。

ネルチンスク条約の解釈の拡大 「両国の国境はスタノヴォイ山脈から南方のアムール川に流入する大小の河川の流域は、すべて清国領土と規定されたが、東辺のウダ川地方に付いては未定とされた。それ故アムール川は河口地方に至るまで清国領と考えられていたことが明らかである。このためロシア政府は 19 世紀半ばまで自国民のアムール川航行や海からのアムール河口への接近を禁止していた。しかし、アムール河口地方及び沿海地方のロシア併合を主張していたネヴェリスコイは、ネルチンスク条約の不備を口実に、条約解釈をロシア側の有利にしてロシア領土の拡大を図った。依って、ネヴェリスコイの行動は、当時のロシア政府の方針を遥かに超えた考え方で、アムール川河口・沿海州・サハリンをロシアへ併合する意図が強く現れている。

帝国ロシアの極東へ進出 この時期、欧米列強の外交的な軍事行動により、国際情勢が複雑となり、急激な変化が生じていた。ロシア側から観れば、東シベリア総督

ムラヴィヨフらは、英米の策略に帝政ロシアは未来展望に憂いをもっていたのである。アムール川の河口やサハリン島が英米の勢力に占領されないうちに、ロシア政府はこの地域を素早く占領する事を考えていた。その前哨戦としてネヴェリスコイはタタール海峡(間宮海峡)の奥まで英米の捕鯨船が頻繁に到来することを知り、のまま見過ごせば、アムール河口が外国人に占領されること予測していた。

そこでネヴェリスコイは政府の命令を無視し、自ら責任で1850年8月、アムール河口から約40km上流のクエグダ岬に、ニコラエフスク哨所を設置した。この報告に接したロシア政府は、直ちに哨所の撤去を決定したが、皇帝ニコライ一世による有名な勅命が出た、「ひとたび掲げたるロシア国旗は決して撤去すべからず」一声で取り消され、ネヴェリスコイの勇姿は拍手喝采となったのである。

19世紀半ば、清国は領土だったアムール川下流域地方を、軍事力も入れず、ほぼ手つかずのまま放置していることをロシア側に分かってしまったのである。「ネルチンスク条約」を頑^{かたく}なに守っているロシア政府に対し、ロシアの愛国者たちは、どの国家も手を付けようとしない、アムール川河口・沿海州・サハリン島の無主地域になっているではないか。ロシアの愛国者たちは、胸を熱く燃しその好機を狙っていたのである。東シベリア総督ムラヴィヨフを筆頭に、ネヴェリスコイらのロシア愛国者の未来図は、ネルチンスク条約の不備を突き、有利な解釈を加えてアムール河口地方の確保と、タタール海峡・サハリン島を軍事占領する事、これ等の地域に「ロシア領土」ロシア国旗を掲げ、国有宣言を英・米・仏に知らしめる事に自信を持ち始めていた。

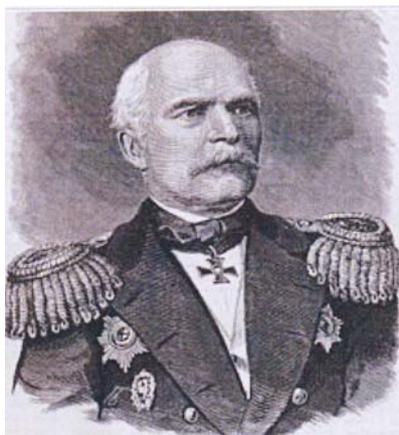
この頃、アメリカはペリー艦隊を派遣して武力をもって日本に開国を迫っていた時期と重なる。その理由は、1848年5月に唐太自主附近でアメリカ捕鯨船が難破し、この捕鯨船の乗組員15名が、8月に長崎に送られ捕鯨船乗組員たちに対する日本側の厳しい取り扱いが、ペリー艦隊の日本遠征を招いたのである。また同時期に、サハリン島クシュンコタン占拠の40日前、嘉永6年(1853)7月18日、長崎に遣日全権使節プチャーチン提督の率い4隻のロシア艦隊が入港していたのである。

サハリン占領の不明確な部分 サハリン占領の指示は政府命令書にはなく、ロシア政府はこれまで、中国や日本との紛争を恐れて、接近することを避けてきたが、サハリン占領を決定したのは、ペリーの指揮する日本遠征艦隊が、日本への圧力としてこの島を占領するのではないか、ならば先手を打ったとされている。(米国はそのよう

な計画はなかったと云われている。^注) 1853年4月11日(露暦)の11項目のサハリン島占領命令は、その目的には触れず、同年中に露米会社がこの島を占領管理すると命じているだけである。その占領そのものは、最も熱心に主張していたネヴェリスコイ大佐に委ねられていたのである。

★注・時代が下がり日露戦争終結時に苦慮していた日本政府は、ポーツマス日露講和会議が暗礁に乗り上げた時、米国大統領ルーズベルトの助言の一言、「日本は樺太を占領せよ」この一言で日露講和会議締結される要因となっている。これ等の裏付けとして、米国は樺太占有の考えはあったと想像できるのである。それは米国に於いては、日本と和親条約が締結されなくとも、軍事力のないカラフトを占有すれば、全て達成されることになる。関心のある方は、拙書電子書籍『日露戦争への列強の策謀』第14章「ポーツマス講和会議」をご覧ください。

帝政ロシアの強烈な愛国者の3傑による極東地域の侵略



⑥



⑦



⑧

⑥ゲンナジー・ネヴェリスコイ⑦ニコラエヴィチ・ムラヴィヨフ⑧ヴァシーリウヴィチ・プチャーチン

⑥・ネヴェリスコイは(1814-76)帝政ロシアの海軍士官。1849年、タタール海峡及びアムール河口に於ける海洋船の航行可能を発見し、翌年、政府の禁令を無視、アムール川下流にニコラエフスクに哨所を設置してロシア国旗を掲げた。ニコライ一世・東シベリア総督ムラヴィヨフの支持を得て、沿海地方及びサハリン島の占領に着手し、1853年、沿海地方の「ニヒライ皇帝湾」及びサハリン島の日本の本拠地クシュンコタン(アニワ湾)に国旗を掲げてロシア領有を宣言した。彼の積極的な愛国主義活動はロシアの極東進出の先駆けとなる。

⑦・ムラヴィヨフ・アムールスキー伯爵(ニコライ・ニコラエーヴィチ・ムラヴィヨフ・1809-81)は、1847年ニコライ一世から38歳で東シベリア総督に抜擢され、以後ネヴェリスコイのアムール下流地方、サハリン島の占領計画を支持して帝政ロシアの極東進出を計った。1858

年ロシア全権として、武力を背景に清国代表伊犁將軍奕山(イシャン)とアイグ条約を結び、アムール川以北の全域を無血獲得し、その功により「アムール伯爵」の称号を与えられた。ムラヴィヨフは清国との交渉に於いて、「ロシアは中国をイギリスの侵略から守る平和的で建設的な策」であると説きつつ、武力による威嚇し、翌 1859 年、7 隻の軍艦を率いて江戸湾に到来し、幕府にサハリン全島のロシア領有を要求したが成功しなかった。

⑧・エフィー・ヴァシーリエィチ・プチャーチン(1813-1883)。海軍大臣・政治家。1842 年ロシア皇帝イギリスがアヘン戦争の結果、清と南京条約を結んだ事を受け、ロシアも極東進出の強化を、皇帝ニコライ一世に進言し、1843 年に清と日本との交渉を命じられた。1853 年 8 月 22 日(嘉永 6 年 7 月 18 日)、ペリー提督に遅れる 1 カ月半後、旗艦パルラダ号以下 4 隻のロシア艦隊を率いて長崎に来航し、幕府全権の川路聖謨としあきら・筒井政憲まさのりと 6 回に渡り会談をしたが、交渉は不成功に終わった。1855 年、中断されていた交渉が再開され、2 月 7 日(安政元年 12 月 21 日)に、遂に日露和親条約(正式名・日本国魯西亜国通好条約)の締結に成功した。

クシュンコタンのムラヴィヨフ哨所を確認 当時、クシュンコタンは松前藩の唐太に於ける漁業の中心地で、そこには勤番役所や運上屋うんじょうや(場所請負人の経営拠点)の建物の他に多数の倉庫や番屋があり、アイヌの住居も数十棟を数えた。経営は伊達屋林右衛門、栖原屋六右衛門の両名が場所請負人に委ねられ、その漁場は 2 ~ 3 0 0 m の大網を使用する大規模漁法であった。各漁場には数十から百余の鯨焚釜(にしん茹釜)があり、魚油と魚粕の生産量も可成りの生産となっていた。漁期は春から夏の終(2 百十日頃迄)、南サハリン方面から集められたアイヌ民が多数使役し、アイヌ民はわずかばかりの米、酒、煙草、古着等で酷使されていた。(『サハリン島占領日記』「ロシア人が見た日本人とアイヌ」にニコライ・ブッセは記している)

このような時代背景の村に、嘉永 6 年(1853) 8 月 29 日、クシュンコタンの沖合に 2 千石積ほどの異国船が到来した。そしてボート 3 隻に 16 人が分乗し、沿岸一帯の水深測量を始めた。言語は通じなかったが、「ロスカイ」という言葉から、彼らがロシア人であることを番屋管理者たちは知る。翌々日の 9 月 1 日、4 隻のボートで 40 人余の陸戦隊を率いてクシュンコタン北隣のバツコトマリに上陸し、ネヴェリスコイ大佐は運上屋に赴き、日本人たちに次のように言明した。

《「古来よりロシア領であったサハリン島に我々が到来した目的は、全く平和的なものである。わが皇帝陛下(ロシア皇帝)は最近この沿岸に多数の外国船が出没し、住民に無

法を働きも、またこれら無保護の地域を占領しようとしていることをお聞き遊ばされ、サハリン島の拠点並びにその対岸の大陸に要塞を作り、以ってその住民並びに、この地へ到来する日本人を保護することを命じられた。これと共に陛下は私に対し、サハリン島における日本人の産業と交易を妨害しないのみならず、諸君らの正当な権益をあらゆる暴力から厳しく守ることを命じられた。それゆえ諸君が全く平穩であることを要請する。我々は常に心から日本人と友好的であることを望むものである。この地の指揮官となるブッセ(陸軍少佐ニコライ・ブッセ)にも以上のことが命じられており、私は諸君とアイヌの間に結ばれているすべての産業・交易・経済関係に干渉することなく、これを尊重することになっている。アイヌたちはこれまでと同様に日本人との関係を維持するよう監視するであろう」。と、ネヴェリスコイは言明した。》

ネヴェリスコイは、サハリン島に対するロシアの歴史的権利を繰り返し述べている。87頁図⑤で見る限り、「アイグン条約」は1858年であり、クシュンコタン占拠は1853年なるわけで、帝政ロシアはこの5年前より、沿海州・サハリン島の領土の侵略を既成事実としてネヴェリスコイは自信と確信を持っていたのであろう。その裏付けはアムール河口地方や沿海州に、清朝の軍隊が皆無である情報を、ロシア旅行者から確認を得て、この情報を基に3傑者は極東侵略に情熱をふるい立たせたのである。

ネヴェリスコイとブッセは、日本人に対して身振りをもって、「ロシア人は、彼ら及びアイヌと友好的に暮らすことを望んでおり、サハリン島を占領する事は、これはアメリカ人から守るためだ」と説明したというが、日本人にとっては滑稽な話で、聞いた日本人たちは、非常に冷淡に聞いていたと、ニコライ・ブッセの日記には記されている。ネヴェリスコイの記述には多くの創作が交じっているので、そのまま信じ難いが、ムラヴィヨフ提督の指示に従い、日本人に友好的な態度を示し、軍事衝突を避けながら、「サハリン島」を征服する思惑が読み取れる。

ロシアは「日本人とアイヌ人との雇用関係に不干渉」の立ち位置 陸軍少佐ブッセ指揮官は、日本人に対する友好的態度をとり、アイヌと日本人の雇用関係に干渉しないという立ち位置にいた。ブッセは日本人とアイヌの共存生活についていろいろ苦慮している。これまでの日本人の横暴に耐えてきたアイヌ民は、ロシア人の裁量で日本人から解放されることを期待していたのである。しかし、ブッセはこの問題に干

渉することをネヴェリスコイらに固く禁じられており、漁場の不干渉を守れば、日本人とアイヌの雇用関係に介入しない事になり、このことは日本人に対するアイヌの従属関係を認める事になる。ブッセはサハリン島占領する現実に於いて、ロシア国民となるはずのアイヌ民を、他国民の支配下に置く事は矛盾を生じていたが、それは日本との軍事衝突を避けるためにはやむ得ない事だったのである。

アイヌ側から観れば、自分たちを保護しないロシア人に失望し、又、日本人による仕返しが、自分たちに向かうのではないか、そうなればロシア人への奉仕していることは困難となり、アイヌたちは日本人からの仕返しを恐れるようになっていった。それは彼らの間に、翌春になれば、日本から軍勢がやって来て、ロシア人を皆殺しにして、ロシア人に協力したアイヌたちを処罰するという噂が流れはじめたからである。

そこでブッセ少佐は、その噂には根拠があると考え、日本人に厳重に警告し、「ロシア人との友好を望まないのであれば、トマリから出て行くように」と断言したと、日記にある。ブッセ言明に日本人たちは友好的な態度をとり、アイヌたちにも気がねなくロシア人に奉仕するようになったと日記にはある。

ブッセは、日本人とアイヌの間に入り込んだロシア人立場の困難さを次のようにかいている。「我々のサハリン到来が、日本人の漁業に何らの損害も与えないことを日本人に示すためには、従来のごとくアイヌを日本人の奴隷のもとに置き、我々にとって危険ではないまでも、^{けんお}嫌悪を身に受けながら、サハリンの日本帰属とその住民に対する、日本人の完全な支配を認めなければならない。日本人の不当な安い給与で働かせることを禁止すれば、それは日本人から全ての労働者をとり上げることを意味する。ブッセの取った方法は、日本人がアイヌに公然と不当な行為を行わないよう警告したうえで、日本人とアイヌの個人関係には干渉しないという中間の道であった。」

日本人との友好という命題を守ために、ブッセ少佐の監督下に於いて、ロシア兵の規律が厳正に保たれ、8カ月にわたるロシア軍の占領下に、日本人やアイヌに対する暴行や不祥事はただの一件も発生しなかったのは奇跡的であった。と、日記は伝える。

プチャーチンの長崎交渉 1852年10月7日(露暦)、プチャーチンはニコライ一世の8月23日命令の「日本皇帝宛国書」を持ってやって来た。この時点は、ロシア政府はサハリン島の占有することを視野に入れていなかった。が、その時間差で、日本研究で有名な学者、シーボルトをペテルブルクに招き、彼の献言を聞き、国書は宰

相ネッセリロードから、幕府老中宛に書き改められ、プチャーチンの入港先も長崎と決定された。この新たな国書はパナマ経由の急使によって、小笠原の父島停泊中のプチャーチンに届けられ、サハリン問題の交渉もその追加されたもののようである。

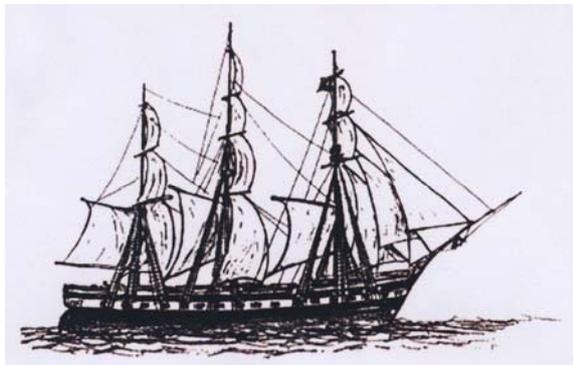
★当の状況は 「シーボルト記念館」所蔵のマイクロ資料で明らかになったことは、1852年11月シーボルトはプロシヤ駐在ロシア公使宛の書簡の中で、ロシアが日本を国交交渉の席に着かせるためにサハリン島の領有を主張することを提案している。『シーボルト記念館便り』第24号・平成6年2月。ロシア政府のサハリン占領命令は、ネヴェリスコイの要請ばかりでなく、シーボルトは裏方の提案によって早められていた。又、当時のシーボルトの立ち位置は、オランダ・ロシア・プロイセン側にあったようで、日本への加勢を組み出すことが出来れば、英米仏を押さえ込むことが出来ると考えていたようである。(東京大学史料編纂所より)

プチャーチンが幕府に提出した新たな国書は、第一に両国の境界線を定めることを重要とされ、とくにサハリン島の南部に注意が向けられている。さらに「夫れ魯西亜帝所領の地は、其大さ世界万国に冠たれば、更に地を益し境を広げるは、実に要須(必要)とせざる所なり」といい、ロシアの目的は領土の拡張ではなく、境界の確定であると強調している。この国書はニコライ一世が承認したのは1853年2月24日ことで、このことはロシア政府がサハリン占領命令を、1カ月前に唐太島上陸を決定していたことを示している。プチャーチンは長崎港に3カ月滞在中にこの情報を得たことになる。

これによりプチャーチンはサハリン全島の領有を主張、「カラフト島(即薩哈連)は唯野人のみ住棲(すみか)し、其住民は魯西亜の支配を仰ぎ制教及交商に乏しき者たり。故に魯西亜帝の命により、此3ケ月来魯西亜領とし、且つ許多(たすう)の軍兵を置いて是を備う。漁獵及他の商業を為し、且時節を期して己れが住家を構へんが為に、カラフト島及南部アニワ港に来る日本人の寡少なるは、唯全権が言える所の理を資く(助ける)。加^{しかのみならず}之右日本人アニワに住居するに方つては魯西亜領民の如く、其保護を蒙むるなるべし」。(『幕末外国関係文書』第3巻、第20文書)

一方、幕府がクシュンコタン占拠の事実を知ったのは、事件から1カ月後の嘉永6年(1853)9月28日であった。松前藩主は、直ちに一番手85人、二番手77人をサハリン島へ発進させ、幕府にも通報した。当時の幕府の受止め方は、ロシア人の上陸を深刻には受け止めておらず、またロシア人も断固たる意志で占有を維持する考えを持っていなかったようである。恐らく、アメリカ・ロシアによる開国要求の対応に苦慮

していたのであろう。幕府にとっては「サハリン島占領事件」は遠い他国の事件のような感覚であったと思われる。



⑨



⑩

⑨・プチャーチン提督乗艦ディアナ号・帝政ロシアの最新鋭の軍艦・全長52m、2000 吨の木造帆装戦艦、大砲52門、乗員500名となる。⑩・魯西亜人貴賤之図・貴賤=軍隊の身分の高い位と低い位。

ロシア兵のクシュンコタン撤退と幕府のカラフト対策 翌年5月10日から15日までに、4隻のロシア船が相次いでクシュンコタン到来し、「メンシコフ号」にはプチャーチン使節の幕僚ポシウツ海軍中佐がやって来た。彼はプチャーチンからのクシュンコタン哨所撤退の提案書面を持参し、5月18日、哨所の物資と兵員を乗船し終え、まる8カ月にわたるクシュンコタン占拠地から出帆した。ロシア兵がこのように大急ぎで撤退したのは、ロシア兵の間に壊血病者が40名に及んでいたことと、幕府の一番手の足軽が85人、二番手77人がやって来た事により、強気なロシア海軍兵たちも恐れがあったことは否めない。

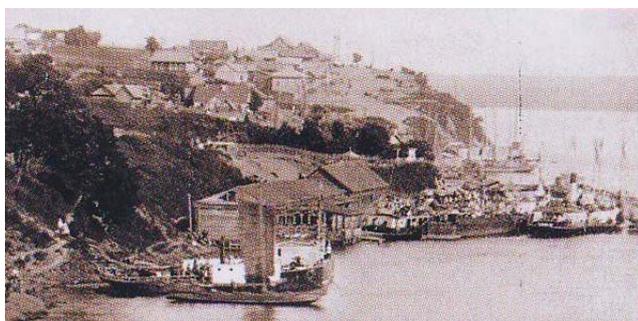
やがて6月12日、幕府の目付堀部と勘定吟味訳村垣与三郎が到着し、予定されていたプチャーチンとの境界立ち合い見聞の代わりに、ムラヴィヨフ哨所跡を視察後、幕吏や松前藩士たちによってカラフト奥地までの調査が行われた。しかし、当時の状況では北海道の開拓こそ肝要であって、幕府にカラフトを開発する余裕はなく、漁場を広げる事のみ重点が置かれ、アイヌ民との共同漁業に取り込むことが精一杯であった。そして23年後の明治8年(1875)、サハリンは「樺太千島交換条約」が締結したことは、その原点にクシュンコタン占拠事件があったのである。日本のカラフトに対する領土権は、嘗ての清国との国境と同様に、北限が明確でなかった事を突かれ、交渉と解決の糸口が見つからず、不明確なカラフトに対する領土権をロシアに譲り、日本側はロシア領であったウルップ島以北の千島、18島を獲得し「樺太・千島交換条約」が締結した経緯となる。

第9章 アムール川下流紀行 ハバロフスク→ティル→ニコライエフスク

『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文』『永寧寺碑文と永寧寺遺跡の調査』の章で菊池・中村両先生の記述の中に、「2005年8月28日、ハバロフスクからアムール川より、間宮林蔵のように船上からティル村を遠望した。正確に言えば、ティル村に上陸する許可が得られなかったからである。」と述べられている。

筆者は5年前に、サハリン取材で「ニヴフ族のノグリキ博物館」が工事中で入館できない苦い経験を持っているので、好意にしているユーレックス・ロシア旅行社に、ティル村取材旅行計画を相談したら、「面白い旅の計画ですね、ロシアの歴史に協力します」とのメールを受けたのであるが、1カ月半程返信が無かった。察する情事は、上陸許可のビザ発給に何か^{ひと}問題が起きたのであろうと想像した。筆者の憶測であるが、元・明・清代に中国領となっていたティル村(ヌルガン)に存在した奴児干都司跡・永寧寺碑記跡を他国の人々に見学させる事は何か問題があるのであろうか、心意は解らないが、ハバロフスク州役人の解答を取り付ける必要があったのであろうと深読みした。そう思えるフシが旅費の明細に「ティル村に於ける許可と、コーディネーション料」と記載があり、やっぱり、と納得した次第。この現地ティル村取材を受けてくれたのは、民間の旅行社ではなく、ニコライエフスク・ナ・アムール市の役人となっていた。日本でいう処の、社会教育課、歴史文化課、歴史民俗文化課のような課の職員が直接に案内役を引き受けてくれた旅となった。

ハバロフスクの街から出発する



①



②

①アムール川の旧船着場 1870年頃

②現在の船着場ハバロフスク市・左側が公園・2014年撮る

①・ハバロフスクの街は1858年5月に開かれた。明治11年9月22日、初代駐ロシア公使榎本武揚は、首都サンクトペテルブルクからシベリア経由で帰路の途次に、ハバロフスクのアムール川船着場に降り立っている。又、黒田清隆伯爵は明治19年

に立ち寄り、明治26年には、探検家の玉井喜作(ジャーナリスト)はこの地よりシベリア単身横断してドイツに渡っている。更に明治32年、大陸浪人石光真清(諜報活動家)はハバロフスクの街で諜報活躍している。(日露開戦前夜諜報活動は拙書電子書籍『日露戦争へり列強の策謀』第8章「日露戦争前夜にロシア圏への諜報活動した男たち」82~85頁参照)

②・アムール川とウスリー川の二大河川の合流する地点となり、東シベリア総督ムラヴィヨフ・アムールスキー伯爵を因^{ちな}んで、ムラヴィヨフ中央公園名となっている。ムラヴィヨフは極東ロシアの主要都市ニコラエフスク、ブラゴヴェシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオストクの街を開いた人物となる。1858年清国とアイグン条約を締結後、1860年に北京条約を結び、アムール川とウスリー川沿岸地域をロシア領として植民化している。



③ムラヴィヨフ中央公園内に州立郷土博物館



④同公園にムラヴィヨフ伯爵の像が立つ

ハバロフスク街から北東へ約70km^{げこう}下航しシカチ・アリャン村(岩絵群)へ着く

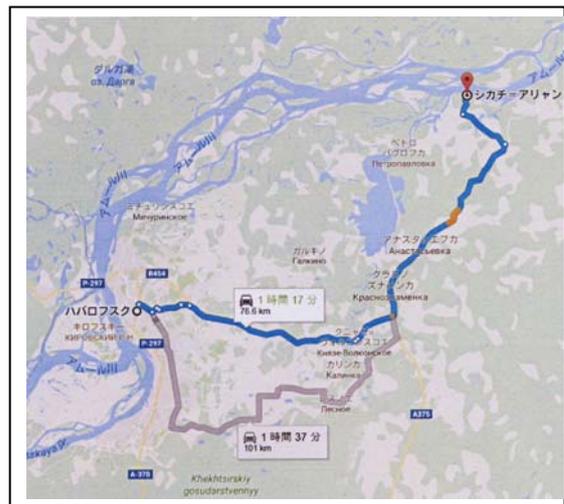
ロシア連邦ハバロフスク市からアムール下流70kmの右岸にシカチ・アリャン村に着く。人口300人余、ここに居住の「ナーナイ人」はツングース系の言葉を話す先住少数民族がおり、極東最大の川にアムール川流域で漁労を中心とした生活をしている。日常の暮らしは、漁撈を中心にして山や川、湖、動物狩猟の生活と、神々の祈り、自然に感謝の暮らしをしている先住民村となる。

この村をA.P.オクラードニコフ(ロシア人)は、『シベリアの古代史』『黄金のトナカイ』の著者は、1935年から、1958、1963、1969年にシカチ・アリャン村の岩絵の調査を行っている。極東アジアに早期に進出した人類の祖、モンゴロイドたちは、極めて早くからシベリア地域に生活圏をもち、早期の石器時代にはある程度の自衛と生活確保する集団を形成していた。犬を飼いならし、犬を家畜として飼う習慣を持っていたのである。川岸や川の中州等に定住集落は、魚食生活(ユッコラ・干し魚)は、丸木舟や

犬ゾリを持ち、夏の家(高床式)、冬の家(竪穴住居)で季節を巡り、氏族(ハラ)組織するなど、狩猟・漁労・儀礼とシャマニズムの村集落を形成している。

このシカチ・アリャン村に近いガーシャ遺跡(支流アムグン川流域、約2万5千～1万5千年後期旧石器時代)から出土の土器を測定すると、炭素年代測定結果は、今から12960±120年となり、約1万3千年前の岩絵群の測定結果が出た。このシカチ・アリャン村はアムール川河口まで、11月末頃から翌年春迄厚い氷に閉ざされる村となる。

冬期はヘラジカ、アカシカ、トラ、ジャコウネコ、イノシシ、クロテン等の狩猟生を行い、春になればサツキマス、フナ、コイ、鯰の漁労を行い、8月になれば鮭の産卵の遡上そじょうが始まり、鮭やカラフト鱒等の大豊饒期となり、まさにこの流域のナーナイ人は1年分の食糧魚の確保できる村である。



図⑤バロフスクからシカチ・アリャンへ・Google



⑥

⑥シカチ・アリャン村・ハバロフスクから車で2時間弱の100km位の所、右奥が上流。(岩絵についての説明は、電子書籍『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか』第2章22～27頁参照)

シカチ・アリャン ⑥の奥岬先端には水流が集まり水の流れの勢いがある場所となる。そこに8月に入ると、この村に鮭類の遡上道となっている場所あり、岸边側に

魚群が寄って来る水流域がある。その魚道をナーナイ族たちは、魚群をコントロールして大量の鮭類を捕獲する場所となっている。春から夏にかけてイトウ、カルーガ、オショトル(チョウザメの一種)、サザン(鯉科)、鯰など百種類を超える魚が獲れる。8月になれば夜を徹して遡上する鮭を捕獲、この場所の地名が「アリヤン」の語源の「漁」に関わる「場所」、又は「合流点」である事が証明される。又、アムール川は中国の名称は、後漢から晋まで「弱水」(アムール川は見た目では流れが緩やか)、清朝期「黒竜江」と呼ばれ、アムール流域先住民はアムール川の名を「モンガボ」「モンゴ」「マンゴ」「マング」等と呼んでいた。中国流の「ロン」「龍」ではない。

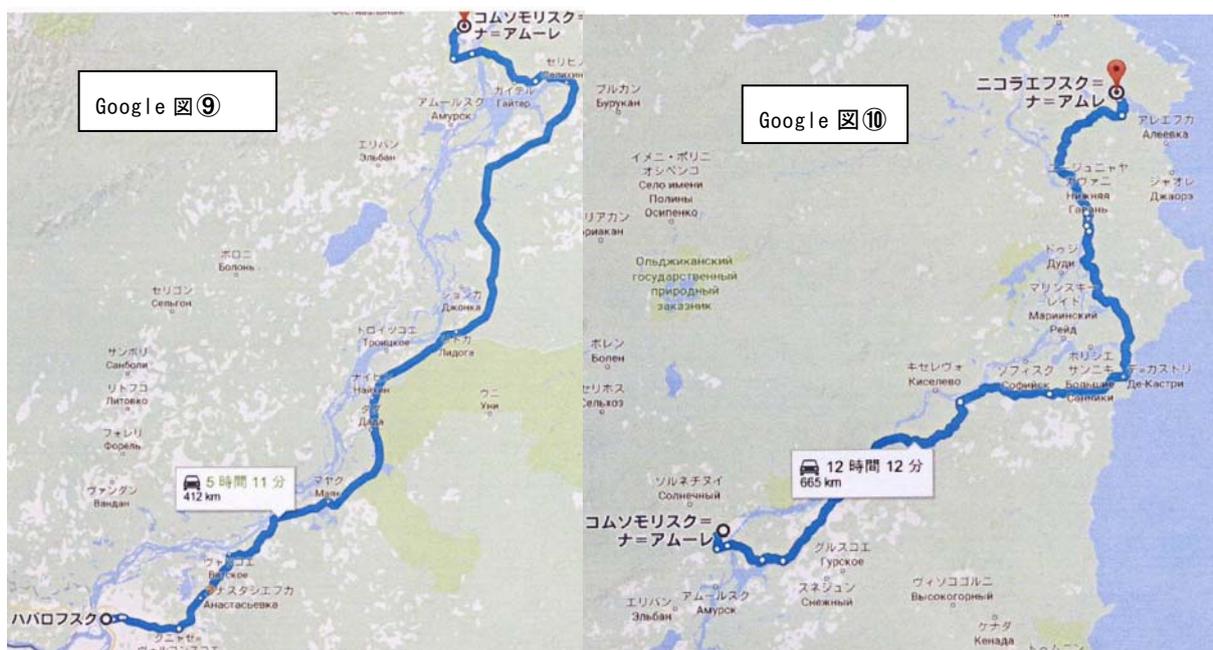


⑦・人間の顔ガイコツを描いた岩絵



⑧・ヘラジカ刻画を安山岩に刻む

コムソモリスク・ナ・アムーレの街からティル村を目指す



⑨・ハバロフスクから車でコムソモリスクの街へ

⑩・フェリーでコムソモリスクからティル村へ

シカチ・アリャン村から北東へ車で約 340 km、コムソモリスク・ナ・アムーレの街に到着する。この街はかなり大きな街となり、この辺りのアムール川の川幅は見渡しても、川とも湖とも思える川が流れ、川と湖が一带になっている川の街となり、街はアムール川下流左岸に位置する港湾都市・工業都市となっている。この街で1泊する。

早朝5時頃のアムール川フェリー場へ、日本の中堅駅のようなガサガサした人の混雑したフェリーに乗場へ着く。さあ、これから約10時間有余の船旅、ティル村への下航の旅が始まる。川幅から来る感覚なのか、船のスピード感がある。



⑪



⑫

⑪コムソモリスクのフェリー乗り場

⑫30分下航すると右岸に墨絵のような幻想的な丘陵が続く



⑬



⑭

⑬2時間余下るとアムール川の中洲が至る所に見える

⑭川幅や川の流れ、川の形体は全く分らない



⑮



⑯

⑮午前11時頃、中洲を交わしながらフェリーは走る

⑯村の各船着き場はこのよう駅舎になっている



⑰



⑱

⑰フェリーから全員下船、給油所へ向かう ⑱約6時間余走る、デレンはこのような中洲なのか



⑲

⑲正面の丘陵の向こう側に出ればティル村となる、午後4時過ぎ頃に到着した



⑳



㉑

⑳ティル船着き場を村高台より望む、右奥が下流となる

㉑ここがティル村役場。この役場で宿泊し、夜食は村長さんが作ってくれました。右写真はロシアパンとイクラが出ました。





② 役所近くの高台から矢印が寺院跡見える



③ 役所前から山側を見る風景となる

ティル村長さんの記事 リュドラ・アレクセイ・メーリニコフ村長さんの紹介は『Земля, где счастлив человек・80 лет』より、「ここで幸せな人々の大地・80周年誌」より筆者の訳。

村長さんのティル村説明記事に「アムール下流域にはロシアで唯一の中世の仏教遺跡が2つあります。1411年、中国の明皇帝の宦官イシハ(Yishiha)の遠征が、アムール軍政府所に派遣され、アムール川河口から120km上流に高い崖(ティル村)の所に「永遠の静けさの寺」を建立しました。その後先住民族によって破壊されましたが、1434年、イシハはアムールへの2回目の遠征を行い、仏教寺院を回復しました。寺院の遺跡には中国語、チベット語、モンゴル語の碑文が花崗岩に刻まれていました。



④・アレクセイ・メーリニコフ村長・右
80周年誌・村長さんから贈られた

そして、時代は下がり、17世紀の50年代にこの遺跡は発見されました。ロシアの探検家たちは19世紀後半から、1854年、1873年、1935年にティル(tyrskih=ティルスキ)寺院の調査を試みています。寺院址の本格的な発掘調査は1995~2000年にアムール考古学グループによって始まりました。これらの研究で、ニコラエフスク・ナ・アレーム博物館にはユニークな考古学的なコレクションを取得することができました。」と、80周年誌で述べておられます。

ニコラエフスク・ナ・アムール(尼港) ^{にこう} ハバロフスク地方のニコラエフスキー地区の行政都市、港湾都市となる。間宮林蔵が 1809 年にこの地に訪れ、『東韃地方紀行』の中で「フヨリ」と呼ぶ町が、現在のニコラエフスク・ナ・アレームに一致している。



グレート・ニコラエフスク・1858 年



㉕

㉕・ニコライエフスク博物館



㉖

㉖・ニコライエフスク・ナ・アムール市役所、左側が博物館

尼港事件 ^{にこう} 尼港と書いて「ニコラエフスク・ナ・アレーム」を指す街は、日本人には「ニコウ」の呼び名で知られている。ロシア革命後のロシア内戦中の大正 9 年 (1920) 3 月から 5 月にかけてアムール川河口のこの街で、赤軍パルチザンによる大規模な住民虐殺事件、「尼港事件」が起きた。赤軍パルチザン部隊 4300 名、(ロシア人 3000 人、朝鮮人 1000 人、中国人 300 人)が尼港住民に略奪、暴行、処刑に対し、日本軍守備隊 (守備隊 290 人・憲兵 15 人・無戦隊 40 人・在郷軍人 70 人)が決起した。赤軍パルチザンの勢いは止められず、街のロシア人を中心に 6 千人の住民が虐殺され、日本人居留民と日本軍守備隊等の 731 名 (軍属関係者が 336 名、海軍関係者が 44 名、石田領事とその家族 4 名、民間人 347 名・日本領事館が消失し書類消失)の犠牲者を出した。日本人遺留民、日本領事一家等を含み国際的批判を浴び、日本国民の反発を招き、シベリア出兵を長引かせる原因となった。日本人が赤軍パルチザンによって虐殺され、監獄の壁に書かれた遺書「大正 9 年 5 月 24 日午後 12 時忘れるな」が残る街となる。

大正 7 年 (1918) に始まった日本軍のシベリア出兵は、アメリカ合衆国の呼びかけの共

同出兵であり、アメリカの提議に従って「チェコ軍団救援」を日本軍はその目的として駐留したが、しかし、チェコ軍団は赤軍と戦闘状態にあつて、ボリシエヴィキ政権(ウラジーミル・レーニンが率いた一派)とは敵対していたので、ロシア内戦への日本国が干渉なくして救援は不可能であつた。そもそもアメリカの提議そのものに矛盾があつた。「尼港事件」の書籍は、原暉之著『シベリア出兵』、細谷千博著『シベリア出兵の歴史研究』、土井全二郎著『西伯利亞出兵物語』等々がある。尼港事件は遠大な話なので省略し、ニコライエフスク博物館に事件関係の展示写真を紹介します。



⑲

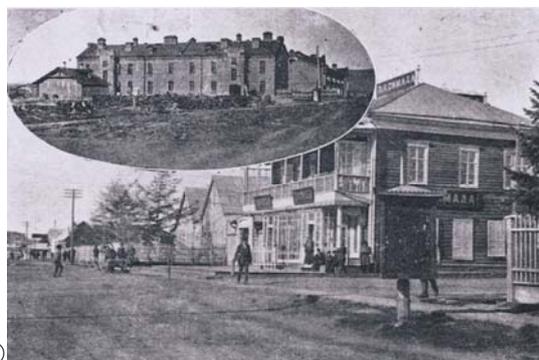


⑳

⑲ 廃墟となったニコラエフスクの街 ⑳ 虐殺事件を起こした赤軍パルチザン幹部の集合写真。中央の白衣の人物、虐殺の中心人物ヤーコフ・イヴァノーヴィチ・トリャピーツィン。左の女性は宣伝部指導者ニーナ・レペデワ・キャシコ。背後の屏風は日本人から略奪したものと云われている。1920年4月。



㉑



㉒

㉑ 焼け落ちた日本領事館 ㉒ ニコラエフスクの島田商会・楢円は日本軍兵営(ウィキペディア)



㉓



㉔



㉕

㉓ 島田商会のクーポン券、上表、下裏側 ㉔ 島田元太郎 ㉕ ニコライエフスクに居た日本人の諸士

③①・クーポン券=「独自紙幣」・ピコラエヴィッチ紙幣=島田商会札 島田元太郎は長崎県島原半島生まれ、1885年にウラジオストクに渡る。苦学の末、ロシア語を学び、15歳でウラジオストクからニコラエフスクへ渡り永住権を取得した。そして島田は、バプテスマ(キリスト教へ洗礼)の宗教による洗礼を受け、島田は正統派の父称ペトロ・パタボラスラヴノー・ニコラエヴィッチの洗礼名を島田は取得した。更に、彼の勉学はロシア語に止まらず、地元地域の先住民族のニヴフ、ウリチ、エベンキの方言を会話することにより知人を得たことである。これ等を足掛かりに、1896年「島田商会」を設立、日本へ鮭・鱒をはじめ、木材・毛皮等のニコラエフスクの産物を輸出し、中国・日本から生活雑貨を輸入して財をなした。やがて尼港は、1917年2月革命、10月革命と、ロシア情勢は混沌し、ロシア人同士の取引でさえ、銀行決済に不安定を齎していた。英国・米国は日本の銀行に預金を頼み込んでいる状態となり、尼港に於いてはロシア銀行の役目が不能状態に陥っていた。1918年、ロシア帝国は崩壊、物価は高騰、ルーブルは下落し、経済は大混乱を招いた。そこで、島田は一計を案じ「独自紙幣」を発行に至る。偽造紙幣ではなく、この紙幣を島田商会へ持参すれば、島田商会の商品と交換ができ、また、手形・保証書の類の役目も果たし、島田商会の保障が裏付けされ、ロシア人もロシア政府発行のルーブル札より、島田商会が発行した保証書が有利となり、島田商会の「券」(信用金額)が安心安全の紙幣となり、ニコラエフスク市民が欲しがったのである。こうして、1919年、島田商会版のルーブル券(札)が発行され、ニコラエフスクで使われる紙幣という意味で、「ニコラエヴィツチ紙幣」と呼ばれた。НをПに誤植したために「ピコラエヴィツチ紙幣」とも呼ばれているらしい。(ニコラエフスク博物館刊『годы и друзья старого николаевска』の章「ピョートル大帝のアムール」参考した)



③④



③⑤

③④③⑤・ピコラエヴィツチ紙幣・1919・表「ПЕТРА НИКОЛАЕВИЧА СИМАДА=ピョートル・ニコラエヴィチ島田 Десять рублей.=10ルーブル」・裏面文字不詳 (紙幣の写真・「探検コム」より)

③③・御大礼 皇位即位式の後に、五穀豊穰を感謝し、その継続を祈る一代一度の大嘗祭が行われる。即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせた御大礼と称される。

島田商会の記事をみる 題名「ピョートル大帝のアムール」の一部

Петр Первый Амурский

С самого своего начала Николаевск развивался как интернациональный и многонациональный город. К 1917 году в городе сложилась устойчивая сеть национальных землячеств и диаспор. Многие представители различных национальностей, входящих в состав городского населения, внесли значительный вклад в развитие не только Николаевска, но и оставили весомый след в исторической летописи всего Нижнего Амура. Это — рыбопромышленник еврей Люри. Это — красный командир кореец Пак. Это — предприниматель немец Людорф. Это — комиссар первого Совета поляк Проталинский. Это — торговец и финансист японец Симадо и многие другие. Сегодня я расскажу вам о Петре Николаевиче Симаде — японце по национальности и гражданству, православном христианине по вере.

П.Н. Симада родился 5 августа 1870 года в Нагасаки в небогатой многодетной семье. С 13 лет стал сам зарабатывать деньги, работал помощником приказчика в магазине писчебумажных изделий.



Симада П.Н.

Поэтому учиться дальше не пришлось. Но всю жизнь Симада занимался самообразованием, и в этом направлении он достиг высокого уровня. Услышав о больших возможностях на российском Дальнем Востоке, он после получения необходимых документов выезжает из Японии в город Владивосток. Было это в 1885 г., когда ему только что исполнилось 15 лет. Уже тогда он был не по годам развит и смел. С Владивостоком молодой Симада связывал большие надежды. Но в виду обостренной конкуренции в этом городе как среди местных, так и среди пришлых коммерсантов и бизнесменов, 21 июля он переезжает на постоянное место жительства в город в устье великой реки — Николаевск-на-Амуре. И он не ошибся в выборе, именно в Николаевске к нему пришел успех, и здесь он приобрел признание горожан. Здесь же он крестится и принимает православное вероисповедание. При крещении Симада получает православное имя и отчество — Петр Николаевич.

Первоначальной задачей, которую поставил перед собой предприниматель, стало изучение русского языка. И в этом он достиг значительных успехов. Попутно Симада знакомится с говорами и диалектами местных аборигенов — нивхов, ульчей, эвенков. Ну а его красивому каллиграфическому почерку мог позавидовать не один учитель чистописания. Уже позднее, в зрелом возрасте, пришло к Петру Николаевичу и увлечение русской классической литературой и, как результат, создание своей библиотеки современных российских и классических писателей и поэтов.

③④

③⑤・【『ГОДЫ И ДРУЗЬЯ СТАРОГО НИКОЛАЕВСКА』「古い年代や友人のニコライエフスク」】「ピョートル大帝のアムール」(筆者訳)の一部・ニコラエフスク博物館刊より。

★この当時、ニコラエフスクの街は、ルーブルの下落は激しく、ロシア政府発行のルーブル5枚位と島田商会発行の1ルーブルが交換される事情が起きていた。漁民は漁網や生活資金のために、島田商会の商品と交換のきく、島田商会の裏保証付きのルーブル札を欲しがった。島田商会も鮭や材木等を買付ける時、2、3カ月先の前金を島田ルーブルで支払った。それはロシア政府のルーブルを金庫にしまって置くうちに、瞬く間に下落してしまうからである。



図③⑦



図③⑧

③⑦と③⑧は尼港事件時の「尼港地図」で、日本側の軍や重要施設等の配置図となっている。役所の現地案内係の方が、日本人である筆者に特別に頂いたもので、筆者自身、どれ程の秘の地図なのか理解していません。「尼港事件」を研究されている方が居られると思います、事件時の貴重な現地図なので、秘印を付けて掲載します。ご理解の程。

余話・尼港の裏面史考 ニコライエフスクの街で島田商会をはじめ、日本人の成功者は多くいたが、日本人に好感を持たない街の住民たちもいた様である。

1850年、ネヴェリスコイ提督によって哨所から6年後に市制を敷いたニコライエフスクは、極東ロシアの行政の中心地として栄えた。1910年当時の人口は1万7千人弱、その内約2千人が漁業に従事していた。アムール河口の街を発展に導いたのは日本人漁業者たちである。アムール下流域に進出した日本人漁業者は、明治初期の1870年頃から、当時南樺太に出稼ぎに来ていた一部の者たちが、対岸の魚類豊富なアムール下流域に手を伸ばしたのが始まりで、日本漁船のニコライエフスク入港は、1892年に帆船が2隻、1900年には85隻(内汽船21隻)までに増えている。その要因は、ロシア漁業資本の幼弱と、ロシア祖国へ製魚を送る事情に難題があった事、日本人漁業者らは近距離に日本の市場を持ち、その好機を見逃さず業績を伸ばしたのである。

第7章「間宮林蔵の概観」80頁でサケの捕獲を紹介したが、20世紀初頭のアムール川漁場での捕獲の漁具方法は、「日本式ザイエズドク」と地元民に呼ばれ、^{やな}築の漁獲式で鮭の漁獲量を多大に高めた。仕事に忠実な日本人の性格上、自ら漁場の事ばかり考え、集中的に漁獲したため、上流への鮭の遡上が止まり、上流の各村々の漁獲は

さんさん
 燦燦たる惨状に陥った。上流の漁民らの不満は鬱積し、10年後この街で起きた「尼港事件」はこの事件の背景の一つに、日本式の「築」方式で一網打尽に鮭を捕獲してしまう日本漁民に対し、アムール下流域の漁民の怨念が有った筈で、当時の日本居留民でこれに忠告する人はいなかったようである。（『シベリア出兵』原暉之著・前掲書参考）

ニコラエフスク郊外にあるニヴフ族の小学校を訪問



39



40

39)добро пожаловать・「歓迎」とある

40)街より 20 km 位上流のニヴフ族小学校、右より 3 人筆者



41



42

39)・41)の小学校より 5 km 位離れたニヴフ族学校

42)ニヴフ族の小学校資料館・先生はロシア人でした



43



44

43)は41)のニヴフ族の小学校に絵柄の刺繍あった

44)・同、ニヴフの飾りで獣の顔とある

小学校で出された昼食 野生のコケモモ、スモークサーモンの美味をいただいた



④⑤・コケモモ

④⑥・スモークサーモン

④⑦・鮭のクンセイあえもの

余話・先の大戦の日本兵シベリア抑留者の墓を訪ねる



上記写真はニコラエフスク郊外にある「日本兵強制抑留者の墓跡」この墓所跡では抑留者のお骨は「全部日本へ引き上げた」と、ガイドの説明を受けた。現在は「日本人抑留者・鎮魂の墓標」が立っていた。その傍にトリカブト花が咲いていた

帰国後、ニコラエフスク地区の「日本兵強制抑留者」の確認を、『シベリア強制抑留の実態』阿部軍治著より調べてみたら「はじめに」に次のようにあった。

《1945年8月、太平洋戦争の終戦間際、すでに降伏を決定していた日本に対し、スターリン政府のソ連が、日本の支配地域の満州や樺太や千島列島等において、大軍をもって押しつけ的に戦闘をしかけ、戦争が終わっているのに大量の日本軍人や民間人を“捕虜”と称して捕獲し、しかもソ連経由で日本に帰国させると騙してソ連領内へ強制連行して、それは起こったものであった。連行先のシベリア等の抑留地で彼ら待

ち受けていたのは、飢えと極寒と無慈悲な強制重労働だった。ニコラエフスク地区は、7カ所の収容所に推定4千人が収容され、死亡者推定530人、引揚者約3500人になっている。ハバロフスク地区は、24カ所の収容所に推定2万人、死亡者推定934人、残留者5635人、引揚者約1万2千人となっている。》



ココニコラエフスク墓地跡は鎮魂の小道の奥になる



案内してくれた役所の人

ハバロフスク郊外の日本人墓地・ハバロフスク郊外



ハバロフスク郊外にある日本人墓地



日本政府によるシベリア慰霊碑と平和公苑建立



シベリア慰霊平和公苑

両地区の1カ所ずつ鎮魂にお伺いした。「シベリア強制抑留」に関心のある方は、拙書電子書籍『日露戦争への列強の策謀』後編「附録」をご覧ください。

結びにかえて

アムール川下流域地方からサハリン島の歴史文化を足早に見てきたのであるが、ならば幕末の「日本国」を、外の国々はどの様に見ていたのかを知るうえで、アメリカ合衆国ペリー提督が1853年に浦賀に来航する5年前に、日本国へ上陸していたアメリカ人、ラナルド・マクドナルドという人物を追ってみた。

「寛永の鎖国令」(1639)は徳川幕府三代将軍、家光に時代に出されてから約1世紀は無風で過ぎていたが、18世紀中頃から、ロシア国はカムチャツカを制圧し、オホーツク海を南下して、日本の沿岸を調査に現れる事件や、ロシア漂流船が相次ぐようになった。その事情は日本との親善通商を求めるロシア使節が来航していた。

第一回ロシア使節ラクスマンの来日は、寛政4年(1792)10月、彼の来航の名目に、日本人漂流民大黒屋光太夫ら3人を伴って来たために幕府は対応に苦慮し、漂流民は松前で受け取り、通商問題は長崎以外では協議できないとして、「^{しんぱい}信牌」という長崎入港許可証を与えたが、長崎には現れず今件の交渉を終った。12年後の文化元年(1804)9月、第二回ロシア使節レザノフは日本漂流民4人を伴い、先の「信牌」を持って長崎に来航した。長崎奉行所は幕府の指示を仰ぐためと言い、使節を6カ月間待たせたあげく、幕府は従来通り通商を拒絶した。納得しないロシア使節は日本の北辺襲撃を繰り返し、1806年カラフトの番所、礼文島、利尻島が焼き討ちにした事件が起した。

19世紀に入り産業革命の発展と共に世界の生活水準は上がり、機械等の潤滑油としての鯨油の需要は増すばかりとなり、アメリカでは17世紀中頃より、マッコウクジラ・セミクジラから良質の鯨油が採れることを知り、捕鯨は北米大陸東岸に発展していた。やがて米国東海岸では鯨の乱獲により枯渇したが、1819年、中国ハワイ間を航行するアメリカ商船が、日本近海でマッコウクジラの大群を発見した。このニュースが全米に伝わり、アメリカ資本家たちは大型アメリカ式帆走捕鯨船を建造し、北はベーリング海峡を抜けて北極海まで、南はオーストラリア大陸周辺や、サウス・ジョージア諸島まで米国捕鯨は世界の海に躍進した。

鯨のマッコウ油で作ったローソク加工は大きく伸び、又、コルセットに使う鯨骨の需要も伸び、これ等の社会生活産業の発展に伴い、米国労働者人口は鯨関連産業に移行して行った。米国民はその鯨産業に人々は走り、世は農業から捕鯨へと職替えし、資本家たちは捕鯨船への投資した収益を期待した。そのため世界の海は乱獲につぐ乱獲となったが、と同時に現場の捕鯨船上では、炉と釜で鯨皮等の釜茹で作業に、大量

の薪水(まきと水)^{しんすい}や食料の現地調達に乗組員は苦慮していた。当時、補給を求めて太平洋に捕鯨船の数は英米合わせて 500～隻が操業していと云い、この問題を解決するために、捕鯨産業界から、政治家へ突き上げがなされ、アメリカ国家として解決しなければならない重要な緊急課題となっていたのが、「日米和親条約締結」であった。因って、ペリー提督の余裕のない強引な外交交渉には、その様な事情があったのである。

アメリカの日米和親交渉が始まらない前の海上に於いては、捕鯨船の船長たちは、日本周辺で幕府の力が及ばない島、北海道周辺の礼文島・利尻島・焼尻島・国後島・択捉島等に補給品確保のために、航海上地理を的確に理解せざるを得なかったのである。南は九州の南端や、四国の沖ノ鳥島や沖縄・小笠原諸島等は捕鯨船ばかりでなく、商船航海者たちも緊急避難先に日本人の想像を超える海洋地図を熟知していた。

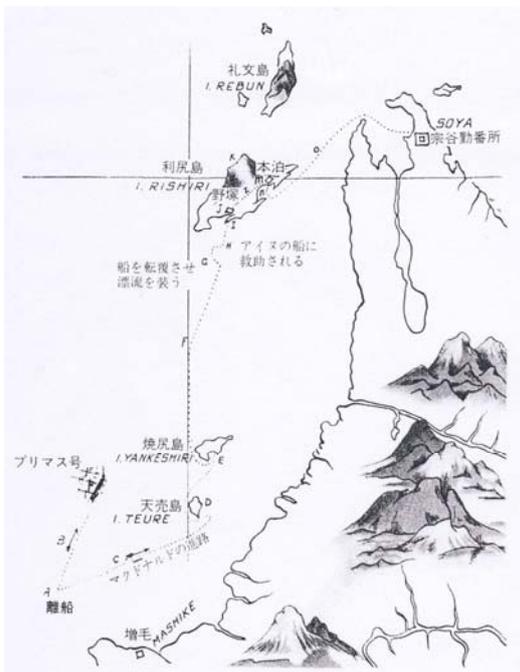
その様な時代背景のなか、ペリー来航の 5 年前の嘉永元年(1848) 6 月 27 日(グレゴリオ暦)、1 人の 24 歳のアメリカ青年「ロナルド・マクドナルド」が北海道西北部にある焼尻島^{やぎしり}に上陸し、2 日間過ごしてみたが、人の気配が感じられないので、7 月 2 日利尻島の野塚に再上陸したところ、多数のアイヌ人の男女と子供たちに迎えられたのである。この人物こそが日本英語の祖となるロナルド・マクドナルドである。この人物を知ったのは 2007 年、筆者が利尻島に訪れた時、利尻島郷土資料館で、『マクドナルド「日本回想記」』の書に出会った。そして、利尻島郷土資料館のマクドナルドについて次の様に説明している。

《 鯨が開いた鎖国の扉 ロナルド・マクドナルド、利尻島密入国 時は幕末、鎖国政策下の日本に潜入したマクドナルド。捕鯨基地ハワイから日本の北方域に向かう捕鯨船の船員になり、漂流民を装って焼尻島^{やぎしり}を経て利尻島に渡りました。嘉永元年 7 月 2 日、利尻島に上陸したマクドナルドは、日本を目指したのはハワイの捕鯨基地で接した日本の情報からでした。それは弘化 2 年(1845)、太平洋の小笠原諸島や鳥島などで、22 人の日本人漂流民を助けて、江戸湾に入ったアメリカの捕鯨船マンハッタン号のクーパー船長が新聞に載せた記事でした。異国人に救助された自国の民を受け容れない国、異国人を拒んでいる日本は、開かれつつある



若き日のマクドナルド・1853 年
帰国時銀板写真 29 歳

世界の中で、何時か開国になるであろう、日本国とはどのような国なのか、自らができる事を探ってみたい、これが日本への密入国の目的でした。長崎に10月13日着いたマクドナルドは、座敷牢で渡航目的などが尋問されました。オランダ通訳の森山栄之助は、先のマンハッタン号のクーパー船長の来日の時、英語通訳で苦戦し、通じないオランダ語よりも、捕鯨船が持ってくる英語の必要性を感じて、14人のオランダ通事たちはマクドナルドから、英会話を7ヵ月間教わりました。幕末の日本とアメリカの捕鯨漁が、鎖国の扉を開いたのは鯨であり、幕末の課題は北の歴史から見えてきます。》と説明されている。



図①



②

①・西蝦夷(北海道西部)の地図(マクドナルド原図)利尻島で10日滞在、宗谷勤番所から8月25日(日本・7月26日)江差へ向かう、9月7日(8月10日)13日間かけ松前藩へ到着し、夕方松前を発ち江良町村(現松前街江良)到着する。松前で25日間の順風を待ち、10月1日(9月5日)より日本海沿いを航海、10月11日、9日間で長崎へ到達となる。②・マクドナルドの愛弟子森山栄之助(左)1853年ペリー来航時の幕府の大通詞時代の写真。

★右の利尻島の利尻富士は遠方からでも、この様に海の上に浮かんで見える。遠路はるばるやって来た航海者たちは、この利尻富士を目印にし、これ起点に樺太や北海道の位置を確認し航海していたのであろう。①図でも山の頂が分かる様になっている。



ラナルド・マクドナルドの生い立ち 彼は1824年2月3日、現在のオレゴン州のアストリアで生まれた。ここには当時イギリスの独占的毛皮交易会社ハドソン湾会社の出張所があり、この一帯は長い間英米両国の係争の地、1846年マクドナルドの留守中に、オレゴン協定によりアメリカ合衆国領となる。彼の父はスコットランド生まれ、22歳の時、カナダに渡り、31歳の時ハドソン湾会社の書記になり、同社コロンビア川地区に赴任する。母はコロンビア川下流地方のインディアン部族チヌーク族の族長コム・コムリとスカポーズ族の間の娘で、マクドナルドを生んだ後、数カ月で他界し、彼は義母姉に引き取られた。

当時米国の地に日本人3人の漂着者がいた 1834年頃、日本の千石船宝順丸がフラッター岬に漂着した音吉、久吉、岩吉の漂流者3人が、ハドソン湾会社の船ラーマ号に救出されていた。マクドナルドは3人の日本人漂着事者らには会っていないらしいが、情報を聞き、日本国と日本人についての強い関心を抱いていたようである。

少年から青年期 父は息子ラナルドについて、「チヌーク族長の血筋を引いた特別な人間で、親世界で偉大な人物になるよう運命づけられている」と語り、又、一方では、「混血児である息子がカナダ社会で成功することのむずかしさ、・・・」と案じてもいた。父には、人並みの教育を受けさせ、社会に送りだしたい希望と、混血児である息子の前に立ちはだかる白人社会に偏見と差別の障壁を、息子が乗り越えていけるかどうかどうか、白人の父親は不安を抱いていた。

ラナルドは1841年夏頃、父との確執を察し、誰にも行き先を告げず旅立つ。彼は就職問題で、社会的差別を痛いほど味あわされていたことが、全てを捨てて旅に出たようである。

放浪の末に日本を目ざす 彼はミシシッピ川を下る蒸気船の甲板員や、奴隷貿易船等の船乗り経験もし、1847年秋にハワイ諸島で捕鯨船の船乗りとなる。その仲間たちの話から、日本への知識を吸収して、次第に日本へ行く気持ちが膨らませていった。当時北米に漂着した日本人たちは、日本側の断乎として受け取りを拒絶され、砲火を浴びせられて追い帰された事情を、『原典アメリカ史』でラナルドは読んでいた。

『マクドナルド「日本回想記」』4章の「神秘の国日本」に《この国民がみずからの

愛する島々の周りにめぐらした砲火の壁だった。日本国民！彼らこそ既存の諸国民のうちでも最も古い国民であり、また愛国的団結の最も強固な国民である。優れた戦士的な民族である彼らは、世界のあらゆる強国をも——フビライ汗からも今日まで——みごとに撃退し、敵を国土に寄せ付けなかったのである。古めかしい東洋の「ユートピア」！昔のアラビアの物語にでてくる伝説上の「ワク・ワク」（中世アラブ世界、東方の彼方にある土地、ワクワク島、日本の古名倭^わ国）の民族、現在の人類中もっとも古い民族。はるかな豊饒の海によって岸边を洗われ養われる「東方の島国」帝国。驚異にみちた大洋のなかの驚異！ちょうど我々は反対側の岸边に住み、はるかかなたの沖合いに探索の眼をみはる我々にとって、それはいつも強い好奇心の的だった。その国民はどんな国民か。生活習慣は、黄金がきらめき、——。以上の疑問や関心は、北アメリカの利害関係を支配する、当時の実際政治家たる先輩たちの間でしばしば話題となった。それはまた、若く生まれつき感受性の敏感な私の心へ深く入り込んで、もろもろの思考と熱望をかってに育て上げ、私は憑かれたように——私はどれほどの努力を払っても、どれほどの生命の犠牲にしてでも、できるならば、この神秘日本を自分で解いてみよう^と心に決めた。さらに彼の胸には、母方のインディアンの祖先は、もともと大洋のかなたから来た、という伝承が蘇ったであろう。彼は日本に来て耳にした日本人の言葉の多くは、「たぶん私の母方の祖先を通してきたものか、私にはなじみ深いものに響いた」》と述べている。

『マクドナルド「日本回想記」』11章「森山栄之助②写真」《彼は、私が日本で会った人のなかで群を抜いて知能の高い人だった。彼は青白く、考え深い顔つきで、人を射るような黒い眼をしていた。その眼は、魂のなかまで探し出し、あらゆる感情の動きを読みとるように思われた。彼の英語は非常に流暢で、文法にかなってさえいた。発音の仕方は独特だったが、日本語とは異質な文字と綴りの組合せを、驚くほど見事に駆使していた。彼はその後、私が日本に滞在している間中、私の日々の伴侶、愛すべき伴侶となった。・・・》

『同書』14章「座敷牢から見た日本」《私の14人の生徒たちについて——彼らは驚くほど英語が上達した。その理由は、彼らがこの課業にまじめに取り組んだこと、また彼らのもの分りよさや学識の広さは、なみなみならぬものであり、あるも

のなどは驚異的であったこと、にある。彼らの心は並はずれ鋭敏であり、かつて私はうぬぼれて「目から鼻に抜けるほどだ」と自負していたが、その私をはるかに凌駕するほどである。・・・》と記す。

ラナルド・マクドナルドはオランダ通詞14人のクラスに英語を教えた期間は、約7カ月となり、日本に滞在期間は10カ月となっていた。そして、1849年4月26日アメリカ合衆国当局に引き渡された。その5年後、ペリー率いる米国合衆国海軍東インド艦隊が来航し、翌年「日米和親条約」が締結される経緯となるが、そのペリー提督との通詞役は、マクドナルドの英語発音を教えられた14人が会議を取り仕切ったのである。又、同年10月14日、イギリスとの間にも同様の14人の仕切る会議が「日英和親条約調印」の締結となる。

日本は捕鯨船の薪水・食糧調達問題から、強引に開国させられたのであるが、その時は、世界の経済の動きは鯨油の時代から、石油の時代へと激変して行くのである。(参考にした資料・『マクドナルド「日本回想記」』ウィリアム・ルイス、村上直次郎編・富田虎雄訳訂・刀水書房。『黒船前夜の出会い』平尾信子著・NHKブックス)

2017年6月梅雨入り

—終—

自己紹介

池田 ^{かつのぶ} 勝宣

1942年、神奈川県藤沢市生まれ

歴史シリーズ

電子書籍版『義経不死伝説の声を聞く』2011・5

同 『仏教伝来の道物語』2011・12

同 『“ジンギスカン即源義経説”流布の顛末』2014・4

同 『日露戦争への列強の策謀』2016・6

同 『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処からきたのか』2017・1

同 『アムール下流域ヌルガン都司^{とし}と永寧寺碑と先住民族たち』2017・6